

「うむ」と唸つて、ぐつたりと胡坐に成り、がつくりと首を垂れる。

「何うしました、何うしました。」

烈しく耳の許で叫んだ。

顔を上げたが、紫色の唇をへし曲げて、血走つた眼で熟と視めた、凄い面色。

「はあ、提灯か。」

「提灯ですよ。」

と、力を籠めて懇に私は言つたが、さて後で考へると、可笑な問答。なか／＼以て、其折から笑ひ事ではなかつた。

「僕は、僕は、」

と息を切つて、

「孤家の灯だと思つた、……ぢや君の前へ山の上から落ちたんだね、酷い目に逢つた、九死一生です、助けて下さい、此處は何處です……」

と、言ふことは取留めないが、氣が狂つた、と言ふ様子も見えぬ。

「若荷谷ですよ、小石川、小石川若荷谷の二階家の貸家だ、貴下、」

トぱつと花火が出さうにきよろ／＼する……

「確乎なさい。」

「はあ。」

「分りましたか。」

九

「二階です、二階です、此の二階です。」

と少時してから、若い男は階子の二段目に腰を掛けて、大息を吐いて話した。

「此の二階は、六疊、三疊の二間です。段を上り切つた處に、小窓があります。丁ど船底の明窓と云つた切方で、何しろ暗くつちや分りませんから、取附きに、まあ、其を開けました。最う一つ硝子戸が入つて居ますが、下町かけて一面の見晴しで、すつと品川の海が見えようと云ふ工合が、益々船底の窓らしい。妙に高い、四方切立ての家ですからね、大方此の低い地面に建てて見晴を賣物にしたものでせう。其で埋合せをつけた……何故かと言ふと、其のかはり、土地不相應で、空地も庭も何にもない、明取りの申譯に、其の障子の外に些とばかり、」

貸一家覽

「其も何です、隣家の長屋と、つい目と鼻の間で、お刺に境界と言つて、一寸袖垣があるばかり。」

僕が此處へ入つて、突然障子を開けた時には、其の袖垣から島田髻が見えて、一寸覗くと、十九か二十ぐらゐの温順しさうな好い娘が、何か衣服を縫つて居たのが、一つ内で、遠い次の間ほど間がない。餘り唐突に近い處に居るもんだから、僕は何です、自分で慙う、女の面でも冠つたのかと思つた。柴の垣に雪がちら／＼するやうで、それだけでも極めようかと思つたほどです。

それから二階へ上りましたがな。

今日は薄曇りで、どんより灰汁色をした明が、泥水のやうに其の小窓から浸込みました。最う、薄暗くつても見えるから、小窓と、差向ひの襖を開けると、三疊で、——此が通から路地の突當りに見着きよく人の目を引くんですね。——玄關の上へ突出したやうに成つて、欄干がついて、一寸した縁もある……廻り縁で折曲つた形に、亜鉛の雨樋が、仰々しくかゝつて、硝子窓を取廻した棟が眞四角で、見上げるほど高い。これで色硝子を嵌めると、凹字形の二階へ、橋の懸つた宿場の大籠と云ふもんです。

其の三疊も、一體宙へぶら下つたやうで變ですがね、……最う一間の、六疊と言ふ方、……これは尙ほ奇抜です。……丁ど此の階子段の突當りが其の入口で、唐紙の扉が一枚、其の明窓に附着いた壁の中へめくれ込むやうに成つて開く。一寸見には此の方が三疊の小部屋に見えます、が

別に其に不思議はありません、——をかしいのは、トンと一段ばかり、頂を切込んだと言つた形に低くなつて、浅い六疊の穴に見える、ト閉込んだ處だから、ねんばりした木の香がべたくと絡ひつくやうに、強くむつと来るんです。雨戸も障子もびつたりでせう。一枚口から、窓の明が射すんだけれども、それも明が折込んで入る形で、如何にも暗い。

暗い中に、大晦日の風が風いだやうに、疊が青々と浮上つて、敷居際より一寸ばかり高く見えて、又其の、眞新しい香がする。へりの麻の香もする位だつたんです。

で、熟と覗込むと、其でも晝間ですものね、障子に切組んだ硝子を透いて、白い雨戸の木目が見えます。

爾時目に着いた、……固より掛物も何にもない、床の間の壁が、茶がかつた萌黄色だ、と思ふと、横に袋棚があつて、金地の戸が嵌つてます。

背を、陰氣な春の暮方の色をした……窓帷のやうな壁で包まれ、袖を、其の金の戸で劃つた、床柱の前、違棚との繼目の處に、端然として、正面に向いて、坐つて居る婦人があります。」

「婦か、」

と私は摺寄つた。

「え、空屋の、貴下、手を立てたやうな階子段を上つて、窓はあるが、そりや僕が開けた——」

何處も閉切つた、むせるやうな木の香の高い、濕つぽい、青い、其の沈んだ部屋に……餘り思ひ懸けないぢやありませんか。

我武者羅の僕も悚然としました。が、婦の居たのを怪しくつて恐いんぢやない。見た處が、其が、美しいで、餘り美人なんで、凄かつたんです。

十

「けれども構ふもんですか。のさく入込んで、其の前を少し離れた、右つ手の壁へ凭れながら突立つたんです。一重外は羽目でせう。上の……」

と二階を指して言つた。が、顔は固く成つて振仰ぎはしなかつたのである。

「其の小窓から見える處で、

(君、君。)

と無遠慮に聲を懸けたんです。

(矢張、家を見に来たかね。)

ですが、返事をしなかつた。無論、こりや當前で。けれども、失禮だとも亂暴だとも思ふやうな僕ぢやないので。

(わえ、おい、貸家を探すのかよ。)ツツて、背中を摺下ろしながら、其處へ片膝を支いたんですね。見返りもしないで、圓鬚らしい、高く結つた髪を靜に、雪のやうな、顔で、頭を振つた。年増め、二才扱ひにしやがるな、と僕は癩に觸つて、

(だつて、おい、空家へ入つて一人で坐つてるのは可怪しいぢやないか。己が家主なら、何うする。君? 其とも其方が家主の女房か。)

と憚らず高笑ひをした……

(私は、隣家、の、もの。)

と一言づつ、句切つて、判然した、清いが、少し含聲で言つて、はじめて些とばかり伏目に成つたんです。が言葉つきが何うやら僕なんぞは、小僧兒だと思ふか、それとも蔑んでか、妙に威を見せた澄ました調子の、其の癖、何が口惜くつて、異う俯向くんだらう。と熟と見る。と何、ふうぢやない。……膝の上に、帳面だか、手帳だか、小形の横本を置いて、膨りした臉の裏へ、恠う字を吸ひ込みさうに視めて居る。片手に、細い煙管を持つたんです、其が何です、燈心蜻蛉を撮んだやうに薄りと……銀らしいのが、あの幻の羽で、膝の本も其の通り、蠟で描いた風に、浮出しながら陰のやうで。

大概、これだけでも、可怪しく思はねばならないのに、まだ、希代な事は、其の婦が坐つた前

に、香箱つて奴を拵へて、猫が一匹。

「猫は、黒猫ですか、斑で、」と聞いた。

「否、然う思ふと女の顔です。」

「え、」

「まさか、如何に僕だつて、猫の顔が女ぢや、やあ、とか、わあとか、叫ばずにや居られませんかよ。と見ると、犬張子——あの、黛を描いた、莞爾した、擦つたい顔で、人魚が能装束をした形、あれです。」

「思ひもかけない處に、凄いほど美しい婦が一人、其の態度で、氣高く控へて、前に犬張子を据ゑた、と言つたら何と考へます。——あやしいものと思はなければ、強ひても高家の姫君か、夫人か、何かの洒落をするのだ、とお思ひでせう。」

處を、僕は私窩だ、と思つた。

(あ、隣家の、……ぢや、あの裁縫をして居た娘の姉さんか。)

本を見ながら、額くではありませんか。

「的切だ。で、見て居る本は玉帳だ、と不埒な事を。」……

と言ひかけて、じりりと煮え立つ蠟燭に、颯と白面を赤らめたが、

「第一服装ですが、手が動けば玉が輝く、袖が振れば蘭奢が薫る。羽織は着ない……衣服はと言ふと、薄い藤色の地に、影のやうな紫の艶が照つて、帯の底が黄金色に光るんでせう……」

濕地に、倭い、薄暗い、蟋蟀箱のやうな、あの長屋の、姉の方にしろ、何にしろ、こんな風采が出来るものか。

何處か盛場の商賣人が、親許へ遊びに来て、空家に籠つて、情夫の事で物思——はよく見た方で、悪くすると、隣だから可い僥倖に銜へ込んで、客を歸した跡だらう。

すると、裁縫をして居た妹の方も同じく賣るぞ。可、あの容色を見ただけでも、腹の中ぢや引越すことに先刻から極めてある。おもしろい、牡丹と芍薬、両手に提げて、階子の中段でおのれ一番、獅子の狂ひを見せて遣らう。

(姉さん、僕はね、華族の次男で、勘當された宿なした。東京中駈廻つても住めるやうな家がなかつて、最う草臥れて動けやしない、此處で寝かしちやくれないか。)

婦の裾の方へ足を向けて、横から、面を視めながら肱枕で倒れかゝつた。」

「あるべき事とは思ひますまい……しかし事實です。今日と云ふ今日は驚きました。懺悔だから

聞いて下さい。何しろ逢つたばかりの婦人に、自分で華族の次男だと、名告を上げるのも可笑しなもんですがね、大抵の婦人には又不思議に利く。過般も、其の調子で、何と、………

………経験があるんですね。
其に又、華族も次男も眞個なんで、不品行のために、家は追出されて居る身分ですがね、………母の内證の仕送り、何三人や五人のくらしには不自由しません。其の手當で勝手放題、一人で轉がつて居たんですが、些と下宿屋にも飽いたから、家を持つて見ようと思つて、探して居る矢先なんでせう。

今言ひまして、其處へ大の字に成らないばかり、傍若無人に寝轉んだけれども。目のふちを桃色にもしなければ、頬のあたりを蒼くもせず、澄まして、其の小本から目を離さずに読んで居る。落着きさ加減が憎いから、むつくり起返り状に、

(お見せ。)

と言ふと、引手繰つた。何か、言はれない、手弱い、柔かな、絹のやうなものが繋つて居るやうに思はれて、本は僕の手へ來たんです。

爾時、白魚のやうな婦の指が伸びたんですが、不可い、と追つたのぢやない。手は膝の前の犬張子に懸つて、あの蓋を、女の童と言ふ奴を、胴切にしたやうに横へ取つた。

僕は本を見ました。開いてた處が、………

木曾路之記

日本橋より板橋へ 二里 大傳馬町 本荷百十二文 南傳馬町 から尻七十文

日本橋より左の方に御城見ゆる右の方は本舟町さかながし也室町三丁目十軒店白銀町今川橋のり物町鍛冶町二丁鍋町新石町須田町右にすぢちがひ御門是より上野坂本千住へも行く也日本橋より十二丁昌平橋を出て直に行けば湯島天神也池のはたへ行く左の方板橋道なり坂を上りて神田明神聖堂湯島五丁目なり四丁目左に馬場あり本郷六丁目森川宿より追分左にけいせいがかくば駒込通り王子岩ぶち日光道中也左板橋道竹町七八丁行く左り坂あり坂下右に白山ごんげん駒込の末染井竹町より直に行くおかこ町すがも町左の方に地藏あり是江戸入口くにある六地藏なりすがもを出て左右板橋まで畑なり左に道あり四ッ谷赤坂邊へ行くに近し是より雜司ヶ谷へ近し板橋近くなりて一里塚平尾此間に川越道あり

板橋よりわらびへ 二里 本陣 飯田新左衛門 本百十二文 問屋 藤三郎 八郎 右衛門 から七十文

………標題に僕の苗字があつた。

と渠は云つた——固より一寸見たばかり、悉しくは讀みもせず、且つ細かに覺えて居て、爰で語つた次第ではないが、あり合せの道中記から一面、倅を寫して置く——尤も其の木曾路とあつ

たのは忘れぬと言ふ。――

「馬鹿々々しくつてね、……」

「何だ詰らない、僕は又、ナニかと思つた。」

「ばらりと投返すと、薄いが、襦の深い、膝に乗つたのを見向きもしないで、袖の筋をしなやかに、忘れた風に、袂の許へ仰向けに持つて居た煙管を上げて、上から俯向けにして、スーッと其の吸殻を、今蓋を取つた犬張子の胴へ落す、と心持頬が細つて、美しい眉が判然しました。艶麗さが、又見勝る。」

（よう、おい、姉さん、命がけて頼むんだ。）

否應は言はせまい、死物狂で迫りました。

静に一服吸附けながら、

（命がけとは、死でも可い事。）

（當前よ。）

と言つた時、其の何です、……今落した吸殻が、犬張子の中で幽に燻つて、變な臭が芬と來た。

（をかした、人を焼く臭がする。）

（それが厭で、生命がけになれますか。）

（うむ。）

と僕は目を睜つたが、

（大好よ、可い香だ。）

と婦の膝の上へ手を置くと、藤色の影が紫に甲に映つて、ヒヤリとしました。

（では、其れでは）

と柔かに衣の揺れたトタンに、火のついた煙管を僕の手へ載せようとする！

十二

「吃驚して手を引込ます。」

（卑怯だね。）

と煙管をさして、筒ごと帯へ挟むのが、乳の下へ消え込むやうに失くなる……道中記は、袖を返して袂へ入れたが、此のくらの重さでは振も亂れず、其まゝすつと、立つと、床の間の壁に衣服が薄く、袋棚の金地の戸に帯が濃く、雲と空と分れて映つて、澄まして出て行くぢやありませんか。

腰を支いて、呆氣に取られて見て居た僕は、總身火のやうに成つて、赫と起きた。

(焼け！ 焼け！ さあ、己を焼け！)

ツて喚くと一所に、ドンと膝摺に飛絶つて、今、一段上へかけて山鳥の亂れた裾を、しつかりと、押へるより、捌くのが軽いこと。蹴出し棲が花野を包んだ霧のやうに、此方の袖を掠めた、と思へば、雪の足首が翻然と上つて、立ち直ると、さすがに揺れたが、一筋も亂れない鬢の毛に手を掛けた……今思ふと、手袋ではない、淺葱の絹の手甲を掛けて居たのは變でせう……而して、あの小窓の前から肩越に見返つた姿が、明い處で、却つて灰汁のやうな其の空の色に曇つて見える。

(焼けよ、焼けよ。おい、さあ、煙管で焼け、火で焼け、炎で焼け。)

と取らした裾のあとの、敷居を引摺んで其一段低い座敷の隅から、扉を覗いて、見上げて叫んだ。眉は釣るし、疵は裂けさうなんです。……男にも婦にも、こんな侮辱を受けたことは生れてから嘗てない。口惜くつて、癩に障つて、肉も粉に骨もめり／＼と碎けさう。眞個、薪を積むんなら、自若として焚かれて見せう、と然う思つた。

と熟て見て居ましたがね、莞爾して、

(私は不可い、妹を……)

ツてあやすやうに頷いたんです。——湧上る血は少し冷えた。何の道兩手に花なんだ、中年増

め、汝、今に見ろ、唯置くものか。で、

(相手は選ばん。おや妹に焼かせて遣る。)

それから、衝々と此の梯子段を下りるのを上から見ると、光のない婦人の形の星が流れるやうでしたつけ。

後について、其處の明取の縁へ出た時、婦人は最う袖垣で帯を仕切つて、肩を見せて、後姿で立つて居ました。横合から透かして見ると、片袖が、其處にせつせと針仕事をして居る、妹の、針の運びに俯向いた、其の顔の蔽に成つて、美しい島田の根と、白い襟ばかりが目につく。

(うむ、談判中だな。)

で、何です、故と素知らぬ顔で、縁側へ踏み込んで、鬨は此のくらなるな光線が詭だ、などと、勝手次第な了簡で、隅々は最う暗い、袖垣などには夜の色が染み込む、雀色時の其處の小庭を、熟と視めて居ましたがね。

(あ、能く出来た、まるで、深山幽谷の状だ。)

思はず獨言を言つたんです。

「は、成程。」

私は時に固唾をのんだ。

「芥だらけの、濕つた庭の眞中處に、誰が拵へたか、小さな築山がある、……土を装つて石を積んで、雜木を植ゑて、下に金魚鉢ほどの、しつくひ叩の池がある、と言へば其れまでですけれども、其の石が、妙義榛名の巖とも見えれば、檜ヶ嶽の峰にも擬ふ。青苔の煙る風情が、淺間が嶽、霧島山の霞むやうで、樹も又、秋葉の森、羽黒、葉山に相應しい。路がついて、坂がある、梢で切れて又續く、續いて中斷えがして空へ幽に繋がる、と視る中に、——蟻のやうな木挽も居れば、炭焼の小屋の松毬の如きも見える……やがて泡のやうな、白い小さな雲が、ぼつ／＼と湧いて、森の中、谷陰に、白粉を流したやうに擴がつて、路も峠も、木樵の姿も、炭焼の小屋も隠れた、と思ふと、……谿河の微な音も、幽な松風も、ひっそりと止んで、寂と成る。……其の内、點々口紅を打つたやうに、何處の谷へか、灯が點くではありませんか。

人間界を離れたやうだ。吃驚して、

(おい、煙草の火をくれ。)

フト自分に返つて、談判の催促かた／＼呼んだんです。

何うでせう、すつと、築山の上へ、宙な處へ、向うから煙草盆が出ました。僕は天上から振下つたのかと思つた。驚いたのは、其を持った女の手の大きいこと、五つ並んだ雪の峰を見るやうなんです。

はつと思つたが、何の、山を見た目がちらつくんだらう、……しかし、一寸でも驚かされたのが、口惜いから、

(こんな火で焼けるものかい。)

つて、向うへドンと突いた、煙草盆はぶらりと動いた。

婦が袖垣へ袂をかけて、片脰をソツとついて、眞白な片手で招く。

幾ら何でも、青樓へ下駄を穿いては入れん、と同時に、私窩宿だつて、跣足では跳込めますまい。庭が、ですな、差出す煙草盆は、中途で手が行逢ふんですが、袖垣があるだけに跳越せません。

婦人が其時、垣の間から築山の上へ渡して、四角な板をかけました。渡れ、と言ふ。それが、あの、裁板だつたぢやありませんか。

積つても知れる。どんなに狭いたつて、金魚鉢でも、池さへある。此の板が向うから届くわけはなかつたんですが、何、其處へ氣の付くくらゐなら、最つと目の覺める事は澤山あつた。

さあ、踏掛ける、と一方が最う暗く成つた、暗いのが樹立なんです。見上げるばかりの大樹巨木が參差ある。おや、と後退りを遣ると、向うの巖がぐら／＼と揺れる。……驚いて、飛ばうとすると、目の下へ、雲のかゝつた尖がった峰がぬいと出て、あつと眼が眩むと、恐しくむせ返つ

たは硫黄の臭、虹の兩端、雲の中から燃えはじめ、足許へ焰がかゝると眞逆様に落ちたんです。が、自然と我に返つてからも、名も知らず、所も知らない、深山の崖を傳ひく、暗の中を何れだけ歷廻つたか分りません。貴下の灯を認めた時まで、大方、幾度も二階へ上下りしたのでせう。……

と溜息をほつと吐いて、

「僕は何を言つて居ます、貴下には分つたでせうか。」

と覺束ない目を見据ゑた。

提灯が、ハツと消えた。戸外はざつと氷雨に成つた。

私から差配に話すと、佐々木源兵衛、帽子の上から額を壓へて、歎息した。

「何とも何うも……昔から、此の臺町筋、白山の暗の空、巢鴨、庚申塚、板橋をかけて木曾街道

へ、其の通り魔の歩行く路で、異形なものが時々見えます。状々工夫をして建直すですが、魔の

ためには、並木の掛茶屋と云ふ家相でがすかな。」

差配は、それ以來、お美嘉に對する邪念を絶つた。飛だ人の妹分で指もさせぬ。

後で知れたが、裁板と、煙草盆のひとりて歩行いた、と云ふ、其だけは、婦の浅い智慧ながら、

お美嘉親子が、折を見て計らつた造事である——種々かせを懸けられて其の長屋を引越せないの

で、恐しさに託けて、差配の手を遁れやうためであつた……

お美嘉は日を経て、子爵木曾の次郎の夫人に成つて、其のあやかしの恐いた二階家に住んで居る。が、娘は聊も恐れない。其の時の美しいのは、貞操の權化で、處女を守護する女神のやうであつたから。

海の使者

何心なく、背戸の小橋を、向うの蘆へ渡りかけて、思はず足を留めた。

不圖、鳥の鳴音がする。……如何にも優しい、しをらしい聲で、きり／＼、きりりりり。

其の聲が、直ぐ耳近に聞えたが、つい目前の樹の枝や、茄子畑の垣根にした藤豆の葉蔭ではなく、歩行く足許の低い處。

其處で立佇つて、一寸氣を注けたが、最う留んで寂りする。——秋の彼岸過ぎ三時下りの、西日が薄曇つた時であつた。此の秋の空ながら、まだ降りさうではない。櫻山の背後に、薄黒い雲は流れたが、玄武寺の峰は淺葱色に晴渡つて、石を伐出した岩の膚が、中空に蒼白く、底に光を帯びて、月を宿して居さうに見えた。

其の麓まで見通しの、小橋の彼方は、一面の蘆で、出揃つて早や亂れか、つた穂が、霧のやうに群立つて、藁屋を包み森を蔽うて、何物にも目を遮らせず、山々の茅薄と一連に靡いて、風は無いが、さや／＼と何處かで秋の暮を囁き合ふ。

其の蘆の根を、折れた葉が網に組合せた、裏つたひの畦路へ入らうと思つて、やがて踏出す、と又きりりりりと鳴いた。

「何だらう。」

蟲ではない、確に鳥らしく聞えるが、矢張下の方で、何うやら橋枕にでも居るらしかつた。

「千鳥か知らん。」

いや、磯でもなし、岩はなし、其の留まりさうな浮標もない。有つたにしても、恚う人近く、羽を驚かさぬ理由はない。

汀の蘆に潜むか、と透かしながら、今度は心して最う一步。續いて、がた／＼と些と荒く出ると、拍手に掛つて、きり／＼きり、きりりりり、と鳴頻る。

熟と聞きながら、うか／＼と早や渡果てた。

橋は、丸木を削つて、三四本並べたものに過ぎぬ。合せ目も中透いて、板も朽ちたり、人通りにはほろ／＼と崩れて落ちる。形ばかりの竹を繩捌げにした欄干もついた、其も膝までは高くないのが、往還り何時もぐら／＼と動く。橋杭も最う瘦せて——潮入りの小川の、なだらかにのんびりと薄墨色して、瀬は愚か、流れるほどは揺れもしないのに、水に映る影は弱つて、倒に宿る蘆の葉とともに蹠踉する。

が、如何に朽ちたればと云つて、立樹の洞でないものを、橋杭に鳥は棲むまい。馬の尾に巢くふ鼠はありと聞けど。

「何うも橋らしい。」

最う一度、試みに踏み直して、橋の袂へ乗返すと、聲音とともに、忽ち鳴出す。

(きり／＼きり、きりりりりり……)

餘り爪尖に響いたので、はつと思つて浮足で飛退つた。爾時は、雛の鶯を蹂躪つたやうにも思つた、傷々しいばかり可憐な聲かな。

確に今乗つた下らしいから、又葉を分けて……丁ど二三日前、激しく雨水の落した後の、汀が崩れて、草の根のまだ白い泥土の缺口から、楔の弛んだ、洪水の引いた天井裏見るやうな、横木と橋板との暗い中を見たが何も居らぬ。……顔を倒にして、捻向いて覗いたが、ト眞赤な蟹が、さわ／＼と動いたばかり。やどかりはうよく／＼數珠形に、其處等暗い處に蠢いたが、聲の有りさうなものは形もなかつた。

手を拂つて、

「は、あ、岡沙魚が鳴くんだ。」

と獨で笑つた。

中

虎沙魚、衣沙魚、ダボ沙魚も名にあるが、岡沙魚と言ふのが有らうか、有つても鳴くか何うか、覺束ない。

けれども爾時、唯何となく然う思つた。

久しい後で、其頃藥研堀に居た友だちと二人で、木場から八幡様へ詣つて、汐入町を土手へ出て、永代へ引返した事がある。其も秋で、土手を通つたのは黄昏時、果しのない一面の蘆原は、唯見る水のない雲で、對方は雲の無い海である。路には處々、葉の落ちた雑樹が、乏しい粗朶の如く疎に散らかつて見えた。

「慙う云ふ時、こんな處へは岡沙魚と云ふのが出て遊ぶ。」

と渠は言つた。

「岡沙魚つて何だらう。」と私が聞いた。

「陸に棲む沙魚なんです。蘆の根から這上つて、其處等へ樹上りをする……性が魚だからね、餘り高くは不可ません。猫柳の枝などに、ちよんと留まつて澄まして居る。人の聲音がするとね、ひつそりと、飛んで隠れるんです……此の上手の名物だよ……劫の經た奴は鳴くとさ。」

「何だか化けさうだね。」

「いづれ怪性のものです。一寸氣味の悪いものだよ。」

で、何となく、お伽話を聞くやうで、黄昏のものの氣勢が胸に染みだ。——成程、そんなもの

も居さうに思つて、略其の色も、黒の處へ黄味がかつて、ヒヤリとしたものらしく考へた。

後で拵へ言、と分つたが、何故か、有りさうにも思はれる。

其が鳴く……と獨りで可笑しい。

もう、一度、今度は両手に兩側の蘆を取つて、ぶら下るやうにして、橋の片端を拍手に掛けて、

トンと遣る、キイと鳴る、トン、きり、と鳴く。

(きりりりり、)

きり、から、きい、から、

きりりりり、きいから、きいから、)

紅の綱で曳く、玉の轆轤が、黄金の井の底に響く音。

「あ、橋板が、きしむんだ。削つたら、名器の琴に成らうも知れぬ。」

其處で、欄干を搔擦つた、此の樂器に別れて、散策の畦を行く。

と蘆の中に池……と云ふが、やがて十坪ばかりの窪地がある。汐が上げて來た時ばかり、水を

湛へて、眞水には干て了ふ。池の周圍はおどろ／＼と蘆の葉が大童で、眞中所、河童の皿にびち

やびちやと水を溜めて、其處を、干潟に取残された小魚の泳ぐのが不斷であるから、村の小兒が、

袖を結つて水悪戯に搔廻す。……やどかりも、うよ／＼居る。が、眞夏などは暫時の汐の絶間に

も乾き果てる、壁のやうに固り着いて、稻妻の龜裂が入る。さつと一汐、田越川へ上げて來ると、

ぢゆうと水が染みて、其の破れ目にぶつ／＼泡立つて、やがて、満々と水を湛へる。

汐が入ると、さて、さすがに濡れずには越せないから、此處にも一つ、——以前の橋とは間十

間とは隔たらぬに、又橋を渡してある。これは又、纔かに板を持つて來て、投げたに過ぎぬ。池

のつゞまる、此の板を置いた切れ口は、ものの五歩はない。水は川から溜いで、橋を抜ける、と

土手形の畦に沿つて、蘆の根へ染込むやうに、何處となく隠れて、田の畦へと落ちて行く。

今、汐時で、薄く一面に水がかゝつて居た。が、水よりは蘆の葉の影が濃かつた。

今日は、無意味では此處が渡れぬ、後の橋が鳴つたから。待て、これは唄はうも知れない。

と踏掛けて二足ばかり、板の半で、立停つたが、何にも聞えぬ。固より聞かうとしたほどでも

なしに、何となく夕暮の静な水の音が身に染みる。

岩端や、こゝにも一人、と、納涼臺に掛けたやうに、其處に居て、さして來る汐を視めて少時

經つた。

水の面とすれ／＼に、むら／＼と動くものあり。何か影のやうに浮いて行く。……はじめは蘆の葉に縋つた蟹が映つて、流る、水に漾ふのであらう、と見たが、あらず、然も心あるもの如く、橋に沿うて行きつ戻りつする。さしたての潮が澄んで居るから差覗くとよく分つた——幼児の拳ほどで、ふは／＼と泡を束ねた形。取留めのなさは、ちぎれ雲が天空から影を落したか、と視められ、ぬべりとして、ふうはり軽い。全體が薄樺で、黄色い斑がむら／＼して、流のまゝに出たり、消えたり、結んだり、解けたり、どんよりと濁肉の、半ば、水なりに透通るのは、是なん、別のものではない、虎斑の海月である。

生ある一物、不思議はないが、いや、快く戯れる。自在に動く。……が、底ともなく、中ほどともなく、上面ともなく、一條、流の薄衣を被いで、ふら／＼、ふら／＼、……斜に伸びて流るるかと思へば、むつくり眞直に頭を立てる、と見ると横に成つて、すいと通る。

時に、他に浮んだものは何にもない。

此の池を獨占、得意の體で、目も耳もない所爲か、熟と視める人の顔の映つた上を、ふい、と勝手に泳いで通る、通る、と引返して又横切る。

其が又思ふばかりではなかつた。實際、其處に踞んだ、胸の幅、唯、一尺ばかりの間を、故とらしく泳ぎ廻つて、これ見よがしの、ぬつぺらぼう！
憎い氣がする。

と膝を割つて衝と手を突込む、と水がさら／＼と腕に搦んで、一來法師、さしつらりて、ついと退いた、影も溜らず。腕を伸ばしても届かぬ向うで、くるりと廻る風して、澄まして又泳ぐ。

「此奴、」

と思はず呟いて苦笑した。

「待てよ。」

獲物を、ど立つて橋の詰へ寄つて行く、とふは／＼と着いて来て、板と蘆の根の行逢つた隅へ、足近く、ついと來たが、蟹の穴か、蘆の根か、ぶく／＼白泡が立つたのを、ひよい、と氣なしに被つたらしい。

ふツ、と言ひさうな其の容體。泡を拂ふが如く、むくりと浮いて出た。

其の内、一本根から斷つて、逆手に取つたが、くなく／＼した奴、胴中を巻いて水分れをさして遣れ。

で、密と離れた處から突込んで、横寄せに、そろりと寄せて、這奴が夢中で泳ぐ處を、すいと

搔上げると、つるりと懸つた。

尊菜が捌んだやうに見えたが、上へ引く雫とともに、つるくと迂つて、最う何にもなかつた。

「鮪の燐火、退散だ。」

それ見ろ、と何か早や、勝誇つた氣構へして、蘆の穂を頬摺りに、と弓杖をついた處は可かつたが、同時に目の着く潮のさし口。

川から、さらりと押し来る、蘆の根の、約二間ばかりの切れ目の真中。橋と正面に向合ふ處に、くるくと渦を巻いて、坊主め、色も濃く赫と赤らんで見えるまで、躍上る勢で、むくむく浮上つた。

あ、人間に恐をなして、其處から、川筋を乗つて海へ落行くよ、と思ふ、と違ふ。しばらく同じ處に影を練つて、浮いつ沈みつして居たが、やがて、すい、横泳ぎで、然し

用心深さうな態度で、蘆の根づたひに大廻りに、ひらりと引返す。

穂は白く、葉の中に暗くなつて、黄昏の色は、うらがれか、つた草の葉末に敷詰めた。

海月に黒い影が添つて、水を捌く輪が大きくなる。而して動くに連れて、潮は次第に増すやうである。水の面が、水の面が、脈を打つて、ずんずん擴がる。嵩増す潮は、さし口を挾んで、川べりの蘆の根を揺る、……ゆらりと揺る。一揺り揺

れて、ざわ／＼と動く毎に、池は底から浮上るものに見えて、次第に水は増して来た。映る影は人も橋も深く沈んだ。早や、これでは、玄武寺を倒に投げうつても、峰は水底に支へまい。

蘆のまはりに、圓く擴がり、大洋の潮を取つて、穂先に瀧津瀬、水筋の高く成り行く川面から灌ぎ込むのが、一揉み揉んで、どうと落ちる……一方口のはけ路なれば、橋の下は颯々と瀨に成つて、畦に突當つて渦を巻くと、其處の蘆は、裏を亂して、ぐる／＼と舞ふに連れて、穂綿が、はら／＼と薄暮あひを蒼く飛んだ。

(さつ、さつ、さつ、)

しゆつ、しゆつ、しゆつ、

エイさ、エイさ！)

と矢聲を懸けて、潮を射て駈けるが如く、水の聲が聞なさる。と見ると、龍宮の松火を灯したやうに、彼の身體がどんよりと光を放つた。

白い炎が、影もなく橋にびたりと寄せた時、水が穂に被るばかりに見えた。

びた／＼と板が鳴つて、足がぐら／＼としたので私は飛退いた。土に下りると、早や其處に水があつた。

橋がだぶりと動いた、と思ふと、海月は、むく／＼と泳ぎ上つた。水は次第に溢れて、光物は

衝々と尾を曳く。

此の動物は、風の腥い夜に、空を飛んで人を襲ふと聞いた……暴風雨の沖には、海坊主にも化するであらう。

逢魔ヶ時を、慌しく引返して、舊來た橋へ乗る、と、

(きりりりり)

と鳴つた。此の橋はやゝ高いから、船に乗つた心地して、先づ意を安んじたが、振返ると、もう此も袂まで潮が来て、海月はひた〜と詰寄せた。が、さすがに、ぶく〜と其處で留つた、而して、泡が呼吸をするやうな仇光で、

(さつ〜さつ、

しゆつしゆつ、

さつ、さつ!)

と曳々聲で、水を押上げようと努力する氣勢。
玄武寺の頂なる砥の如き巖の面へ、月影が颯とさした。――

吉祥果

傳へ聞く、大聖世尊釋迦牟尼佛、天竺迦毘羅衛國、猫王山の山奥なる、怪しき孤家に宿らせ給ひし、夜も深々と更くる頃、

「迦葉々々。」とお召しある。

「はつ」と申して、其時御供に侍ひし大迦葉と言ふ御弟子、同じ孤家の一室處に、今しがたまでお傍に居て、偶と戸の外に出でたるが、一寸お召しの御聲と共に、急いで御前に畏まる。

「孰方へ参つたぞ。」

「は、は、餘りの暑さに、咽喉の渴き候處、山清水の流の音、清々しう聞えましたれば、臺下にも差上げたたく、水を掬みに立出でまして、これへ取つて参りました。」と燈も無き星明に、鐵鉢を差出す。

「迦葉、其の水を飲みたるか。」と、心ありげに問ひ給ふ。

「先づ臺下に差上げまして、お後を私が頂きませうと、未だ一滴も飲みませぬ。」

「然あらむには仔細なし。和僧が清き流と思ふは、此の孤家の婦主人が、朝夕の餌食とする、澤山の小兒の血の、小川のやうに流るゝなり。疑はしくば、熟と見よ。」

迦葉が捧ぐる鐵鉢に、掌を翳し給へば、御身の光明暗きを照して、恐しや、どろくと、持つ手も重る黒血の凝體。鐵鉢の周圍に滴る露は、紅のやうな糸を引く。

「あな、無慚や。」と云ふまゝに、かなぐり棄てむと起ちけるを、

「いや、鐵鉢は其のまゝ置け。聽て用ゐる事あらむ。……さて、和僧には氣が着かぬか、遠き納戸と思ふ處に、悲しげなる小兒の泣聲聞ゆるが。」

「仰の通り、絶入るばかり、ヒイ〜と泣きますが、此家の主婦は、千人の子持と豫て承れば、寢魔れましたか、夜泣でがな、と別段心にも留めませぬ。」

「否とよ、尋常ならぬ五音の調子。命に及ぶ悲鳴と聞く。疾く参つて助けて得させう。いざ立て、迦葉、共に來よ。」

と蟲を遮る紙帳も無き、臥戸を其まゝ立出で給ひ、御後に從ふ迦葉と共に、其の泣聲を知るべとして、暗き廊下を幾曲りか、藤蔓の橋を傳ふやう、洞穴の如き山家の勝手を、御胸の内明かに、踏迷ひもし給はず、足疾に衝と過ぎ給ふ。

家の内に小橋を渡し、母屋の棟と離れし一室に、蒼き火影微にさして、泣聲は其處ながら、早

や細々となりてけり。

「それ、今の血の流れ。」

と世尊、低聲にのたまへば、迦葉は足を爪立てて、

「ヒヤリとします。」と渡りける。實にも此の橋の下行く水は、涼しげながら悚然として、血汐の川と聞く所爲か、ツキ／＼と胸に響き、夜陰を貫くばかりなり。

さて、其の離れ屋の戸の隙を、迦葉先づ密と覗き、一目様子を見ると齊しく、吃驚したも道理にこそ。玉のやうな男の兒、清らに肥えて愛々しく、顔立ちも最と美しきを、首筋から胴中かけ、三所ばかりを荒縄以て大組板に仰様に括りつけ、十八九の好い女、見る目も婀娜な美女が、あらう事か禪に及ばず、解いて捌いて颯と掛けた、黒髪を透く膚の色、薄桃色の諸肌脱ぎにて、其の組板に鮮紅の蹴出しをはらりと片膝乗掛け、鋭き刃物の峰を返して、びたりと幼兒の胸に當て、今しも三枚に下ろさう身構。

「や……」と思はず聲立つる、迦葉の物越漏る、や否や、花の顔ハツと見向き、柳の姿が、あらけない、風を起して板戸を突明け、其處に立つたる二人を見るより、

「まあ、お前さん、不躰な！ 人の内へ許しも受けずに、奥深く踏込んで、大事な處を、よくも見た。最う活しては返されぬ、其處お動きでないよ。」とて、飛菟らむする棲捌き、炎の捌むばかりなり。

りなり。

二

驚破、お身の上、と身を以て遮る、迦葉の袖を留め給ひ、

「騒ぐに及ばぬ、静かに……」と世尊のお言葉終らぬ内、矢の如き風の音、大空より落し來て、斜めに吹入る別家の戸口。今飛菟、娘の胸を、向うさまに押戻して、蹠踏めく處を、左右より、颯々と吹奏め、刃物持つ手を眞前に、忽ち兩手を兩方から、犇と壓へて、霧の如く、霞の如く立顯る、黄金の兜召したるは、廣目天の御姿。白銀の兜召したるは、持國天の御姿。

「あれ見よ、迦葉、娘は最早や身動きも叶はぬぞ。」

「こは抑も尊き御有様。」と、迦葉は謹み膝を支く。

二天の大將、目のあたり、我を責むると思ひも寄らず。又淺ましき鬼の目の、兜の星も見えざれば、娘は單におのが手足の打萎まつて身動きならぬに、こは無念なりと五體を悶えて立騒げば、廣目天、持國天、犇々と縛の繩に扱きを掛けて、骨も細れと引緊め給ふ。

「あれ、痛い、苦しい、我慢がならない、切ない。」と、刃物も何時か振落し、倒れも遣らず足折屈め、虚空を擱んで、反返り、雪の膚も蒼う成るまで、燈の影に消えなむとして、

「助けて下さい、お二人さん。」と聲を絞つて泣き叫ぶ。

「お、助かりたくば、其の悪しき心を改めよ。」と、迦葉は屹と諭して言ふ。

「あ、此の上は何とせう。お前さんたち二人の生命は、取らうとしませんから、堪忍して下さいまし。」

「いや、われら二人を害せぬばかりで、其の苦痛は助からぬ。今まで犯した悪い事、罪な事が澤山あらう。懺悔をせよ。」

と迦葉が申す。

娘は絶ゆげな呼吸の下に、

「私は名を摩仁髪とて、取つて十九に成る處女。夫持たねば罪はない。悪い事か、善い事か、私には分らぬけれど、小兒を殺すが悪いとなら、悪い事は澤山しました。慙うして姉さんに世話に成つて、唯遊んでも居られねば、姉が三度の食にする、小兒の料理が日々の勤め。それが悪ければ謝罪ります。此の苦しさは堪へられぬ。あれ、切ない。」

と言ひも敢へず、齒を食切つて手足を煽つ。

「能くこそ處女懺悔した。此の上は唯一言、南無……とばかり稱へて見よ。立處に、其の苦痛は助かるぞ。」

と迦葉の教へに、摩仁髪は、もの思ふ暇もなく、

「南無……」と即座に言はむとするに、不思議や、舌縮まり、咽喉塞がりて、南とも無とも聲には出でず。急れば一層呼吸苦しく、唇の色も蒼褪むる。

「情なや。」

と言へば、言ふ聲の嘎れしにあらざれば、苦しき中にも訝りて、

「不思議な事がござんする。今おつしやつた稱へごとは、私には申されぬ。何うしませう。」と切なさに、涙を流すばかりなり。

「然ればよ、處女、鬼畜の業を心から悪いと悟り、以後は夢にも人の兒を殺すまいと誓を立てて、そして南無……と稱へて見よ。」と世尊優しく悟させ給ひて、此方より徐ら手を以て、摩仁髪の胸のあたりを、搔撫する眞似したまへば、悚然とするほど、難有さ、又尊さの身に染むより、氷の溶けし心地して、

「南無……」と稱ふる其の聲の、最も清しく響くと齊しく、黄金の兜の前立と、白銀の兜の鍔と、差向ひ、ゆらくと、揺るゝが如く領き合ひ、縛の繩引解き、紫の霞を立てて、憂然たる鎧の音、槍の穂尖は晃々と星の流るゝ氣勢して、廣目、持國の二天將、空にぞ上らせたまひける。夢のさめたる面色して、黒髪を床に手を支きたる、處女の姿の、罪を拭ひし清らかさ、天津乙

女の如くなり。

三

爾時、世尊のお指揮に、迦葉は急ぎ組の上の魚なりし、彼の幼兒を扶け抱きて、
「處女よ、これなる幼兒は？」
と尋ねれば、女らしう、今は面を赤らめぬ。

「其の坊ちやまは、然も今日、姉が奪うて参りたる、此の迦毘羅衛國の國王の王子にておはします。飢を凌がむ術には、王子も生捕る私たち、貴下がたの尊きは、日とも月とも申されぬ。今に姉も歸りませう。南無……と一聲稱へてからの、此のまあ、清しい心持。姉にも分けて遣りたうござんす。何うぞ私と同じやうに教へてあげて下さいまし。」

世尊微笑ませたまひつゝ、

「おなじ血統の、和女たち。此の妹の姉なれば、逢はぬうちから頼母しい。如何にも、南無を教へよう、心やすかれ、摩仁髮とか。」

「お嬉しう存じます。」

「迦葉よ、其の王子を伴ひ申せ。」

「は、は、」

「臥戸へ行つて相待たう。」

「さあ、御案内いたしませう。」

と摩仁髮は姿を繕ひ、青い燈手に取つて、恥かしげに前に立つ。

恚くて奥まりたる以前の臥床、取残したる笈と、鐵鉢と、壁の他には何もなき、狭き臥床に入

給ふ。

程もあらせず、ぐわら／＼がらと、戸、障子、襖、鳴りはためき、床も、廊下も打震ひて、つ

むじ風の如く躍込む、凄じき婦あり。

眼血走り、髪逆立ち、電の如き青筋立てて、世尊と迦葉の姿を見るより、手の爪に光を放ち、

十口の劍を一掴みに、

「え、人買ひの拐誘漢、嬪迦羅を返せ、戻せ。私が嬪迦羅を返せ。」と言ふ。

「嬪迦羅とは何者ぞ。」

と迦葉片膝立てければ、爪を逆立て、じり、と寄つて、

「人もこそ知れ、嬪迦羅は、私千人の兒の中に、九百九十九人に代へても最惜き、天地の間の一粒種。生命と思ふ童子なり。今日山巡りの留守の間に、宵の程より姿見えす、岩を飛び、峰を駈

け、眞逆様に谷に落ちて、木の葉の裏の星を取り、清水の底の砂を掴めど、露以て行方分らず。半狂亂と成つて歸る途中、此の家に近き、あの山蔭に、影のやうな沙門の居てイミしが、御身の探す童子の行方は、今宵御身が家に宿れる行脚の僧よく知れり、急ぎ歸つて聞けよ、とあり。聞くも聞かぬも私が兒ぞや。何處へか隠したる。さあ、此處へ出せ、早や返せ。汝等、出家の姿に似ず、拐誘は何事ぞ。其もよし、唯山賤の兒なりせば、泣崩折れても事過ぎむ。私を尋常の婦と思ふや。猫王山を司る歡喜大王の姉娘、訶利帝母と知らざるか。」
と齒齧をして立つたる有様、鬼が鬼に成つたれば、尋常の婦と誰か見る、凄じかりける風情なり。

世尊悠然と遊ばして、

「そなたが餌になさむとて、晝間奪ひし王子を助けて、こゝに同行の膝に抱ける外、兒らしきものは見せす。」

と落着澄ましてのたまへば、頭を掉つたる、黒髮蠢めき、

「嬪迦羅を秘せしは、汝ぞと人も言ふ、私も爾覺ゆるぞよ。凡そ我が家は、床下、押入、目に見えずと言ふことなし。井の中さへ明かなるに、何處へや秘したる。や、其の笈の中さて可怪。彼なくては我片時も活きられぬ。嬪迦羅の顔を見た上で、やはか、汝達活け置かじ。いで〜。」

と言ふまゝに、唯手を支へて首垂れし、妹摩仁髮の肩とも言はず、一躍りに刎越えて、笈に手を掛け、手許へぐい、と塵とも思はず曳かむとする時、世尊御法衣の袖の中に、磐石の印を結ばせ給へば、附木ほどにもなき笈の、如何にやしけむ、山の如く、坤軸より根を生やして、一寸も動かばこそ。

「コハ可怪、然りながら、笈の我手に動かぬは、よも汝達の通力ならじ。我が兒が中に籠りたる、我が恩愛の重さにこそ。よし〜、然らば、唯戸を開けて、抱取らむ。」

と笈の蓋に、諸手を掛けて、掴めど、引けど、捻ぢけれども、爪の立つべき透間も明かず。訶利帝母は見る〜内に、肉、瘦せ、骨露れ、満身紅の汗を絞りて、黒き呼吸を吐いて喘ぎ、「口惜しの我が力、など恚くばかり効なきや。無念なり、然りながら、憎き汝達を殺せばとて、嬪迦羅なくば何かせむ。誓つて仇はすまじきに、唯嬪迦羅を返されよ。」

と言も弱つて溜息つき、呆れ果ててぞ居たりける。

「如何に帝母、千人の子を持ちてさへ、一人の子に身を砕く、今其の思を知りつらむ。況してや人間は、多きも五人、少きは唯一人、十人の子を持つは少なし。既にこれなる迦毘羅衛城の王子を見よ。國王の唯一人の世嗣なるを、會釋もなく奪ひ來て、妹の摩仁髮に料理させ、肉を啖はむとしたるは誰ぞ。いで、其思ひに引較べて、人の親の心を察し、今より以後、誓つて悪業を働か

ず、人の子を啖ふことを、堅く思ひ留まるならば、嬪迦羅を返し得させむ、如何に？」
と世尊の仰せある。

「姉さん、おわびをなさいまし。お上人さん、最う可うござんす、堪忍してあげて下さんせ。
と姉の心を搦む涙、わつとばかりに泣伏したる、處女の情の優しさよ。

「いざ、如何に、今の仰せを聞かれしか。疾く心を離し、南無……と一聲稱へられよ。鬼と
は知れども目前、子を思はる、状を見ては、それがしも落涙した。唯、南無と稱へたまへ。早や
嬪迦羅に逢はれよ。」

と膝を枕に疲れ臥したる、王子の背を擦りつゝ、迦葉も傍より口を添ふ。
「意地も我慢も早や是れまで。妾此の世に生れてより、人の子の肉の外、他に食物の味を覺えず、
今爰に誓を立てて、假ひ食に飢うればとて、嬪迦羅なくば活きるに效なし。唯嬪迦羅に逢はせた
まへ、南無。」

と稱ふる聲より早く、笈の蓋は颯と取れて、燈と輝く光明の、白蓮の蕊に月ある中に、嬪迦
羅童子は莞爾々々と母様の顔を見る、其の萌たさ、愛らしさ。

縋りつき、抱き緊め、片時の思に瘦せたる、乳房を頬に押當てて、現の如く抱占めしが、やが
て摩仁髮に子を預け、其の身は衣紋を繕ひて、

「此の嬉しさを思ふにつけ、顔見ぬ時の悲しさを、尙一層に思遣る。然候へば今までに、夥多の
人の子を取りて、親を泣かせし債ひに、いざ、これよりは猫王山なる訶利帝母の力を以て、あら
む限りの人の子に、鬼も魔も近づけず、病をも受けさせず、悪き夢も見させまじ。なほ其の上に
産婦を守護して、胎内にも恙あらせじ。御佛、力を添へさせたまへ。」と誓はせたまひし、是ぞこ
れ、鬼子母神にておはしますし。
御心は頬に出づる、物凄まじき鬼の面、忽ち變じて端麗微妙、玉の芙蓉の御顔、振仰いで、手
を合せたまへば、
「珍重にて候。」
とて、大聖世尊釋迦牟尼佛も合掌したまふ尊さよ。
世尊かさねてのたまふやう、
「然りながら、食すものなくては叶ふまじ。我よきものを見置きたり。迦葉よ、先刻に参りたる、
あれなる離屋の窓の外に、美しき一樹あり。大なる實を結べり。長へに人の血汐を、其の根に灌
ぎて培ひたれば、味ひ甘く且つ酸くして、人の肉に異ならず、汝行きて取り來れ。」
「はい、私が参ります。」
と摩仁髮が、急ぎ出でて、やがて枝ながら取り來る、實は未だ其の時白かつし。世尊御手に取

神

叢金

りたまひ、彼の鐵鉢てつぱつに装まらせたまへば、立處たちどころに紅玉こうぎよくを嚙かんで、涼すずしき實みをぞ列つらねたる。吉祥果きしやうくわとは是これとかや。我が國くにの柘榴ざくろとぞ。……此この時ときより猫王山めうわうざんの血ちの小川をがはは、甘あまき乳ちの流ながれとなりけり。

朱鷺船 雪枝、菊松 技藝天 采 訝 城ヶ沼 雲の聲

眺へ物 祠 供揃へ バサリ 天守の下 雙六盤 人

さし指 四五六谷 獅子の頭

朱鷺船

一

濡色ぬれいろを含んだ曙あけぼのの霞かすみの中から、姿すがたも振ふりもしつとりとした婦をんなを肩かたに、片手かたてを引ひ擔かぐやうにして、一人ひとりの青年わかものがとぼくと顯あられた。

色いろ眞ま蒼そうで、目めが血ち走ばしり、伸のびた髪かみが額ひたひに被かつて、冠かぶりもの物なしに、埃ほこり塗まれの薄うす汚まれた、處ところ々く鉦かねの斷きりれた背せ廣ひろを被かて、歩あ行くのに踰よ踰よ々くする。

其それが婦をんなを扶たすけ曳ひいた處ところは、夜よ一ひと夜よ迪た々とくしく、山やま路みち野の道みち、茨いばらの中なかを徇さま伴まつた落おち人うとが、夜よが白しろんだやうでもあるし、生いのち命めい懸かけの喧けん嘩わから慌あわしく抜ぬけ出したのが、勢せいが盡つきて疲つか果はてたらしくもある。が、道みち行ゆにしる、喧けん嘩わにしる、其そのの出でて來きた處ところが、遁にげるにも忍しのんで出でるにも、背うしろ後ごに、村むら、里さと、松まつ並なみ木き、巖いわも家いえも有あるのではない。山やまを崩くづして、其そのの峰みねを餘あました狀さまに、昔むかしの城しろ趾あとの天てん守しゆだけ殘のこつたのが、翼つばさを擴ひろげて、鷺わしが中なか空そらに翔かげ、と雲くもを破やぶつて胸むな毛げが白しろい。同おなじ高たかさに頂いたきを並ならべて遠とほ近ぢかの

神 盤

峰が、東雲を動きはじめ霞の上に漾つて、水紅色と薄紫と相累り、淺葱と紺青と對向ふ、幽
の中に雪を被いで、明星の餘波の如く晃々と輝くのがある。……此の山中を、誰と喧嘩して、何
處から駈落して來よう？……

婦は、と云ふと、引擔がれた手は袖にくるまつて、有りや、無しや、片手もふらりと下つて、
何を使つとも見えず。蠟に白粉した、殆ど血の色のない顔を眞向に、ぱつちりとした二重瞼の黒
目勝なのを一杯に睨いて、睨もしない。而して男の耳と、其の鬢と、すれすれに顔を並べた、一
方が小造な方ではないから、婦の脊が随分高い。

然うかと思へば、帯から下は、げつそりと薄く、裾は緊つたが、すんなりとして力が入らぬ。
踵が浮いて、恚う、上へ擔ぎ上げられて居る。

二人とも、それで、やがて膝の上あたりまで、亂れかゝつた枯蘆で蔽はれた上を、又其の下を
這ふ霞が隠す。

尤も路のない處を辿るのではなかつた。背後に、尙ほ覺果てぬ曉の夢が幻に残つたやうに、衝
と聳えた天守の眞表、差懸つたのは大手道で、垂々下りの右左は、半ば埋れた濠である。

空濠と云ふではない、が、天守に向つた大手の跡の、左右に連なる石垣こそまだ高うはあれ、
岸が淺く、段々に埋れて、土堤を掛けて道を包むまで蘆が森をなして生茂る。然も、鎌は長に入

れぬ處、折から枯葉の中を透いて、どんよりと霞の溶けた水の色は、日の出を待つて、さまざま
の姿と成つて、其から其へ、ふはくと遊びに出る、到る處の、あの陽炎が、こゝに屯したやう
である。

其の蘆がくれの大手を、婦は分けて、微吹く朝風にも揺らるゝ風情で、男の振つくとともに振
ついで下りて來た。……若しこれで聲がないと、男女は陽炎が顯す、今朝最初の姿であらう。が、
青年が息切れのする聲で、物言ふのを聞けば、

「寝るなんて、……寝るなんて、何うしたんだらう。眞個、氣が付いて自分でも驚いた。白んで
來たもの、何時の間に夜が明けたか些とも知らん。お前も又何だ、打つてでも揺つてでも、起せ
ば可いのに——しかし疲れた、私は非常に疲れて居る。お前に分れてから以來、まるで一目も寝
ないもんだから。……」

とせいゝ、肩を揺ると、其の響きかゝ震へながら、婦は眞黒な髪の中に、大理石のやうな白
い顔を押据ゑて、前途を唯熟と瞻る。

「考へると、能くあんな中で寝られたものだ」

と、男は尙ほ半ば呟くやうに、

「言つて見れば敵の中だ。敵の中で、夜の明けるのを知らなかつたのは實に自分ながら度胸が可い。……いや、然うではない、一時死んだかも分らん。」

然うだ、死んだと言へば、生死の分らなかつた、お前の無事な顔を見た嬉しさに、張詰めた氣が弛んで落膽して、其つ切に成つたんだ。嘸お前は、待ちに待つた私と云ふものが、目の前に見えるか見えないに、だらしなく、ぐつたりと成つて了つて、どんなにか、頼みがひがないと怨んだらう。

眞個、安心の餘り氣絶したんだと斷念めて、許しておくれ。寝たんぢやない。又、何うして寢られる……實は一刻も疾く、此の娑婆へ連出すために、お前の顔を見たら、其の時、壇を下りるなどは間弛ツこい。天守の五階から城趾へ飛び下りて歸らう！ 其の意氣込みで出懸けたんだ、實際だよ。

が、彼の頂上から飛んだ日には、二人とも五體は微塵だ。五體が微塵ぢや、顔も視られん、何にも成らない。然うすりや、何を救ふんだか、救はれるんだか、……何を言ふんだか、は、は、と取留めもなく笑つた拍子に、草を踏んだ爪先下りの足許に力が抜けたか、婦を肩に、戀の重荷の懸つた方の片膝をはたと支く、トはつと手を離すと同時に、婦の黒髪は頬摺れにすりと落

ちて、前伏に、男の膝へ背が偃つて、弱腰を折重ねた。

「あつ！」と慌しく、青年は其の帯の上へ手を掛けて、

「危い。あゝ、何て事だ。——浦子、

と言つたは婦の名で。

「怪我はしないか、何處も痛めはしなかつたか。可し、何ともない。」

婦が、あゝ、とも言はず、聲の無いのを、過失はせぬ事、と頷いて、さあ、起たうとすると思つても動かぬ。

「起たないか、こんな處に長居は無益だ、何うした。」

と密と揺ぶる、手に従つて揺ぶれるのが、死んだ魚の鱗を摘んで、水を動かすと同じ工合で、

此方が留めれば静と成つて、浮きも沈みもしない。

驚いた色して、

「何うした、浦子。はてな、今轉んだつて、下へは落さん、怪我も過失も爲さうぢやない。何だか正體がないやうだ。矢張り一時に疲勞が出たのか。あゝ、然う言へば先刻から人にばかりものを言はせる。確乎してくれ、何うしたんだ。」

今は慌しく成つた。青年は矢庭に頸を抱き、膝なりに背を向うへ捻廻すやうにして、我が胸を

前へ捻つて、押仰向けた婦の顔。

目は塞がず、例の眸つて、些の瞶むべき惱みも無げに、額に毛ばかりの筋も刻まず、美しく優
い眉の展びたまゝ、瞬もしないで、其のまゝ見据ゑる。

其の顔と、此の時引返した身動きに、翻つた棲の亂れに、雪のやうに顯れた白い膝……を一目
見るや、

「うむ」と一聲、撞と枯蘆に腰を落して、殆んど瘵撃を起した如く、足を投出してぶるゝと震
へて、

「違つたく。造りものだ、拵へものだ、彫像だ。昨夜持つて行つた形代だ、こりや、……お、」

戦く手に、婦の胸を確乎と壓せば、膨らかな襟のあたりも、掌にすべゝと唯冷いのであつた。

「何だ、又これを持つて歸るほどなら、誰が命がけに成つて、這麼ものを拵へよう。……誑しや
あがつたな！ 山猫め、狐め、野狸め。」

と邪慳に、胸先を取つて片手で引立てざまに、渠は棒立ちにぬつくり立つ。可憐や艶麗な女の
姿は、脊筋を弓形、裳を宙に、縊られた如くぶらりと成る。

青年は半狂亂の體で、地踏鞴を踏んで齒齧をした。

「やあ、魔でも、鬼でも、約束を違へる、と言ふ不都合があるか。何と言つた、何と言つた。」

と語るが如くに掠れ聲して、手を握つて、空を打つて、天守の屋根を睨んで喚いた。大手筋を
下切つた濠端に——まだ明果てない、海のやうな、山中の原を背後にして——朝虹に鱗したやう
に一方の谷から湧上る向う岸なる石垣越に、其の天守に向つて喚く！……

喚くが、しかし、一騎朝鬼で、敵を罵る勇ましい様子はなく、横歩行に、ふらゝして、前へ
出たり、退つたり、且つ踰踏めき、且つ獨言するのである。

「畜生、人の女房を奪つた畜生、魔物に義理はあるまいが、約束を違へて濟むか、……何と言つ
て約束した——婦の彫像を拵へる、其の形代を持つて來い、浦子を返すと言つたのを忘れたか。」

と其の握拳で、己が膝を磔と打つたが、力餘つて背後へ踰踏けると、石垣も天守も霞に揺れる。

「待てよ。雖然、自分の製作へた此の像だ、これが、もし價値に積つて、あの、浦子より、遙に
劣つて居たら何うする。まるで取替へる價がないと言へば其までだ、——あ、其がために、舊
通り浦子を隠して、此の木像を突返したのか、己は夢中で、此を戀しい婦だ、と思つてうかゝ
抱いて返つたのか、然うかも知れん。」

其では、劣作だと言ふのだな、駄物だ、と言ふのだな、劣作か、駄物か、此奴。

と首を引向け胸に抱いて、血走つた目で屹と其の顔を睨めつけて、

「己の此の心も知らずに、けろりとして済ました面よ。おのれ石でも、己が此の心を汲んで、睫毛に露も宿さないか、霞にも曇らぬ瞳は、葇蕤玉同然だ。——其も道理よ、血も通はない、脈もない、魂のない、たかが木屑の木像だ。」

と興覚顔して、天守を仰いで、又俯向き、

「何だ、これは、魔物が言ひさうな事を己が言ふ、自分が言ふ、我と我が口で罵るな。お、自然と敵の意に對して、自ら、罵倒するやうな木像では、先方が約束を守らんのも無理はない……駄物だ、駄物だ。」

と三舎を避ける足取で、たじくと後退りして、

「さあ、恚うなれば、浦子の記念の方が大事だ。よくも、おのれ、ぬくぬくと衣服を着た。」

と言ふく、捲るが如く衣紋を開いて帯をかなぐり、袖を外すと、柔かな肩が下つて、二の腕がふらりと垂れる。雙の玉の乳房にも、絲一條の綾も残さず、小脇に抱くや、此の彫刻家の半身は、霞のまゝに山橋の炎が赫と翳んだ。

其の下襲ねの緋鹿子に、足手の雪が照映えて、女の膚は朝櫻、薄雲の裏越す日の影、血も通ふ、と見る内に、男の顔は蒼く成つた。——女の像の片腕が、肱の處から、切れ目赤う、さゝら立つ

て折られて居た。

「わッ」と叫んで、其の咽喉を掴んだまゝ、投げ付けようとして振擧げた手の筋が釣つて棒の如くに衝と舉げると、女の像は鶴のやうに、ちらちらと髪黒く、青年の肩越に、翼を亂して翳つた。が、其のまゝには振飛ばさず。濠を越して遙かな石垣の只中へも叩きつけさうだつた勢も失せて……猶豫ふ狀して……ト下を見る足許を、然まで下らず、此方は低い濠の岸の、すぐ灰色の水に成る、角組んだ蘆の上へ、引上げたか、浮べたか、水のじとくとある縁にかけて、小船が一艘。底つた形は、處から名も知れぬ大なる魚の、がくり、と齒を嚙んだ白鬮體のやうなのがある。

處が其の船は、何の時か、向う岸から此岸へ漕寄せたものの如く、艫を彼方に、舳を蘆の根に乗据ゑた形に見える。……何處の捨小船にも、恚う逆に纏つたと言ふのは無からう。まだ變つた事には、舳を霞が包んで、ふつくり浮上つたやうな艫に留まつて、五位鷺が一羽、頬冠でも爲さうな風で、のつと翼を休めて向うむきに、すぼんと居る。

城趾の此の邊は、人里に遠いから、鷄の聲、鴉より、先づ五位鷺の色に夜が明けよう。不思議は無いが、如何に人を恐れねばとて、直ぐ其の鷄冠の上で、上一人立騒ぐ先刻から、造付けた體

に、きよんとして、爪立てた片脚を下さうともしなかつた。

此の船の中へ、どさりと落した。

女の像は胴の間へ仰向けに、肩が舷にかゝつて、黒髪は蘆に挟まり、乳の下から裾へ掛けて、薄衣の如く霞が靡けば、風もなしに柔かな葉摺れの音がそよぐ。で、船が一揺れ揺れると思ふと、有繫に物駭きを爲たらしい、艦に居た五位驚は、はらりと其の紫がかつた薄黒い翼を開いた。開いた、が、飛びはしない。で、ばさりと諸翼搏つと齊しく、俯向けに頸を伸ばして、あの、長い嘴が、水の面へ衝と屈くや否や、小船がすらくと動きはじめ、音もなく漕いで出る。

見るものは呆れ果てて、どかと濠端に腰を掛けた。

驚の働くこと。船一艘漕ぐなれば、蘆の穂の風に散る風情、目にも留まらず、ひらくと上下に翼を煽る、と船の方は落着濟まして夢の空を迂るに似て……やがて汀を漕ぎ離す。

蘆の枯葉をぬらくと蒼ぬめりの水が越して、浮草の樺色まじりに、船脚が輪に成る頃の、五位驚の羽搏ちやう。又一しきり烈しく急に、滑かな重い水に響いて、鳴渡るばかりと成つた。が餘りの勞働、羽の間に垂々と、汗か、繁吹か、羽先を傳つて、水へぼたくと落ちるのが、血の如く色づいて眞赤に溢れる。……

「やあ、火の粉だ、火の粉だ。」と濠端で、青年が驚き叫んだ。

果して血の汗を絞る、と見えたは、翼を落ちる火であつた。

「飛ばつせえ、船の人、船の人、飛ばつせえ、飛ばつせえのたえ。」

と野良調子の高聲を上げて、廣野の霞を影に煙らせ、一目散に駈附けるものがある。

驚駭のあまり青年は、殆ど無意識に、小脇に抱いた、其の一襲ねの色衣を、船の火に向つて颯と投げると、水へは落ちたが、其處には届かず、朱を流したやうに火の影を宿す萍に漂うて、袖を煽り、裳を開いて、悶え苦しむが如くに見えつ、本尊なる女の像は、此の時早く黒煙に包まれて、大な朱鷺の形した一團の燃え立つ火が、一羽倒に映つて、水底に齊しく宿る。舷にも炎が擲んだ。

「え、！ 飛ばつせえ、水は浅い。」

と此の時濠端へ駈つけたは、もつぺと稱へる裁着やうの股引を穿いた六十餘りの脊高い老爺で、腰から下は、身體が二つあるかと思ふ、大な麻袋を提げたのを、脚と一所に飛ばして来て、

「あ、埒あかぬ。」と、呟いて落膽する。

艦の驚の炎は消えて、船の板は、ばらりと開いた。一つ一つ、幅廣い煙を立てて、地獄の空に消えて行く、黒い帆のやう、——女の像は影も消えた。

「やれ、後れた。水は浅いで、飛ばめば助かつたに。——何と申さうやうもない、旦那がお連の

方がすかの。」

青年は肩を揺つて、唯大息を吐くのであつた。

「飛んだ事ぢや、こんな怪しげな處へござつて、素性の知れぬ船に乗ると云ふ法があるかい。お刺にお前様、五位鷺の船頭ぢや……狸の拵へた泥船より、まだく危険いのは知れた事をの。」

五

目が覺めた、と言ふでもなしに、少時すると、青年の瞳は稍定まつて、

「何、心配には及ばんよ。船に居たのは活きた人間では無いのだから。」

木樵體の件の老爺は、勿怪な顔して、

「や活きた人間で無うて何でがす……死骸かね、お前様。」

「死骸は酷い。……勿論、魔物に突返されて、火葬に成つた奴だから、死骸も同然なものだらう。」

ものだらうが、私の氣ぢや死骸ではなかつた。生命のある、價値のある、活きたものの積りだつた。老爺さん、今のは、彼は、彼は、木像だ、製作つた木彫の婦なんだ。」

「木彫の？ はての。」

と腕を組んで、

「えい、其は又、變つたもんだね。船と一所に焼けたのは、活きた人で無うて、先づ安堵をしたでがすが、木彫だ、と聞けば、尙魂消る……豪え見事な、宛然生身のやうだつての、背後の野原さ出て見た處で、肝玉の宿替した。——あれ一面の霞の中、火と煙に包まれて、白い手足さ、びいくびいく爲ながら、濠の石垣へ掛けて釣し上がるやうに見えただもの。地獄の釜の蓋を取つて、娑婆へ吹上げた幻燈かと思つたよ。」

尋常な、婦の人ほどに見えつて。等身のお祖師様もござれば丈六の彌陀佛も居さつしやる。——これ人形は、はい、玩具箱ウ引轉返した中からばかり出るものではねえで、其の、見事な不思議は無いだ、心配するな木彫だ、と言はつしやる、——お前様が持つて来て、船の中へ置かしたつたかな。」

「何、打棄つたんだ。」と青年は口惜しさうに言つた。

「打棄らしたえ、持重りが爲ただかね。」と、けろりとして、目を離れた白い眉をふさふさくと揺る。青年はじりりと寄つた。

「で、老爺さん、何か、君は活きた人間で無いから安堵したと言つたね、今の船には係合でもある人か。」

「係合にも何にも、私船の持主でがすよ。」

「此の魔物め。」

と青年は、然知つたる見得に、後退りしながら身構へして、

「翔るな。人の生死の間に彷徨ふ處を、玩弄にするのは残酷だらう。貴様たちにも釘の折ほど情が有るなら、一思ひに殺して了へ。さあ、引裂け、片手を挽げ……」と、はたと睨む。

「旦那々々、」

「何が旦那だ。捕虜と言へ、奴隷と呼べ、弱者と嘲れ。夢か、現か、分らん、俺は連も貴様達に抵抗する力はない。残念だが、貴様に向ふと手足も痺れる、腰も立たん。」

が、助け出す筈だった女を負つてなら……麓の温泉までは愚な事、百里、二百里、故郷までも、東京までも、貴様の手から救ふためには、飛んでも歸るつもりで居た。彫像一個抱いて歩行くに持重りがして成るものか……

何故、様を見ろ、可い氣味だ、と高笑ひをして嘲弄しない。俺が手で棄てたは棄てたが、船へ投げたのは、貴様が蹴込んだも同然だ。」と握つた拳をふるくと、唇は白く戦く。

老爺は遺瀨無い瞬して、

「藝もねえ、嚙けた事を言はつしやるな。成程、船を焼いたは悪いけど、蹴込んだとは、何たる事だの。」

「何、焼いた、お、船を焼いたは貴様だ。それ見ろ、悪魔、山猫か、狒々か、狐か、何だ、魔ものめ。せめて、俺に、正體を見せてくれ、一生の思出だ。さあ、のつべらぼうか、目一つか、汝其の眞目くとした與一平面は。眉なんぞ眞白に生しやがつて、分別らしく天窓の禿げたは何事だ。其の鬚巻を取れ、恍氣るな。」と目が逆立つて、又じり、と詰寄る。

老爺は己が面を、べろりと一つ撫下げた。

六

様子が如何にも、我が顔ながら不氣味さうに見えた。——眉を擧めて、

「ま、ま、少え旦那、落着かつせえ、氣を静めさつせえまし。……魔物だ、鬼だ喚いて、血相を變へてござる……何うも見た處、——未だ此の上に逆上らつしやるなよ——何うやら取逆せて在さつしやるが、はての、」

と上下、天守を七分、青年を三分に見較べ、

「もの、此處さ城趾の、お天守へ上らつしやりは爲ねえかの。」

「爲ねえかちや無からう。昨夜貴様に何處で逢つた？」

「先づ、む、其で分つた。」

「分つたか。いや昨夜は失禮したよ、悪魔の隊長。」
「やれ、迷惑な、私を魔物だと思はつしやる。」
「魔物で無くて、汝、五位鷺が漕出して、濠の中で自然に焼ける……不思議な船の持主が有るものか。」

「成程、何も仔細を知らつしやらぬお前様は、様子を見ても、此處等の人ではござらつしやらぬ。」
「那樣な事を言つて何うする、貴様は奪つて行つた俺の女房の、町所まで知つてゐるでは無いか。」
「急かつしやるな。此の山裾の、雙六温泉へ、湯治に来させえた人だんべいの。」
「知れた事を、貴様が浦子を擱出した、……あの旅籠屋に逗留して居る。」
「そんなら、はい、無理はねえだ。」

と莞爾して、草鞋の尖で向直つた。早や煙の餘波も消えて、浮垢に紅蓮の繪も描かぬ、水の其方を眺めながら、

「あの……木葉船はの、丁と自然に動くでがすよ……土地のものは知つとります。で、鷺の船頭と渾名するだ。それ、見さした通り、五位鷺が漕ぐべいがね。」

「漕ぐのは鷺でも鳶でも構はん。漕がせるのは人間ぢや無いのだらう。」
餘計なことを、と投げて言つた。

「いんや、お前様、お天守の、
と聲を密めて、

「……魔の人が爲業なら、同一鷺が漕ぐにして、其の船は光を放つて、ふはく雲の中を飛行するだ。」

……たかゞ人間の仕事だけに、羽の有る船頭を使うても、水の上を浮いて行くだよ。何も希有がらつしやるには當らぬ。あの船は、私が慰樂に造るでがす。」

「え、拵へる、而して魔物では無いと言ふのか。」

「随意にさつしやりませ。すつとこ被りをした天狗様があつて成るか。氣を静めさつしやるが可い。嘘だ思ふなら、退屈せずに四日五日、私が小屋へ来て對向ひに坐つてござれ、ごしごしつこつと打敲いて、同一船を、主が目の前で拵へて見せるだ。」

「ふん、と返事を吞込んだが、まだ其の息は發奮むのであつた。」

「何うして作る。」

「何うして作る？……つい一寸くら手眞似で話されるもんでねえ。此の胸に、機關を知つとり
ます。」

「機關か。」

「危険な機關だて、小さく拵へて、小兒の玩弄にも成りましねえ。が、親譲りの秘傳ものだ。は
ツはツはツ、」

と浮世を忘れた笑ひをやる。

「お待ち、親譲りの秘傳と言ふと……」

と言ひ方は迫つたが、聲の調子は大分静まつた。

「何も、家傳の秘法の言うて、勿體を附けるでねえがね……祖父の代から爲た事を、見やう見眞
似に遣るでがすよ。」

「其ぢや、三代船大工か。」

と些少落着いて青年が聞いた。

雪枝、菊松

七

「何の、お前様、見さる通り二十八方佛子柑の山間ぢや。木を伐出して谿河へ流せば流す……駕
籠の渡しの藤蔓は編むにせい、船大工は要りましねえ。——私等が家は、村里町の祭禮の花車人

形、木偶之坊も拵へれば、内職にお玉杓子も賣つたでがす。獅子頭、閻魔様、姉様の首の、天狗
の面、座頭の顔、白粉も塗れば紅もなする、青繪具もべつたりぢや。

そんなものさ、甘干の柿見たやうに、軒へぶら下げて賣りましたつけ、……水損、山抜け、御維
新以來、城趾へ草が生える、濠が埋まる、村も里も無くなりました處へ、路が變つて、旅人も通
らぬけえに、根つから家業に成らんで、私ら、木挽木樵も遣る。温泉場に普請でも有る時には、
下手な大工の眞似もする。閑な日には鯛を掬つて暮すだが、祖父殿は、繁昌での、藩主様さ奥御
殿の、お雛様も拵へさしたと……

其の祖父殿はの、山伏の姿した旅の修業者が、道陸神の傍に病倒れたのを世話して、死水を取
らしつけ……其の修業者に習つた言ひます。

轆轤首は、引窓から刎ねて出る、見越入道が、くわつと目を開く、姉様の顔は莞爾笑ふだ、
一切支丹宗門で、魔法を使ふと言うて、お城の中で殺されたとも言へば、行方知れずに成つたと
も言ふ。

神

はじめは、不思議な機關を藩主様御前で見せい言うて、お城へ召されさしけえの、其時拵へた
のが、五位鷲の船頭ぢやよ。
盤
それ、船を浮べたのは、矢張此の濠。」

一言ひかけて、水には臨まず、却つて空を指した老爺の指は、一の峰と相對つて、霞の高い、
天守の棟に並んで見えた。

「これは、其の三重濠で、二の丸の奥でがす。お殿様は、繼上下の侍方、振袖の腰元衆づらりと
連れて出て御見物ぢや。

(町人、此の船を何うするな。)

(御意にござります。舳に据ゑました其の五位鷺が翼を帆に張り、嘴を舵に仕りまして、人手を
藉りませず水の上を渡りまする。)

と申上げたて。……なれども、唯差置いたばかりでは鷺が翼を開かぬで、人が一人乗る重量で

自然から漕いで出る。……一體が、天界の遊山船に擬へて、丹精籠めました細工にござるで、
御齊眉の中から天人のやうな上臈御一方、と望んだげな。

當時飛鳥も落ちると言ふ、お妾が一人乗つて出たが、船の焼出したのは、主が見さしつた通り
でがす。——其の妾と言ふのが、祖父殿の許嫁で有つたとも言へば、馴染だとも風説したたね。

處で、綾錦へ燃えつく時、祖父殿が手を舉げて、

(跳込め、助かる。)

と我鳴らしつけが、お妾は慌てもせず、珠の簪を抜くと、舷から水中へ投込んで、颯と髪の毛

を拂いたと思へ。……胴の間へ突伏して動かぬだ。

裸で飛込んだ、侍方、船に寄り寄つたれども、燃え立つ炎で手が出せぬ。漸との思ひで船を
引くら返した時分には、緋鯉のやうに沈んだげな。——これだもの、お前様、祖父殿は家へ歸り
ごと有るめえがね。

お刺に家中、無事なもの一人も無かつた。が不思議に私だけが助りました。

御時世が變つてから、古葛籠の底で見つけました。祖父殿が工夫の繪圖面、暇にあかして遣つ
て見て、私が先づ乗つて出たが、案の定燃出したで、やれ人殺し、と……はッはッはッ、水へ入
つて泳いで遁げた。

困つた事には、私は腹からの工夫でねえでの、焼くまいやうに手を抜くと、五位鷺が動かぬ。
濠の真中で燃え出すを合點の向には、幾度も拵へて乗せて進ぜる。其處で、へい、麓のものは承
知して、私がことを鷺の船頭。埒もない藝當だあ。

と蹲んで、腰の煙草入を捻り出す。

聞くものは、目を閉ぢて恍惚とした。

「處が、聞かつせえまし。」
と、すばくと煙を吹かす。……近い煙草に遠霞で、天守を包んだ鬱蒼たる樹立の蔭が透いて来る。

「段々村が遠退いて、お天守が寂しく成ると、可怪可恐い事が間々有るで、あの船も魔物が漕いで焼くと、今お前様が疑はつせえた通り……」

私が拵へものと思ひながら、不氣味がつて、何か魔の人が仕掛けて置く、囀のやうに間違へての、谿河を流す筏の端へ鴉が留まつても氣に爲るだよ。

誰も来て乗らぬので、久しい間雨晒しぢや。船頭も船も退屈をした處、又これが張合で、私も手遊が拵へられます。

旦那、嗚お前様吃驚さつせえたらうが、先刻船と一所に、白い裸體の人さ焼けるのを見た時は、やれ、五十年百年目には、世の中に同じ事が又有るか、と魂消ましけえ。其で無うてさへ御時節の難有さに、切支丹と間違へられぬが見つけものの處ぢや。あれが生身の婦で無うて、私もチョン斬られずに濟んだでがす……

が、お前様は又、一體どうさつせえた譯でがんすの。」
と、ちよこなんとした割膝の、眞中どころへ頤を据ゑて、銜煙管で熟と眺める。……老爺の前

を六尺ばかり草を隔てて、青年はばつたり膝を支いて、手を下げた。……此の姿を、天守から見たら、蟲のやうな形であらう。

「失禮しました。御老人、貴下は大先生です。何うか、御高名をお名告り下さい。私は香村雪枝と言つて、出過ぎましたやうですが、矢張木を刻んで、ものの形を拵へます家業のものです。」と、はつと額付いた。

「是は、」
と同じく草につけた雙の掌を上げたり下げたり、臀を揉んで、もちついて、

「旦那、はて、お前様、何言はつしやる。何うさつしやる……氣を静めてくらつせえよ。」

「否、何うぞ、失禮ながらお名告り下さい。御覽の通り、私は何うかして居る。……夢なんだか、現なんだか、自分だか他人だか、宛然辨別が無いほどです——先刻からお話し被爲つた事も、其方では唯あはく笑つて在らつしやるのが種々な言に成つて、私の耳に聞えるのかも分りません。が、其にしてもお聞かせ下さい。お名が此の耳へ入れば、私は私だけで、承つたことと了簡します。香村雪枝つて言ふんです。先生、眞個は靱負と言つて、昔の侍のやうな名なんです、其を其のま、雪の枝と書いて、號にして居る若輩ものです。」

「え、く、困つたな、これは。名を言へなら、言ふだけけれど、改つては面目ねえ。」

と天窓を撫でざまに、するりと顛巻を抜いて取り、

「へい、些と爺には似合ひましねえ、村の衆も笑ふですが、八歳ぐれえな小兒だね、へい、菊松つて言ふでがすよ。」

「菊松先生、貴下は凡人では在らつしやらない。」

「勘辨して下らつせえ。うゝとも、すうとも返答打つ術もねえだ……私、先生と言はれるは、臍の緒切つて最初だでね。」

「何とも御謙遜で、申上げやうもありません。大先生、貴下で無くつて、何うして、彼の五位鶯が刻めます。あの船が動かせませす。而して、其の祕密を人に知らせまいために、天の火で焚くと見せて、船をお祕しなざるんでせう。」

「お前様もの、祖父殿の眞似をするだ、で、私が自由には成んねえだ。間違へて先生だ、師匠だ言はつしやるなら、祖父殿を然う呼ばらつせえ。」

「同じ事です、大名の子孫が華族なら、名家の御子孫も先生です。特に私は然う申さなければ成りません。」

「私が今の此の仕事をするやうに成りましたのは、貴下か、或は其の祖父様の御薫陶に預つたと云つて宜しい。」……

技藝天

九

「父は或縣の書記官でした。」

雪枝は衣兜に手を挿んで、

「一年、此の地を巡廻した事が有ります。私が七歳の時です。未だ其の頃は、今の温泉は無かつたやうです。」

「温泉の開けたのは近い頃の事ですがすよ。然うでがんととも。前から寂れては居ましつけえ、お城の居まはりに、未だ町の形の残つた頃は、温泉は無かつつけの。」

地震が豪く押ばだかつて、しやつきり残つたのはお天守ばかりぢや。人間も家も押轉ばして、濠も半分がた埋りましけ、冬の事での、其の前兆べい、八尺餘も積つた雪が一晚に融けて、びしやびしやと消えた。あれ松が蒼いわ、と言ふ内に、天も地も赤黒く成つて、活きものと言ふ活きものは、泥の上を泳いだての。

神 其の響きで、今の處へ、熱湯が湧出した。ぢやがさ、天道人を殺さすかい。生命だけは助つて

も、食はう飲まうの分別も出なだ處、温泉が昌つて来たで、何うやら娑婆の形に成つた。其のかはり、舊から噂の高かつたお天守の此の邊は、人の寄附かぬ凄じ處に成りましたよ。見させえ、いまに太陽様が出させえても、濠端かけて城趾には、お前様と私等が他には、人間らしい影もねえだ。偶々突立つて歩行くものは、性の善くねえ、野良狐か、山猫だよ。

こんな處へ、主は何として又姉様の人形連れて來させえた。」
「其を順にお話しませう、」

と雪枝は一度塞いだ目を茫乎と開けて、

「父が此の處を巡廻した節、何處か山蔭の小さな堂に、美しい二十ばかりの婦の、珍しい彫像が有つたのを、私の玩弄にさせうと、堂守に金子を遣つて、供のものに持たせて歸つたのを、他に姉妹もなし、姉さんが一人出來たやうに、負つたり抱いたり爲ました。大な像で、飯の時なんぞ、並んで坐ると、七歳の年の私の芥子坊主より、すつと上に、髪の毛の垂つた島田の鬘が見えたんです。衣服は白無垢に、水淺葱の襟を重ねて、袖口と襟はづれば、矢張白に常夏の花を散らした長襦袢らしく出來て居て……其が上から着せたのではない。木彫に彩色を爲たんですが、不思議なのは、其の白無垢、何うして置いても些とでも塵埃が溜らず、蟲も蠅も、遂ぞ集つたことが無い。花畑へでも抱いて出ると、綺麗な蝶々は、帯に來て、留つたんです。最う一つ不思議なのは、

立像に刻んだのが、膝柔かにすつと坐る。

袖は両方から振が合つて、乳のあたりで、上下に兩手を重ねたのが、ふつくりして、中に何か入つて居さうで、……駆けて行つて、

(姉さん)と捉まつた時なぞ、肩が揺れると、ころりん、ころりん、其は實に……何とも微妙な音が爲て幽に鳴る、……父母をはじめ、見るほどのものは、何だらう何だらう、と言ひひした音が、指を折らなくては分らないから、無論開けては見す仕舞。

たうとう、其の彫像を、何です、父が暖爐に燻べて焼いたまでも分らなかつたんです。

ちら／＼雪の降る晩方でした。……私は、小兒の群食で、欲くない。兩親が卓子に差向ひで晩飯を食べて居た。其處へ、彫像を負つて入つたんですが、西洋間の扉を開けようとして、

(姉さん)と仰向くと上から俯向いて見たやうに思ふ、……廊下の長い、黄昏時の扉の際で、じらむらと鬢の毛が、其時は戦いだやうに思ひました。ぱつちりした目が、眉の下で、睫毛を黒く、隣いたやうで。……

神

見ながら、其のまゝ、扉を開ける、と小兒の背に、裾を後抱にして居た彫像の丈が反つて、鬘が、天井裏の高い處に見えた。

ト半靴の先を反らした、母親の白い足が卓子掛と絨氈の間で動いた。窓の外は雪が其の光を撫

でて、さら／＼音が爲さうに、月が有つて、植込の梢がちら／＼黒い、烈々と燃える暖爐のほてりで、赤い顔の、小刀を持ったまゝ、頤杖をついて、仰向いて、ひよいと此方に向いた父の顔が眞蒼に成りました。」

十

「東京駿河臺に家があつた、其の二階でした。」

と言ひかけて、左右を見る、と野と濠と草ばかりでは無く、黙つて打傾いて老爺が居た。其を、……雪枝は確め得た面色であつた。

「父が蟲乎と立つと……」

（おのれ！）と言つて、つか／＼と來ましたが、私の身體が一つ、胴廻りを爲ると、肩から倒に婦が落ちた。裾が未だ此の眩に懸つて、橋に成つて床に着く、仰向けの白い咽喉を、小刀でざつくりと、さあ、斬つたんだか、突いたんですか。

（きやつ）と言つて、私は鐵砲玉のやうに飛出したが、廊下の壁に額を打つて、ばつたり倒れた。……氣の弱い母もひきつけて了つたさうです。

母は、父が、其の木像の胴を挫折つた——其が又脆く折れた——のを突然頭から暖爐へ突込ん

だのを見たが、折口に偶と目が着くと、内臓がすつかり刻込んであつた。まるで生のものを見るやうに腸も長く、青い火が其に擲んだので、餘の事に氣絶したんだ、と後に言ひます。

父は年經つて亡くなるまで、其時の事に就いては一言も何にも言はない。尤も當座二月ばかりは、爲うかすると一室に籠つて、誰にも口を利かないで、考事をして居たさうですが、別に仔細は無かつたんです。

但其時から、兩親は私を男にしました。其まで、三人も出來た兒が皆育たなかつたので、私を女にして置いたんです。名も雪枝と言ふ女のやうな。

其の名を直ぐに號にして、今、こんな家業を爲るやうに成つたのも、小兒の時から、其の像の事が、目にも心にも身體にも離れなかつた爲なんです。

こんな邊鄙な温泉へ參つたのも、實は忘れられない可憐しい氣が爲たためです。何處か知らんが、其の木像は、父がこの土地から持つて歸つたと言ふぢやありませんか。

山も谷も野も水も、其處には私の師匠があると、信じて居た。果して貴下にお目にかゝつた。——あの、白無垢に常夏の長襦袢、淺葱の襟して島田に結つた、兩の手に祕密を藏した、絶世の美人の像を刻んだ方は、貴下の其の祖父様では無いでせうか。

神 鑿
雪枝は熟と對手を視めた。

「え、貴下かも分らん、貴下かも知れませぬ。先生、仰有つて下さい、一生の願ひです。」
 「若え旦那、祖父殿が事は私も知らんで、何か言はつしやりますやうな悪戯を爲たかも分らねえ。私は早や、獅子鼻や團栗目、御神酒徳利の口なら眞似も遣るが、辨天様は手に負へねえ……まあ、そんな事は措かつしやい。ぢやが、お前様は山が先生、水が師匠と言ふわけ合で、私等が氣にや天上界のやうな東京から、遙々と……飛驒の山家までござつたかね。」
 と搔躡ひ、兩腕を膝に預けたまゝ、銜煙管で摺出す體は、嘴長い鷺の船頭、化けたやうな態である。

雪枝は、しばらく猶豫つたが、
 「假にも先生と呼んだ貴下に向つて、嘘は言へませぬ。……一度来よう、是非見たい。生れない以前から雪枝の身體とは、許嫁の約束があるやうな此の土地です。信者が善光寺、身延へ巡禮を爲るほどな願だつたのが、——いざ、今度、と言ふ時、信仰が鈍つて、遊山に成つた。」

其が悪かつたんです……
 家内と二人連で来たんです、然も婚禮を爲たばかりでせう。
 杯を納るなり汽車に乗つて家を出た夫婦の身體は、人間だか蝶だか區別が附かない。遙々来た、と言はれては何とも以て極が悪い。氣も魂もふらふらで、六十餘州、茶の花の上を舞ひ歩行いて

も疲れぬ元氣、其も突かけに夜晝かけて此處まで来たなら、まだく仕事の手前、山にも水にも言譯があるのに……彼方へ二晩此方へ三晩、泊り泊りの道草で——花には紅、月には白く、所々の温泉を、嫁の姿で彩色しては、前後左右、額縁のやうな形で、附添つて、木を刻んで拵へたものが、恚う行くものか。と自ら彫刻家であるのを嘲ける了簡。

十一

斧も鑿も忘れたものが、木曾、碓氷、寢覺の床も、旅だか家だか差別は無い氣で、何の此の山や谷を、神聖な技藝の天、藝術の地と思はう。
 來て見ぬ内こそ、峰は雲に、谷は霞に、長に封ぜられて、自分等、藝術の神に渴仰するものが、精進の鷺の翼に乗らないでは、杣山伏も分入る事が出来ぬであらう。流には斧の響、木の葉には鑿の音、白い蝙蝠、赤い雀が、麓の里を彩つて、辻堂の中などは霞が掛つて、花の彫物をして居ようとまで、信じて居たのが、戀しい婦と一所に來たため、峯が雲に日を刻み、水が谷に月を鑿つた、大彫刻を眺めても、婦が挿た筈ほども目に附かないで、温泉宿へ泊つた翌日、以前ならば何よりも前に、しかくの堂はないか、其らしい堂守は居まいか、と父が以前持歸つた、其の神祕な木像の跡の、心當りを捜す處、——氣にも掛けないまで忘れて了つて、温泉宿の亭主を呼ん

で、先づ尋ねたのが、世に傳へた雙六谷の事だつた。

「老爺さん。」

と雪枝は嗟歎して言つた。

温泉の町の、谿流について溯ると雙六谷と云ふのがある——其處に一座の大盤石、天然に雙六の目の装られたのが有ると云ふが、事實か、と聞いたのであつた。

亭主が答へて、如何にも、此の邊で噂するには、春の曙のやうに、蒼々と霞んだ、滑かな盤石で、藤色がかつた紫の筋が、寸分違はず、雙六の目に成つて居る。

(丁ど、先づ其の工合と思はれます。と掌を疊に着けて指して見せた。)

其時坐つて居た蒲團が、蒼味の甲斐絹で、成程濃い紫の縞があつたので、恰も既に盤石の其の雙六に對向ひに成つた氣がして、夫婦は顔を見合はせて、思はず微笑んだ。

——と雪枝は言ふ——

けれども、其は神の斧の、微妙き製作を會得した嬉しさではなかつた。其の實、矢叫の如き流の音も、春雨の密語ぞ、と聞く、温泉の煙の暖い、山國ながら紫の霞の立籠る圍を、臺に満ちた池と見る、鴛鴦の衾の寝物語りに——主従は三世、親子は一世、夫婦は二世の契と聞く……

(全く未來でも添へるのでせうか)と他愛のない言を浦子が言つた。

二世は愚か三世までもと思ふ雪枝も、言葉あらそひを興がつて、

(何二世などがあるものか、魂は滅びないでも、死ねば夫婦はわかれくた。)

とはぐらかすと、棲を引合はせながら、起直つて、

(私は此の世ばかりでは厭です。)

とツンとした。

(それでは二人で、一世か、二世か賭をしよう。)

苟くも未來の有無を賭博にするのである。相撲取草の首つ引なごでは其の神聖を損ふこと夥しい。聞けば此の山奥に天然の雙六盤がある、其の仙境で局を圍まう。

で、其の勝敗を記念として、一先づ、今度の密月の旅を切上げよう。けれども雙六盤は、唯土地の傳説であらうも知れぬ。實際なら奇蹟であるから、念のためと、こゝで其の翌日旅店の主人に聞いたのが、……件の青石に薄紫の筋の入つた、恰も二人が敷いた座蒲團に肖て居ると言ふ其であつた。

(案内者でも雇へようか。)

亭主が飛でもない顔色で、二人を視めたる道理。

雙六は確にあり。天工の奇蹟の故に、四五六また雙六谷と其處を稱へ、温泉も世に聞えた雙六の名を負はず、が、谷を究めて、盤石を見たものは昔から誰も無い。——土地の名所とは言ひながら、なかく以て、案内者を連れて踏込むやうな遊山場ならず。雙六盤の事は疑無けれど、其の是であるは、月の中に玉兔のある、と同じ事、と亭主は語つた。

土地のものが、其方の空ぞと視め遣る、谷の上には、白雲行交ひ、紫緑の日影が添ひ、月明には、黄なる、又桃色なる、霧の騰るを時々望む。珠か、黄金か、世にも貴い寶什が潜んで、氣の群立つよ、と憧憬れながら、風に木の葉の音信もなければ、もみぢを分入る道も知らず、……恰も燦爛として五彩に煌めく、天上の星を指しても、手に取られぬ、と異りはない。

唯山深く木を樵る賤が、兎もすれば、我が伐木の筈にあらぬ、怪しく、床しく且つ幽に、ころりん、からく、と妙なる樂器を奏つるが如きを聞く——其時は、森の枝が、一つ一つ黄金白銀の絲に成つて、其の音を傳ふるが如くに感ずる。……思ふに魔神が對向つて、采を投げる響であらう……何につけても、飛驒谷第一の隠れ場所、近づき難い魔所である、と猶ほ亭主が語つたのである。

二人は、聞くが如き他界であるのを信ずると共に、雙六の賭が彌が上にも、意味の深いものに成つた事を喜んだ。……勿論、谷へ分入るに就いて躊躇を爲たり、恐怖を抱いたりするやうな念は聊も無かつた。

——と雪枝は續いて言つた。——
「其の上好奇心にも驅られたでせう。直ぐにも草鞋を買はして、と思つたけれども、彼是晩方に成つたから、宿の主人を強ひて、途中まで案内者を付けさせることにして、其の日の晩飯は済ませました。」

鑿神

雙六谷へは、翌早朝と云ふ意氣組、今夜も二世かけた勝敗は無しに、唯睦じいのであらうと思ふ。宵寝をするにも餘り早い、一風呂浴びた後……を、ぶらりと二人連で山路へ出て見たのが、丁度……狐の穴には灯は點かぬが、猿の店には燈の點く時分、何となく薄ら寒い。其處等の霞も、遠山の雪の影が射すやうで、夕餉の煙が物寂しう谷へ落る。五六軒の藁屋ならび、中にも淺間な掛小屋のやうな小店を開けて、穴から商賣をするやうに、婆さんが一人、戸の外を透かして居た。其の店で獸の皮だの、獅子頭、狐猿の面、般若の面、二升樽ぐらなる座頭の首、——いや其が白い目をぐるりと剥いて、龜裂の入つた壁に仰向いた形なんぞ、餘り氣味の可いものではなかつた。誰か拵へるものが居て、直ぐ其を賣るらしい、破筵の上は、藍の繪具や紅殻だらけ——婆さんの

前垂にも、ちら／＼霜のやうに胡粉がかつた。其の他角細工も種々に――数があつた――と雪枝が言ふと――

「はッはッ、婆様が家ぢや。」と老爺は不意に笑ひ懸けて、

「茶でも飲つてござつたかの。」

雪枝は不圖心附いたらしく調子を變へて、

「あ、お知己の店なんですか。」

「昔の戀でがす。彼でも、お前様、新造盛りの事も有つけ。人形を欲しがる時代ぢや。なんぼ山鳥のおろのかゞみで、鬚髻さ撫でた處で、木の枝で、鋸を使ひ／＼、猿の脚と並んだ尻を、下から見せては落つこちねえ。其處で、人形やら、おかめの面やら、御機嫌取に拵へて持つて行つては、莞爾させて他愛なく見惚れて居たものでがす。は、は、はじめの内は納戸の押入へ飾つての、見るなく、と云ふ。恐ろしい、男を食つて骨を祕す、と村のものが黽つたつけの……眞個の孤家の鬼に成つて、狸婆が、舊の色仕掛けで私に強請つて、今では錢にするでがんですが、旦那、何か買はつしやつたか、澤山値切らつしやれば可かつけな。」

采

十三

「お、老爺さんが、あの、種々なものを。」

と雪枝は目の覺めた顔色して、

「面も頭も、お製作へに成つたんですか。……あ、いや、驚のお手際を見たので分る。軒に振ら下つた獅子頭や、狐の面など、どんな立派なものだつたか分らない。が、其に氣が着く了簡なら、こんな虚氣な――對手が鬼にしろ、魔にしろ、自分の女房を奪はれる馬鹿は見ない。失禮ながら、そんなものは眼も留めないで、

(采は無いか。)

(お媼さん、あの、采はありませんか。)

と同伴の婦も聞いたんです。――

雙六殿で振らうと云ふ、よく考へれば夢のやうなことだつた。

(一六、三五の采粒かの、はい、ござります。と隅の壁へ押着けた、藥箆等の古びたやうな抽斗

を開けると、鼠の糞が、ぱら／＼溢れる。其の中から、疊紙を出して、ころ／＼と手で揺りながら軒の明先へ持つて出た。

(猪の牙で拵へました、ほんに佳い采でござります、御覽じまし。)& 莞爾々々しながら、掌を反らして載せた處を、二人で一個づゝ取つた。

采は珠のやうに見えた。綺麗に磨いたのが透通るばかりに出来て、點々打つた目の黒いのが、雪の中に影の顯はれた、連る山々、秀でた峰、深い谷のやうに不圖見えた。

(可愛いぢやありませんか。)

と同伴の女は一寸摘んだが、掌へ据ゑ直して、

(お嬢さん、思ふ目が出ませうか。)& 右の手を蓋で胸へつけて、ころ／＼と振つて試る。

と背中から抱き締めて、する／＼と遠くへ持つて行かれたやうに成つて、雪枝は其時の事を思出した。

「其の時の事と云ふのは、父が此の土地の祠から持つて歸つた、あの、掌に祕密を藏した木像です。」

「お、」と頷く、老爺は腕組を爲た肩を動かす。

「あ、それぢや、木彫の美人が、父のナイフに突刺されて、暖爐の中に焼かれた時まで、些と

も其の祕密を明かさなかつた、微妙な音のしたものは、……同一、此の采であつたかも知れない。

時に、傍に立つた私の家内の姿が、其に髣髴だ、と思ふと、想像が遠く昔へ返つて、不思議なもので、袖を並べた其の浦子と云ふ家内の姿が、ずつと離れて遙かな向うへ……」

と雪枝は語つて、押遣るやうに手を振つた。

「其時の事を思ふと、老爺さん、恚う言ふ内にも貴方の身體も遠くへ行く……ふら／＼と間が離れる、」

而して、婆さんの店なりに、浦子の身體が向うへ歩行いて、見る間に其が、谷を隔てた山の絶頂へ——湧出る雲と裏表に、動かぬ霞の懸つた中へ、裙袂がはら／＼と夕風に靡きながら薄くなる。

あの邊へ、夕暮の鐘が響いたら、姿が近く戻るのでらう、——と誰が言ふともなく自分で安心して、益々以前の考に耽つて居ると、櫓を焚くか、炭を焼くか、谷間に、彼方此方、ひら／＼、ひら／＼と蒼白い炎が揚つた。

思はず彫像を焼いた暖爐の火に心付いて、何故か、急に女の身が危まれて來た。

(浦子。)

と呼んだが返事をしない。

(浦子、浦子。)と言つたが、返事を爲さない。此方は最うきよろしく出した。其で二足三足つゝ、前後左右を、ばたくと行つたり、來たり……

慌しく成つて來た。

第一、浦子ばかりぢやない、其處に居た婆さんも見えなければ、其らしい店もない。いや、これは可怪しいぞ、一人ばかり居ないのなら、女が何うかしたのだらうが、店も婆さんも失くなつた、とすると……先方が攫はれたのぢやなくつて、自分が魅まれたものらしい。

(お、い、お、い。)

と無暗に人を呼んで、山路を駆ずり廻つた。

「段々暗くなる、最う目は眩む、風が吹出す。此の風は……晝間蒼く澄んだ山の峽から起つて、障つて來る樹の枝、岩角、谷間に、白い雲のちぎれて鳥の留るやうに見えたのは未だ雪が残つたのか、……と思ふほど横面を削つて冷たかつた。

(ま、……何處へござらつしやる、旦那。)

とすたゝ小走りに駆けて來て、背後から袂を引留めた、山稼ぎの若い男があつた。

(お城趾へ行かしては成りませぬえだよ。日も暮れたに、當事もねえ。)と少し叱つて言ふ。

煙が立つて、すんゝとあがる坂一筋、やがて、其の煙の裾が下伏せに、ぱつと擴がつたやうな野末の處へ掛つて居ました。

其時雪枝は伸上つて、岬が突出た灣の外を臨むが如く背後狀に廣野を視めた。……東雲の雲は其の野末を離れて、細く長く縦に蒼空の絲を引いて、上つて行く。——人も馬も、其處を通つたら、ほつゝと描かれよう。鳥も飛ばば見えよう——けれども天守の屋根は森が包んで霞がくれない尙暗い。其の上、野の果を引上る雲も此方をさして疊まつて來るやうで、老翁と差向つた中空は厚さが増す。其の濃く暗い奥から、黄金色に赤味の注した雲が、むくゝと湧出す、太陽は其處まで上つた——汀の蘆の枯れた葉にも、さすがに薄い光がかつて、角ぐむ芽生もや、煙りかけた。此の煙は月夜のやうに水の上にも這ひ懸る。船の焼けた餘波は分解す……唯陽炎が頻りに形づくりするのが分解る。——やがて、此が、野の一面の草を傳つて、次第にひらくと、麓に下りて遊行しよう。……さて、日も當れば、北國の山中ながら、人里の背戸垣根に、神が咲かせた桃櫻が、何處とも無く空に映らう。まだ、朝早き、天守の上から野をかけて箕の形に雲が簇つて、所々物凄しく渦を巻いて、霞も逆つて出さうなのは、風が動かすのではない。四邊は寂寞して居る……峰に當り、頂に障つて、山々のために搖れるのである。

雲の動く時、二人の形は大きく成つた。静とする時、渠等の姿は小さく成つた。——飛驒の山の此のあたりは、土地が呼吸をするのかも分らぬ。

雪枝は伸上つた時、膝を草に支いて居た。

「其の時來懸つたのは、何うも、此の原の、向うの取附であつたらしい。

（お城趾の方さ行つては成んねえだ。）と云つて其の若い男が引留めました。——私は家内の姿を高い山の端で見失つたが、何うも、向うが空へ上つたのではなく、自分が谷底へ落ちてたらしい。其處で疵だらけに成つて漸々出て來た處が、此の取附きで、以前夫婦づれで散歩に出た場所とは、全然方角が違ふ——御存じの通り、温泉は左右へ見上げるやうな山を控へた、ドン底から湧きま

す。で、婆さんの店の在つたのは南の坂で、此の城址は北の山路から來るのでせう。

土地の男に様子を聞いて、

（あゝ、魅まれた……魅まれたんだ。いや、薄髻の生えた面で、何とも面目次第もない。）

と頻に面目なぐる癖に、あはく得意らしい高笑ひを行つた。家内の無事を祝福する心では、自分の魅せられたのを、却つて幸福だと思つて喜んだんです。

（豪い、東京の客を魅すのは豪儀だ。ひよい、と抱いて、温泉宿の屋根越に山を一つ、まるで方

角の違つた處へ、私を持つて來た手際と云ふのは無い。何か、此の邊に、有名な狐でも居るのかい。）

と酔つばらひのやうな言を云つて、ひよろ／＼爲ながら、其の男に導かれて引返す。

（狐や狸ではござりましねえ、お天守にござる天狗様だのエ、時々悪戯をさつしやります。）

（何天狗。）

と云ふと其の男が慌しく袂を曳いて、

（え、大な聲をさつしやりますな、聞こえるのがエ。）と、蒼い顔して、男は、足許を樹の梢から透いて見える、燈の影を指さしたんです。

訝

十五

神

で、其處が温泉宿だ、と教へて、山間の崖を樹の茂つた細い路へ、……背負つて居た、丈の伸びた雑木の薪を、身體ごと横にして、ざつと入つて行く。

鑿 しばらく、ざわ／＼と鳴つて居た。

急に何だか寂しく成つて、酔ざめのやうな身震ひが出た。急いで、燈火を當に駈下り、と思ひがけず、往には覺えもない石壇があつて、其を下切つた處が宿の横を流れる矢を射るやうな谿河だつた。——驚いたのは、山が二わかれの眞中か、温泉宿を貫いて流れる、其の川を、何時の間に越えて、此の城趾の方へ来たか少しも覺えが無い。

岸づたひに、岩を踏んで後戻りを爲て、橋の取附の宿へ歸つた——此は先刻渡つて、向う越で、山路の方へ、あの婆さんの店へ出た橋だつた。

(お歸りなさいまし。)

と向う廊下から早足で、すたく／＼來懸つた女中が一人、雪枝を見て立停まつた。

(御緩り様で)と左側の、疊五十疊許りの、だゞつ廣い帳場、……眞中に大な爐を切つた、其の自在鍵の、尾緒を刎ねた鯉の蔭から、でつぶり肥つた赭ら顔を出して亭主が言ふ。

(同伴は歸つたらうね。)と聞いた時、雪枝は其の間違の無い事を信じながら、何だか胸がドキドキした。

(奥方様で、は、何や、一寸お見申せ。)と頷を向けると、其處に居た女中が、

(御一所では無かつたのでございますか。)

で、ばた／＼と廊下を、直ぐに二階へ駈上つた。

何故か雪枝は他人を訪問に來たやうな心持に成つて、うつかり框際の廣土間に突立つて居た。

山路から、後を跟けて來たらしい嵐が、袂をひら／＼と煽つて、颯と爐傍へ吹込むと、燈が下伏に暗く成つて、爐の中が明る燃える。これが赫と、壁に並んだ提灯の箱に映る、と温泉の薫が芬とした。

五六段階子を殘して、女中が廊下の高い處へ顔を出して、

(まだ、お歸り遊ばしません。)

(下りて來て、ちゃんと申さぬかい、何ぢや、不作法な。)と亭主が爐端から上睨みを行る。

雪枝は一文字に其の前を突切つて、階子段を駈上り狀に、女中と摺違つて、

(そんな筈は無い。そんな、お前)と躰めるやうに言ひ／＼飛上つたのであつた。

(それともお湯へお出でなさいましてですか、お座敷には在らつしやいませんですよ。)と小走りに跟いて來る。

固より女中が串戯を言ふわけは無い。居ないものは居ないので、座敷を見ると、あとを片附けて掃出したらしく、きちんと成つて、點けたての眞を細めた臺洋燈が、影を大きく床の間へ這はして、片隅へ二間に疊んだ六枚折の屏風が如何にも寂しい。

而して誰も居ない八疊の眞中に、其の雙六巖に似たと云ふ紫縞の座蒲團が二枚、對坐に据ゑて

在つたのを一目見ると、天窓から水を浴びたやうに慄然とした。此處へも颯と一嵐、廊下から追つて来て、座敷を吹抜けて雨戸をカタリと鳴らす。

「恠うして、浦子に別れるのが極つた運命では無からうかと思つた……」

「浴室だ、浴室だ。見ておいで。と女中を追遣つて、倒れ込むやうに部屋に入つて、廊下を背後向きに、火鉢に擱つて、ぶる／＼と震へたんです。……老爺さん。」

——と雪枝は片手で胸を抱いて話した——

「亭主が上つて来ました。」

「え、一寸お引合はせ申します。此男が其の、明日雙六谷の途中まで御案内しますので、さあ、主、お知己に成つて置けや。」と障子の蔭に踞んで居た山男に顔を出させる、と此が、今しがたついで其處まで私を送つてくれた、其の若い男。……此方は其處どころぢや無い。

十六

「恠う成ると、最う外聞なんぞ構つては居られない。魅まれたか誑されたか、山路を夢中で歩いた事を言出すと、皆まで恥を言はぬ内に……其の若い男が半分で合點したんです。」

さあ、亭主も飛んでも無い顔をする。捜すのに、湯殿や小用場では追着かなく成つた。

（権七や、主は先づ、婆様が店へ走れ、旦那様、早速人を出しますで、お案じなさりませんやうに。主も働いてくれ、さあ来い。）

と若いものを連れて、どたばた引上げる時分には、部屋の前から階子段の上へ掛けて、女中まじりに、人立ちがするくらゐ、二階も下も何となく騒ぎ立つ。

雨戸を開けて、欄干から外を見ると、山気が冷かな暗を縫つて、橋の上を、提灯が二つ三つ、どや／＼と人影が、道を左右へ分れて吹立てる風に飛んで行く。

眞先に案内者権七の歸つて来たのが、ものの半時と間は無かつた。けれども、足を爪立つて待つて居る身には、夜中までかゝつたやうに思ふ。

婆さんに聞けば、夫婦づれの衆は、内で采粒を買はつしやると、兩方で顔を見合せながら、後退りをして、向う崖の暗い方へ入つたまで、それから覺えて居らぬ。目は疎し、暮方ではあり、やがて、暗くなつて了つた、と権七が言ふ。

のみ、で、手懸りは何にも無い。

（矢張何か私のやうに、魅まれて路を迷つたらうか。）

（然うでもござりやすめえ、奥様は、其のお前様を捜し歩行いて、其で未だ、お歸りが無いのでござりやせうで、天狗様も二人一所に攫はつしやることは滅多にねえ事でございます。今にお歸

りに成るでござりやせう。宿でも心配をして居りますで、夜一夜寝ねえで捜しますで、お前様は、まあ、休まつしやりましたが可うござります。

気が氣では無い、一所に捜しに出かけようと言ふと、いや／＼山坂不案内な客人が、暗の夜路ぢや、崖だ、谷だ、却つて足手纏ひに成る。……案内者に雇はれるものが、何も知らない前に道案内を爲たと言ふも何かの縁と思ふ。人一倍精出して捜さうから静かに休め、と頼しく言つて、其の權七すぐに又階下へ下りた。

一時騒々しかつたのが、寂寥ばかりして、平時より餘計に寂しく夜が更ける。……さあ、一分一秒、血が冷え、骨が刻まれる思ひ。時が経てば経ただけ、それだけ浦子の歸る望みが無くなると言つた勘定。九時が十時、十一時を過ぎて、音沙汰が無い。時々、廊下を往通ふ女中が、通りすがりに、

(何う遊ばしたのでございませう、)

(うむ、)

(御心配でございます。)

(あ、)

——返答が出来ないで、溜息を吐く雪枝の顔を見て、遁げるやうに二三人摺り抜けた。

やがて十二時を打つた。女中が床を取りに来て、一つ伸べて、二つ並べようと爲たので、

(そりや可からう、)と言つた時は、我ながら變な聲だと思つた。——勿論寝もせず、枕頭へ例の紫縞のを摺らして、落着かない立膝で何を聞くと無く耳を澄ますと、谿河の流がざつと響くのが、落ちた、流れた、打當てた、岩に碎けた、死んだ——と聞える。

(あ、つ)と思はしさに手で拂つて、坐り直して其處等を胸す、と密と座敷を覗いた女中が、黙つて、スーツと障子を閉めた。——夜が更けて寒からうと、深切に爲たに違ないが、未練らしい諦めろ、と愛想盡しを爲れたやうで、赫と顔が熱くなる。

背中がぞつと寒く成る……背後を見る、と床の間に袖疊みをした女の羽織、わがねた扱帯、何となく色が冷く成つて記念のやうに見えて来た——持主が亡くなると、却つてそんなものが、手ん手に生きて来たやうに思はれて、一寸觸るのも憚られる。

何處か、しゆつくと風が通る……

十七

神 盤
「うら悲しい、心細い、可厭な聲で、
(お客様あ、)

(奥様)と呼ぶのが、山嵐の風に響いて、耳へカーンと符を返してズバンと脳を抉る。

(お客様)

(奥方様)……は情ない。少し裏山へ近く成つたと思ふと、女の聲が交つて、

(奥様やあ)と呼んだ。ヒイと之が悲鳴を上げるやうで、家内が絞殺される叫びに聞える……最

う堪りません。

廊下を跣足で出て、階子段の上から倒に帳場を覗いて、

(御主人、御主人)

と、海が風いた後を、ぶる／＼震へる波のやうな畳の上に、男だか女だか、二人ばかり打上げられた體で、黒く成つて突伏した真中に、手酌でチビリ／＼飲つて居た亭主が、むつくり頭を上げて、

(まだ御寝りませんか)と言ひ／＼四五段上つた、中途の上下で欄干越に顔を合はせた。

(又入れ替つて出てくれたのかね、あ、言つて呼んでるのは、)

(へい、否、山深く參つたのが、近廻りへ引上げて來たでござります。)

(まだ、知れんのだね、あ、して呼立てて居るのを見ると、)

(へい、何しろ、早や、山も谷も數が知れん處でござりますけにな、……)

と歎息を爲したが、面を振つて、噓をした。

(しかし、あれでござりましょう。何分夜が更けましたで、道を教へますものも明方まで待ちませ

うし、又……奥方様も、何の道お草臥れでござりませうで、いつれにも夜が明けましたら分るに

相違ござりません。)

(分るつて? 死骸か、)

(え、?)

(死んだら其までだ。)と自棄を言つて寢床へ歸つて打倒れた。……

(お客様)

(奥様)と呼ぶのが十聲ばかりして、やがて、ガラ／＼と門の戸が大きく鳴つて開く。私は襟を被つて耳を塞いだ! 誰が無事だ、と知らせて來ても、最う聞くまい、と拗ねたやうに……勿論、何とも言つては來ません。

其辭、ガラ／＼と又……今度は大戸の閉つた時は、これで、最う、家内と私は、幽明所を隔て

たと思つて、思はず知らず涙が落ちた。……

ト先刻、止せ、と云つて留めたけれども、其でも女中が伸べて行つた、隣の寢床の、搔卷の袖

が動いて、煽るやうにして播起す。

(お、)と飛附くやうな返事を爲て顔を出したが、固より誰も居よう筈は無。枕ばかり寂しく
丁とあつて、木賃で無いのが尙ほうら悲しい。

熟と視詰めて、茫乎すると、並べた寢床の、家内の枕の兩傍へ、する／＼と草が生えて、短い
のが見る／＼伸びると、蔽ひかゝつて、萱とも薄とも蘆とも分らず……其の中へ搔卷がスーと消
える、と大な蛇のたりと寝て、私の方へ鎌首を擡げた。ぐつたりして手足を働かす元氣もない。
首を締めて殺さば殺せ、で這出すやうに頭を突附けると、眞黒に成つて小山のやうな機關車が、
ずゝすと天窓の上を曳いて通ると、柔いものが乗つたやうな氣持で、胸がふは／＼と浮上つて、
反身に手足をだらりと下げて、自分の身體が天井へ附着く、と思ふとはつと目が覺める、……夜
は未だ明けないのです。

同じやうな切ない夢を、幾度となく續けて見て、半死半生の體で、漸つと我に返つた時、亭主
が來て、

(御國許へ電報をお掛け被成りましては如何でござりませう。)と枕頭に坐つて居ました。

(馬鹿な。)

と一言のもとに卻けたんです。

十八

「怪我、過失、病氣なら格別、……如何に虚氣なればと言つて、」

——雪枝は老爺に此を語る時、濠端の草に胡坐した片膝に、握拳をぐい、と支いて腹に波立つ
まで氣競つて言つた。——

「女房が紛失した、と親類知己へ電報は掛けられない。」

(何しろ、最う些と手懸りの出来るまで其は見合はせよう。)

(で、ござりますが、念のために、お國許へお知らせに成りましては如何なもので、)

(可から、死骸でも何でも見附かつた時にせう。)

(其の、へい……死骸が何うも、)

(何だ、死骸が分らん。)

私は胸が裂けるほど亭主の言葉が癪に障つた。最う死骸に成つて、と言つたやうな、奴の言
種が何とも以て可思いんです。

神 鑿

(己が見着けて持つて歸る、死骸の來るのを待つて居れ。)と睨みつけて廊下を蹴立てて出た——
帳場に多人數寄合つて、草鞋穿の巡查が一人、框に腰を掛けて居たが、矢張此の事に就いてらし

いのです。

痘痕のある、柔和な顔で、氣の毒さうに私を見た。が口も利かないでフイと門を、人から振もぎる身體のやうにすん／＼出掛けました。

雲は白く山は蒼く、風のやうに、水のやうに、颯と青く、颯と白く見えるばかりで、黒髪濃い緑、山橋の一輪紅色をした袂に擬ふやうな色さへ、手がかりは全然ない。

目が眩むほど腹が空けば、また／＼と宿へ歸つて、

(おい、飯を食はせろ。)

で、又飛出す、崖も谷もほつつき歩行く、——と雲が白く、山が青い。……外に見えるものは何にもない。目が青く脳が青く成つて了つたかと思ふばかり。時々黒いものがスツ／＼と通るが、犬だか人間だか差別がつかぬ……客人は變に成つた、氣が違つた、と云ふ聲が嘲ける如く、憐む如く、咳く如く、また呪詛ふ如く耳に入る……

(お容様)

(奥様)と呼ぶのが峰から傳はる。裾を返して谷へカーンと響く、——雲が白く、山が青く、風が吹いて水が流れる。

(客人は氣が違つた)と言ふのが分る。

可し、何とでも言へ、昨日今日二世かけて契を結んだ戀女房がフト掻消す様に行方が知れない、其を捜すのが狂人なら、飯を食ふものは皆狂氣、火が熱いと言ふのも變で、水が冷いと思ふも可笑しい。温泉の湧出すなどは、沙汰の限りの狂氣山だ、は、は、は、

——と雪枝は額髪を搔るまで、膝を抱へて、高笑を遣つた——

雲が動いて、薄日が射して、反らした胸と、仰いだ其の額を微かに照らすと、ほつと酔つたやうな色をしたが、唇は白く、目は血走るのである。

——聞いて居た老爺は小首を傾けた——

急に又雪枝は、宛然稚子の爲るやうに、兩掌を雙の目に確と當てて、がつくり俯向く、背中に雲の影が暗く映した。

「其の中に四邊が眞暗に成つた。暗く成つたのは夜だらう、夜の暗さの廣いのは、田か畠か平地らしい、原かも知れない……一目其の際限の無い夜の中に、墨が染んだやうに見えたのは水らしかった……が、水でも構はん、女房の行方を捜すのに、火の中だつて厭ひは爲ない。づか／＼踏込まうとすると、

(あ、深いぞ、誰ぢや、水へ……)

と其時、暗がりから、しやがれた聲を掛けて、私を呼留めたものがあります。

暗に透かすと、脊丈の高い大な坊主が居て、地から三尺ばかり高い處、宙で胡坐搔いたも道理、汀へ網代を組んで板を渡した上に構込んで、有らう事か、出家の癖に、……水の中へは廣い四手網が沈めてあります、……」

老爺は眉毛をひくつかせた。

「はての。」

城ヶ沼

十九

「其の入道の、のそくと身動きするのが、暗夜の中に、雲の裾が低く舞下つて、水にびつしより浸染んだやうに、ぼうと水気が立つので、朦朧として見えた。

（沼ぢや、氣を付けやれ。）と打切つたやうに言ひます。

（沼でも海でも、女房が居れば入らずに置けない。）

苛々するから、此方はふてくされて突掛つたんです。

と入道が耳を貫いて、骨髄に徹る事を、一言。

（は、あ、此處なは、御身が内儀か、）

と言ひます。

（此處なは……私の……女房だと？……）

（お、私が今出逢うた、水底から仰向けに顔を出いた婦人の事ぢや。）

（や、溺れて死んだか。）

とぼつたり膝を支く、と入道は網代の上から、蔽被さるやうに覗いて、

（待て、待て、死骸を見たでは無い。ぢやが、正のものでもなかつた……謂はば影ぢやな。聲の有る色の有る影法師ぢや……其の者から、御身に逢うて、話してくれい、と私が託言をされたよ。

……

何かな、御身は遠方から、近頃此の雙六の温泉へ、夫婦づれで湯治に来て、不圖山道で其の内儀の行方を失ひ、半狂亂に捜してござる御仁かな。）とつけく訊ねる。

女房が失せて半狂亂、――

と雪枝は、思出すのも、口惜しさうに齒齧みをして、

「察して下さい、……唯其の音信の聞きたさに、

（え、其のものです。）と返事を爲ました。

神 鑿

(やれ、氣の毒。)

とさら／＼と法衣の袖を掻合はせる音がして、

(私は旅のものぢやが、此の沼は、城ヶ沼と言ふげぢやよ。)

老爺さん、其處は城ヶ沼と言ふ處だつた。
雪枝は息せはしく成つて一息吐く。ト老爺は煙草を拂いた。吸殻の落ちた小草の根の露が、油のやうにじり／＼と鳴つて、煙が立つと、ほか／＼薄日に包まれる。雲は稍薄く成つた、が、天守の棟は、聳え立つ峰よりも空に重い。

「え、城ヶ沼の。はあ、夢中で其處ら駈廻らしつたものと見える……それは山の上では無い。お前様が温泉へ來さつしやつた街道端の、田圃に近い樹林の中にある大い沼よ。——何が、其の水は、谿河の流を堰いて溜めたでは無うて、昔から此の……此處な濠の水が地の底を通ふと言ふんでがす。……」

お天守の下へも穴が徹つて、お城の拔道ぢや言ふ不思議な沼での、……私が祖父殿が手細工の船で、殿様の妾を焼いたと言つけ、其ん時ハイ、其の影が、城ヶ沼へ歴然と映つて、空が眞黒に成つたと言ふだ。……其さ眞個か何うか分らねども、お天守の棟は、今以て明かに映るだね。水の静な時は大い角の龍が底に沈んだやうで、風がさら／＼と吹く時は、胴中に成つて水の面を鱗

が走るで、お城の様子が覗けるだから、以前は沼の周圍に御番所が有つた。尤も、はあ、殺生禁制の場所でがんしたよ。

其の上、主が居て住む、と云うて、今以て誰一人釣をするものはねえで、鯉鮒の多い事。……

お前様が温泉の宿で見さしつけない、圍爐裏の自在鍵のやうな奴さ、山蟻が這ふやうに、ぞろぞろ歩行く。

あの、沼へ、——待たつせえ、

と又眉をびく／＼遣り、

「四手場を拵へて網を張るものは、近郷近在、私他に無いのぢやが、……お前様が見さしつた、城ヶ沼の四手場の網代の上の黒坊主と……はてな……其の坊様は大い割に、色が蒼ざめては居らんかの。」

二十

「あ、蒼ざめた、」

と雪枝は起直つて言つたのである。

「鼻の圓い、額の廣い、口の大きい……其の顔を、然も厭な色の火が燃えたので、暗夜に見ました。」

……坊主は狐火だ、と言つたんです。」

「それ／＼、其の坊様なら、宵の口に私が頼んで四手場に居て貰うたのぢや……はあ、其處へお前様が行逢はしつたの。はて、何うも、妙智力、旦那様と私は縁が有るだね。」

「確に師弟の縁が有ると思ひます、」

と雪枝は慇懃に言ふ。

「まあ、申戯は措かつせえ。……時に其の坊様は何と云ふでがすね。」

「え、……」

(私は旅から旅をふら／＼と逡巡るものぢやが)と坊様が言ふんです——

(日が暮れて此處を通りかゝると、今、私が御身に申したやうに、沼の水は深いぞ、と氣を注げたものがある。此の四手場に片膝で、暗の水を視詰めて居た老人ぞや。さて漁はあるか、と問へば、漁は有るが、魚は一向に獲れぬと言ふ。

希有な事を聞くものぢや、其の理由は、と尋ねると、老人の返事には、)

と其の坊主が話したんです。……ぢや老爺さん——老人が貴下なら、貴下が坊主に話されたと

云ふ城ヶ沼の鯉鮒は、網で掬へば漁はあるが、畚に入れると直ぐに消えて、一尾も底に留らぬ。

鯉一尾獲物は無い。無いのを承知で、此處に四手を組むと言ふのは、夜が更ると水に沈めた網

の中へ、何とも言へない、美しい女が映る。其を見たい爲に、獨り恚うやつて構へて居る、……

とお話があつたやうに、其の時坊主から聞いたんです……それは眞個の事ですか？ 老爺さん。」

一切、事實だ、と老爺は答へた。

はじめの内、……獲た魚は畚の中を途中で消えた。荻尾花道、木の下路、茄子畠の畦、藪疊、

丸木橋、……城ヶ沼に漁つて、老爺が小舎に歸る途中には、穴もあり、祠もあり、塚もある。月

夜の陰、銀河の絶間、暗夜にも限ある要害で、途々、狐狸の輩に奪ひ取られる、と心付き、煙草

入の根附が軋んで、腰の骨の痛いまで、下つ腹に力を籠め、氣を八方に配つても、瞬をすれば、

一つ失せ、鼻をかめば二つ失せ、嚏をすればフイに成る。……で、未だも途中まで畚の重い内は

張合もあつた。けれども、次第に畜生、横領の威を奮つて、宵の内からちよろりと攫ふ、漁の後

から嘗めて行く……見る／＼四手網の網代の上で、腰の周圍から引奪る。

尤も其の時は、なんとなく身近に物の襲ひ來る氣勢がする。左の手がびくりとする時、左から

丁手搔で、右の腕がぶるつと爲る時、右の方から狙ふらしい。頸首筋の冷りと爲るは、後に構

へてござる奴。天窓から悚然とするのは、惟ふに親方が御出張かな。いや早や、其と知りつゝ、

さつ／＼と持つて行かれる。尤も身體を蓋に爲て畚の魚を抱いてでも居れば、如何に畜生に業通

が有つても、まさかに骨を徹しては抜くまい、と一心に守つて居れば、沼の眞中へひら／＼と火

を燃す、はあ、變だわ、と氣が散ると、立處に鯉が失せる。其の術で行かねば、業を變へて、何處とも知らず、眞夜中にアハ、アハ、笑ひをる、吃驚すると鮒が消える。——此方も自棄腹の胸を極めて、少々脇の下を擦られても、堪へて静として番を守れば、さすが目に見せて、尖つた面、長い尻尾は出さぬけれど、さて然うして見た日には、網代を組んで四手を沈めて、身體を張つて、體よく賃無しで雇はれた城ヶ沼の番人同然、寢酒にも成らず、一向に市が榮えぬ。

二十一

魚が寄ると見れば、網を揚げる、網を兩手で、ぐい、と引いて、目も心も水に取られる時の慘憺さ。ガサリなどと音をさして、番を俯向けに引繰返すと、這奴に、して遣らるゝはまだしもの事、捕つた魚が翻然と刎ねて、ざぶんと水に入つてスイと泳ぐ。

餘の他愛なさに、效無い殺生は止めによいと、發心をした晩、これが思切りの網を引くと、一面城ヶ沼の水を翻して、大四手が張裂けるばかり縦に成つて、ざつと兩隅から高く星の空へ影が映して、沼の上を離れる時、網の目を灌いで落ちる水の光り、霞の懸つた大な姿見の中へ薄りと女の姿が映つた。

「よく、はい、噂に聞くお客様が懸つたやうだね。恚う、其の網を引張つて、

老爺は手で掴んで腰を反らして言ふのであつた。——

「引き懸けた處でがんしよ……鮒一尾入つた手應もねえで、水はざんざと引覆るだもの。人間の突入つた重さはねえだ。で、持つたま、大搖りに身體ごと網を揺れば、矢張揺れて、衣服だか、鱗だか、尻尾だか、網の中の婦の姿がふらふら動くだ。はて、變だと手を離すと、ざぶりと沈むだ。其の網の底の方……水中に、ちらちらと顔が見える……其のお前様、白い顔が正的に熟と此方を見るだよ。

や、早や其時は番が網代を落こちて、泥の上に俯向けたね。其奴が、へい、足を生やして沼へ駈込まぬが見つけものだで、畜生め、此の術で今夜は占めをつた。

何のつけ、最う二度と來る事ではない、とふつと我を折つて歸りませえ。怪訝な事には眉が何う、目が何う、と云ふ覺はねえだが、何とも言はれねえ、其の女の容色だで……色も戀も無けれど、繪を見るやうで、何とも其の、美しさが忘れられぬ。

化けたなら化けたで可、今夜は蛇に成らうも知んねえが、最う一晚出懸けて見べい。……
で、又てくくと沼へ出向くと、一刷け刷いた霞の上へ、遠山の峰より高く引揚げた、四手を解いて沈めたが、何の道持つては歸られぬ獲物なれば、断念めて、鯉が黄金で、鮒が銀でも、一向に氣に留めず、水に任せて夜を更す。

風が吹き、風が風ぎ、水が動き、水が静まる。大沼の刻限も、村里と變り無う、やがて丑滿と思ふ、昨夜の頃、ソレ此處で、と網を取つたが、其の晩は上へ引揚げる迄もなく、網代の上から水を覗くと歴然と又顔が映つた。

——と老爺が話す。

「聞かつせえまし、肩から胸の邊まで、薄らと見えるだね。試して見ろで、やつと引き揚げると、矢張り網に懸つて水を離れる……今度は、ヤケにゆつさゆさ引振ふと、揉消すやうにすつと消えるだ——其處でざぶんと沈める、と又水の中へ露れる。……」

三夜四夜と續いたが、何時も其の時刻に屹と映るだ。追々馴染が度重ると、へい、朝顔の花打沈めたやうに、襟も咽喉も色が分つて、口で言ひやうは知らぬけれど、目附なり額つきなり打魂消た別嬪が、過般中から、同じ時分に、私と顔を合はせると水の中で莞爾笑ふ。……

や、其の笑顔を思うては、地踏躡踏んで堪へても小舎へは寝られぬ。雨が降れば蓑を着て、月の良い夜は頬被り。つい一晚も缺かさねえで、四手場も此の爺も、岸に居着きの巖のやうだ——扱氣が付けばひよんな事、沼の主に魅入られた、何か前世の約束で、城ヶ沼の番人に成つただかな、何處で死ぬ身と考へると、心細い身の上ぢやが、何と爲ても思切れぬ……いけ年を爲た爺が、女色に迷ふと思はつしやるな。持たぬ孫の可愛さも、見ぬ極樂の戀しいも、これ、同じ事と考へ

ただね。……

さて困つたは、寒ければ、へい、寒し、暑ければ暑い身ぢや、飯も食へば、酒も飲むで、晝間寝て、夜出懸けて、沼の姫様見るは可えが、そればかりでは生きて居られぬ。」

雲の聲

二十二

譬へば幻の女の姿に憧がる、のは、老の身に取り、極樂を望むと同じと爲る。けれども其の姿を見ようには、……沼へ出掛けて、四手場に踞つて、或刻限まで待たねばならぬ。で、屋根から月が射すやうな譯には行かない。其處で、稼ぎも爲す、活計も立てず、夜毎に沼の番の難行は、極樂へ参りたさに、身投げを爲るも同じ事。

そんなら、四手場を留めにして、小舎で草鞋でも造れば可が、因果と然うは断念められず。日が暮れると、そ、髪立つまで、早や魂は引窓から出て城ヶ沼を差し、ふはくと白い蝙蝠のやうに徜徉ひ行く。

待てよ、恚うまで、心を曳かる、のは、よも尋常ごとでは有るまい。傳へ聞く、沼の中へは古

城の天守が倒に宿る……我が祖先の術の爲に、怪しき最期を遂げた婦が、子孫に絡る因縁事か、其とも弔らはれず浮かばぬ靈が、無言の中に供養を望むのであらうも知れぬ。獨りでは何しろ荷が重い。村の誰かにも見せて、怪しさを唯濃の如く散らさう、と人に告げぬのでは無いけれども、晝間さへ、分けて夜に成つて、城ヶ沼の三町四方へ寄附かうと云ふ兄哥は居らぬ。

殆ど我身を持って餘した頃の、其の夜……

「お前様が逢はした坊主が来て、のつそり立つた。や、これも怪しい。顔色の蒼ざめた、墨の法衣の、がんばり入道、影の薄さも不氣味な和尚。鯨でも化けたか、と思うたが——恠くくの次第ぢや、御出家、——大方は亡靈が同向を頼むのであらうと思つて、功德の爲め、丑満まで此處にござつて引導を頼むでがす。——旅の疲勞も有らつしやうが、何なら今夜は私が小舎へ休んで、明日の晩にも、と言つたが、(其には及ばぬ……若しや、其が眞實なら、片時も早く苦患を救つて進ぜたい。南無々々)と口の裡で唱ふるで、饗應振に、藁など敷いて坐らせて、網代の上を黒坊主と入替つた。

さあ、身代りは出来たぞ！ 一目彼女の女を見され。即座に法衣を着た巖と成つて、一寸も動けまい、と暗の夜道を馴れた道ぢや、すたくと小舎へ歸つてのけた。

翌朝疾く握飯を拵へ、竹の皮包みに爲て、坊様を見舞に行きつけ……霧の中に影もねえだよ。

はあ、よもや、とは思つたが、矢張り鯨めが來させたげな。え、埒もない、と氣が抜けて、又番人ぢや、と落膽したが、其の晩もう一度行く、と待つとも無う夜が更けても、何時の影は映らなんだ。四手を上げて星も懸らず、鬢の香のする雫も落ちぬ。あ、引導を渡したな。勿體ない、名僧智識で有つたもの、と網代の藁を頂いたがの。……其では、お前様が私の後へござつて、其の坊主に逢したものだんべい。……

……までは、はあ、分つたが、私が城ヶ沼の水に映る女を見はじめたは久しい以前ぢや。お前様湯治にござつて、奥様の行方が知れなく成つたは、つい此の頃の事ではねえだか、坊様は何處で聞いて、奥様の言づけを爲ただかの。」

「其を坊様が言つたんです。其の出家の言ふには、

(……人は知らぬが、此處に居た老人に、水の中へ姿を顯す幻の婦に同向を、と頼まれて、出家の役ぢや、……宵から念佛を唱へて待つ、と時刻が來た。

大沼の水は唯、風にも成らず雨にも成らぬ、灰色の雲の倒れた廣い亡骸のやうに見えたのが、汀からはじめて、ひたくと呼吸をし出した。ひたくと言ひ出した。幽にひたくと鳴り出した。

町方、里近の川は、眞夜中に成ると、流の音が止むと云ふ、が反對ぢやな。此の沼は、其時分

から動き出す……呼吸が全體に通うたら、真中から、むつくと起きて、どつと洪水に成りはせぬ
かと思ふ物凄さぢや。

唯、其の中に何やら聲がする。……と坊主が言ふんです。」

二十三

「其の聲が、五位鷲の、げつく、げつくとも聞えれば、狐の叫ぶやうでもあるし、颯がキチ／＼
と齒ぎりりする、甲走つたのも交つた。然うかと思ふと、遠い國から鐘の音が響いて來るか、と
も聞取られて、何となく其處等ががやく／＼し出す……雑多な聲を袋に入れて、虚空から沼の上へ、
口を弛めて、わやく／＼打撒けたやうに思ふと、

(血を洗へ。)

(洗へ。)

(人間の血を洗へ。)

(笞で破つた。)

(鞭で切つた。)

(爪で裂いた。)

(膚を淨めろ。)

(淨めろ。)

と高く低く、聲々に大沼のひた／＼と鳴るのが交つて、暗夜を刻んで響いたが、雲から下りた
か、水から湧いたか、沼の真中あたりへ薄い煙が朦朧と靡いて立つ……

(煮殺すではないぞ。)

(うでるでない。と言ふ。)

(湯加減、湯加減。)

(水加減。と喚く。)

(沼の湯は熱いか。と、ぼやけた音で聞くのがある……)

(熱湯。と簡單に答へる。)

(人間は知るまいな。)

(知るものか。と傲然とした調子で言つた。)

(沼から何で沸湯が出る。)

(此の湯が沸いて殺さぬと、魚が殖えて水が無くなる、沼が乾くわ。と言ふ。)

(饒舌るな、働け。)

(血を洗へ。)

(傷を洗へ。)

(小袖を剥がせ。)

(此の紫は?)

(菖蒲よ、藤よ。)

(帯が長いぞ。)

(蔦、桂、山鳥の尾よ。)

(下着も奪へ。)

(此の紅は。)

(もみぢ、花。)

(やあ、此の膚は。)

(山陰の雪だ。)

ひいッ、と魂切つて悲鳴を上げた、絲のやうな女の聲が餌を返して沼に響いた。――

――坊主が此處まで言つた時、聞いてた私は熱鐵のやうな汗が流れました。

――と雪枝は老爺に語りながら――唇を戦かせて、

「尚ほ坊主が續けて、話すんですがね、

さあ何ものが寄つて集つて、誰かを素裸にしたと思へば、

(犬よ、犬よ)と呼んだのがある。

びやう、びやう、うお、うお、うお、うお、と遙かに犬が長吠して、可忌しく夜陰を貫いたが、

瞬く間に、里の方から、風のやうに颯と來て、背後から網代場の上に踞つた――法衣の袖を掠め

て飛んだ、トタンに腥い獣の香がした。

水の上で、わん、わん、と鳴く……

(男は知るまい。)

(うゝ)と犬の聲。

(不便な奴だ。)

(びやう)と又鳴く。

此の間、ざぶりくと水を懸ける音が頻にした。

(やがて可いか。)

(血は留まつた。)

(又鞭打つて。)

(又洗はう。)

(やあ、己が手。)

(我が足。)

(此の面に絡はるは。)

(水に擴がる黒髪ぢや。)

(山の婆々の白髪のやうに、すく／＼と痛うは刺さぬ。)

(蛇よりは心地よやな。と次第に聲が風に乗りに行く……)

二十四

「びやう／＼と凄い聲で、形は見えず、沼の上で、空ざまに犬が鳴く。

(犬よ、犬よ。)

(おう。)と吠えた。

(人間の目には見えぬ……城山の天守の上に、女は梁から釣して置く、と男に言へ！)

(何が、彼の耳へ入らう。)

(わん、と鳴いたら、犬だと思はう、彼の痴漢が。)

と嘲る聲。傍から老けた聲して、

(……其の託言は、犬では不可ぬ。時鳥に一聲鳴かせろ。)

(まだ／＼、まだ／＼、山の中の約束は、人間のやうに間違はぬ。今は未だ時鳥の鳴く時節で無い。)

(唯姿だけ見せれば可い。温泉宿の二階は高し。あの欄干から飛込ませろ、……女房は歸らぬぞ、

女房は歸らぬぞ、と羽で天井を、ばさ／＼遣らせろ。)

(男は、女の魂が時鳥に成つた夢を見て、白い毛布で包んで取らうと血眼で追駈け廻さう……)

寢惚面見るやうだ。)

どつと笑つて、天守の方へ消えた後は、颯々と風に成つた。

が、田島野の空を、山の端差して、何となく暗ながら雲が、むく／＼と通つて行く。其の氣勢が、やがて晝間見た天守の棟の上に着いた程に、ドボンと凄い音がして、網代に乗つた目の下、老人が沈めて去つた四手網の真中あたりへ、した／＼かな物の落ちた音。水が環に成つて、颯と網を乗出して展げた中へ、天守の影が、壁も灰白く見えるまで、三重あたりを樹の梢に圍まれながら、歴然と映つて出た。

神 整

不思議や、其の天守の壁を透いて、中に灯を點けたやうに、魚の形した黄白い明のひら／＼す

るのが、矢間の間から、深い處に横開けで、網の目が映るのか凡そ五十疊ばかりの廣間が、水底から水面へ、斜に立懸けたやうに成つて、ふはくと動いて見える。

他に何も無く誰も居らぬ。灯唯一つ有る。其の灯が、背中から淡く射して、眞白な乳の下を透す、……帯のあたりが、薄青く水に成つて、ゆらゆらと流れるやうな、下が裾に成つて、一寸火の影で洞から切れた形で、胸を反らした、顔を仰向けに、悚然とするやうな美しい婦。

處で、水へ映る影と言へば、我が面影を覗くやうに、沼に向つて、顔を合はせるやうに見えるのであらう、と思つたが違ふ。——黒髪が岸へ、足が彼方へ、たとへば向うの汀から影が映すのを倒に視める形。つくづくと見れば無慚や、形のない聲が言交はした如く、頭が疊の上へ離れ、裾が梁にも留まらずに上から倒に釣して在る……

と身を悶くか、水が揺れるか、わななくと姿が戦く——天守の影の天井から眞黒な雫が落ちて、其の手足に懸つて、其のま、髪の毛を傳ふやうに、長く成つて、下へぼたくと落ちて、すらりと伸びて、廻りつ、畝りつするのを、魚の泳ぐのか、と思ふと幾條かの蛇で、梁にでも巢をくつて居るらしい。

然うかと思ふと、膝のあたりを、のそくと山猫が這つて通る。階子の下から上つて來るらしく、海豚が躍るやうな影法師は狐で、ひよいと飛上るのもあれば、ぐるぐると歩行き廻るのもあ

るし、洞を伸ばして矢間から衝と出て、天守の棟で鯨立ちに成るのも見える。

時々ひらりと鳥が出て、翼で、女の胸を拂く……

中に見る目も恐ろしかったは、——茶と白斑の獸が一回、天守の階子を、のしりと、鱧爪で踏んで上つて、疊を抱いて人のやうに立上つた影法師が、女の上を横に通ると、姿は隠れて、颯と着く成つた面影と、ちらりと白い爪尖ばかりの残つた時で——獸が頓て消えたと思ふと、胸を映した影が波立ち、髪を宿した水が動いた……

——（御身が女房の光景ぢや。）と坊主が、私の顔の前へ、何故か大きな掌を開けて出した。——

詭へ物

二十五

「私は息を引いて退つたんです。」と雪枝は尙ほ語り續けて、——

「……水の中からもなく、空からもなく、幽に細々とした消えるやうな、少い女の聲で、其の出家を呼んだ、と言ひます。

而して、百年以來、天守に棲む、或怪いもの手に攫はれて、今見らるゝ通りの苦患を受ける

……何とぞ此の趣を、温泉に今も逗留する夫に傳へて、寸時も早く人間界に助けられたい。救ふには、天守の主人が満足する、自分の身代りに成るほどな、木彫の像を、夫の手で彫んで償ふ事で、其の他に助かる術はない……とあつた。

(都の人、唯私が口から言うたでは、餘の事に眞とされまい。……あはれな犠牲の婦人も、唯憊う申したばかりでは、夫も心に疑ひませう……今其の印を、と言つてな、色は褪せたが、可愛い唇を動かすと、白齒に銜へたものがある。白魚の目のやうな黒い點々が一つ見えた……口からは不躰ながら、見らるゝ通り縛めの後手なれば、指さへ隨意には動かされず……あゝ、苦しい。と總身を震はして、小さな口を切なさうに曲めて開けると、煽つ水に搔亂されて影が消えた。憂然と音して網代の上へ、大空からハタと落ちて來たものがある……手に取ると霰のやうに冷たかつたが、消えも解けもしないで、破れ法衣の袖に残つた。

印はこれぢや。

と私の掌を開けさせて、ころりと振つて乗せたのは、忘れもしない、雙六谷で、夫婦が未來の有無を賭爲ようと思つて買つた采だつたんです。――

(都の人、
と坊主は又更めて、

(御身は木彫を行るかな。)

(行ります！)

と答へた時、私は蘇つたやうに思つた。水も白く夜も明る成つた。……浦子の行方も知れ、其の所在も分り、草鞋や松明で探つた處で、所詮無駄だと斷念も付く……其に、魔物の手から女房を取返す手段も出來た。我が手に身代の像を作れと云ふ、敢て黄金を積み、山を崩せ、と命ずるのでは無いから、前途に光明が輝いて、心は早や明かに渠を救ふ途の第一歩を辿り得た。

草を開いて、天守に昇る路も一筋、城ヶ沼の水を灌いで、野山をかけて流すやうに足許から動いて見える。

我が妻よ、聞くが如くんば、御身は肉を裂かれ、我は腸を斷つ。相較べて劣りはせじ。堪へよ、暫時、製作に骨を削り、血を灌いで、……其の苦痛を償はう、と城ヶ沼に對して、瞑目し、振返つて、天守の空に高く兩手を翳して誓つた。

其の時、浦子が唇を開いて、僧の手に落したと云ふ、猪の牙の采を自分の口に含んで居た。が、同じ舌の尖に觸れた、と思ふと血を絞つて湧き出づる火のやうな涙とともに、ほろり、と采が手に落ちた。其の掌を忘るゝばかり心を詰めて握緊めた時、花の輪が渦くやうに製作の興が湧いた。――閉づる、又開く、扇の要を思付いた。骨あれば筋あれば、手も動かう、足も伸びよう……

風ある如く言はう……と早や我が作る木彫の像は、生きて動いて、我が身ながらも頼母しい。さて其の要は、……手に握つた采であつた。

天が命じて、我をして成さしむる、我が成す美女の立像は、其の掌に采を包んで、作の神祕を胸に籠めよう。言ふまでも無く、其の面影、其の姿は、古城の天守の囚と成つた、最惜い妻を其のまゝ、豁然として悟ると同時に、腕には斧を取る力が籠つて、指と指とは鑿を持たうとして自然で動く——時なる哉、作の頭に飾るが如く、雲を破つて、見々と星が映つた。

星の下を飛んで歸つて、温泉の宿で、早や準備を、と足が浮く、と最う遠く離れた谿河の流が、砥石を洗ふ響を傳へる。

二十六

然うすると、心に刻んで、想像に製り上げた……城の俘虜を模型と爲た彫像が、一團の雪の如く沼縁にすらりと立つ。手を伸べよ、と思へば伸べ、乳を蔽へと思へば蔽ひ、髪を亂せと思へば亂れ、結べよ、と思へば結ばる——さて、衣を着せようと思へば着る。

作の出来榮を豫想して、放つ燻、閃めく光の如く眼前に露はれた此の彫刻の幻影は、悪魔が手に帯を奪はうとして、成らず、衣を解かうとして、得ず、縛められても惱まず、鞭つても痛まず、

恐らく火にも焼けず、水にも溺れまい。

見よ、同じ幻ながら、此の影は出家の口より傳へられたやうな、倒に梁に釣される、纖弱い可哀なものでは無い。眞直に、正しく、美しく立つ。あゝ、玉の如き肩に、柳の如き黒髪よ、白百合の如き胸よ、と恍惚と我を忘れて、偉大なる力は、我が手に俵らるべき此の佳作を得むが爲め、良匠の精力をして、短き時間に盡さしむべく、然も其の勢力に仕拂ふべき、報酬の量の莫大なるに苦んで、生命にも代へて最惜む戀人を假に奪うて、交換すべき條件に充つる人質と爲たに相違ない。

卑怯なる哉、土地祇、……實に雪枝が製作の美人を求めば、禮を厚くして來り請はずや。もし其の代價に苦むとならば、玉を捧げよ、能はずんば鑽石を捧げよ。能はずんば巖を缺いて來り捧げよ。一枝の桂を折れ。一輪の花を摘め。爰ぞみだりに妻に仇して、我をして避くるに處なく、辭するに其の術なからしむる。……汝等、此處に、立所に作品の影の顯れたる此の幻の姿に對して、其の禮無きを恥ぢざるや……

と背後から視めて意氣昂つて、腕を拱いて、虚空を睨んだ。腰には、暗夜を切つて、直ちに木像の美女とすべき、一口の寶刀を佩びたる如く、其の威力に脚を踏んで、胸を反らした。

——本氣の沙汰ではない、世にあるまじき呵責の苦痛を受けて居る、女房の音信を聞いて、赫

と成つて氣が違つたんです。――

我と我が想像に酔つて、見惚れた玉の膚の背を透して、坊主の黒い法衣が映る、と水の中に天守の梁に釣下げられた、其の姿を獸の襲ふ、其の佛を歴然と見た。無慚の狀に、ふつと搔消した如く美しいものは消えた。

(呼ぶわ、呼ぶわ。)

と云つた坊主の聲。

(お、い〜)

(お客様、お客様。)

と叫ぶのが、遙に、弱い稻妻のやうに夜中を走つて、提灯の灯が點々啜に徜徉ふ。

(お客様。)

(旦那)

(奥方様。)

あゝ、又奥方様をくはせる。……剩へ、今心付いて、耳を澄ませて聞けば、我自らも、此の頃では鉦太鼓こそ鳴らさぬけれども、土俗に今も遣る……天狗に攫はれたものを探す方法で、あの通り呼立て居る――成程然う思へば、何時温泉の宿を出て、何處を通つて、城ヶ沼に來たか覺えて居らぬ。

(御身を呼ぶぢやろ、去なつしやい。)と坊主が、はつと又其の掌を擴げた。此の煽動に横顔を拂はれたやうに思つて、蹠蹠としたが、惟ふに幻覺から覺めた疲労であらう、坊主が故意に然うしたものでは無いらしい。

(御身が内儀の言づけを忘れまいな。)

(忘れない。)

と奮然として答へた。既に鬼神に感應ある、藝術家に對して、坊主の言語と舉動は、何となく嘗め過ぎたやうに思はれたから……其のまゝ、肩を聳やかして、三つ四つ輝く星を取つて、直ちに額を飾る意氣組。脊を高く、足を踏んで、沼の岸を離れると、網代に突立つて見送つた坊主の影は、背後から蔽覆さる如く、大なる形に成つて見えた。

二十七

神 鑿
「温泉の宿を差して、城ヶ沼から引返す途中は、氣も漫に、直ぐにも初むべき――否、手は既に何等か其に向つて働く……新しい事業に對する感興の雲に乗るやう、腕が翼に成つて、星の下を飛ぶが如き心地した。

怒うまで情の昂つた處へ、はたと宿から捜しに出た一行七八人の同勢に出逢つたのである……定紋の付いた提灯が、一群の中に三ツばかり、念佛講の崩れとも見えれば、尋常遠出の宿引とも見える。が、旅籠屋に取つては實際容易な事では無からう——假初に宿つた夫婦が、婦は生死も行方も知れず、男は其が爲に、殆ど狂亂の形で、夜晝とも無しに迷ひ歩行く……不面目ゆゑ、國許へ通知は無用と、當人は堅く留めたものの、唯、然やうで、とばかりで旅籠屋では済まして居られぬ。

で、宿の了簡ばかりで電報を打つた、と見えて、其處で出逢つた群の内には、お浦の親類が二人も交つた。……此の中に居ない巡查などは、同じ目的で、別の方面に向つて居るらしい。

畦路で出合がしらに、一同は騒ぎ立てた。就中、わざ／＼東京から出張つて来た親類のものは、或は慰め、或は勵まし、又戒めなどする種々の言葉を、立續けに饒舌つたが、頭から耳にも入れず……暗闇の路地へ入つて、ハタと板塀に突當つたやうに、棒立ちに成つて居たが、唐突に、片手の掌を開けて、ぬい、と渠等の前へ突出した。坊主が自分に向つて同じ事を爲たのを、フト思出したのが、殆んど無意識の舉動に出た。ト尠からず一同を驚かして、皆たち／＼と成つて退る。ト此の鑿を持ち、鑿を持つべき腕は、一度掌を返して、多勢を壓して將棊倒しにもする、大なる權威の備はるが如くに思つて、會心自得の意を、高聲に漏らして、呵々と笑つた。

(御苦勞、御苦勞、眞に御骨折を懸けて誰方にも相濟まん。が、最う御心配には及ばんだ。——お聞きなさい、行方の知れなかつた家内は、唯今其の所在が分つた。……ナニ、無事か？ 無事かではない、考へて見たつて知れます。纖弱い婦だ、然も蒲柳の質です。一寸躓いても怪我をするのに、方角の知れない山の中で、搔消すやうに隠れたものが、無事で居よう筈はないではないか。

決して安泰ではない。正に其の爪を剥ぎ、血を絞り、肉を捲り骨を削るやうな大苦患を受けて居る、倒に釣られて居る。)

と戦いたが、肩を擗かして、

(何處に居る？ 何、お浦の所在は何處だ、と言ふのか。いや、君方に、其は話しても分るまい。水の底のやうな、樹の梢のやうな、雲の中のやうな、……それぢや分らん、分らない、と言ふかね、勿論分りませんと！)

吾輩には丁と分つて居る。位置も方角も残らず知つて——指して言へば、土地のものは残らず知つて居る。けれども其を話すとすると、それ行け、救へで、松明を振り、鯨波の聲を揚げて騒ぐ、騒いだ處で所詮駄目です。

神 誰が行つても、何者が騒いでも、逆も彼は救ひ出せない。

お、！ 君達にも粗想像出来るか。お浦は魔に攫はれた、天狗が掴んだ、……恐らく然うだらう。……が、私は此を地祇神の所業と惟ふ。たゞし、鬼にしる、神にしる、天狗にしる、何のためにお浦を攫つたか、其の意味が分るまい、諸君には知れなからう。

獨りこれを知るものは吾輩だよ。而して此を救ふものも又吾輩でなければ不可い。然も彼を連れ歸る道は、丁と最う附いて居るんだ。唯少時の辛抱です。いや、決して貴下方が御辛抱なさるには及ばん。辛抱をするのは浦子だ。可哀相な婦だ。……我慢してくれ、浦子、腕は確だ。と、掌を開いて、ぱつ、と出す。と一同はどさくと又退つた。吃驚して泥田へ片脚踏したのもある、……ばちやりと音して。……

(氣が違つた。)

(變だ。)

(眞個だ。……と囁き合ふ。)

祠

「狂氣した、變だ、と云ふのは言葉の切目毎に耳に入つた。が、これほど確な事を、渠等は雲を掴むやうに聞くのであらう。我は手に握つて、雙の眼で明かに見る采の目を、多勢が暗中に摸索して、丁か、半か、生か、死か、と、喧々騒ぎ立てるほど可笑な事は無い。

(は、、大丈夫、心配は無いと云ふに、——浦子の所在も、救ふ路も、すべて掌の中に在る。吾輩が掴んで居る。要は唯掴んだ此の手を開く時間を待つ事だ。——今開け、と云つても然うは行かん。唯、開くのではない、開いて浦子の掌へ返すんだ、いや、彫像の拳に納めるんだ。)

と、益々こんがらかつて、自分にも分らなく成る。先方のきよとつくだけ此方は苛立つ。言へば言ふほど枝葉が茂つて、路が岐れて谷が深く、野が廣く、山が高く成つて、雲が湧き出す、霞がかゝる、果は焦込んで、空を打つて、

(皆、これだ。)

と高い處から振下ろした拳の中に……采を掴んで居た事は云ふまでも無い。

(……狂人でも何でも構はん。自分が生命がけの女房を、自分が救ふに間違は有るまい。凡て任して貰はう。何でも私のするまゝに爲して下さい。……)

處で、私が、浦子を救ふ道として、進むべき第一歩は、何處でも可い、小家を一軒探す事だ。小舎でも可、辻堂、祠でも構はん、何でも人の居ない空屋が望みだ。

何、そんな處に浦子が居るか、と……詰らん事を——浦子の居處は居處で話が違ふ。空屋を探すのは私が探して私が其處へ入るんだ。——世帯を持つのおやない。……え、落着いて、聞かなければ不可ん。

宜いかね、此を要するに、少くとも空屋に限る。……有りますか、人の居ない小舎はあるか。有れば、其處へ行く。これから此の足で直ぐに行きます。——宿へ歸つて一先づ落着け？——呑氣な事を。落着いて相談と？……此の上何の相談を爲るんです。浦子を救ふのには一刻を争ふ、寸秒を惜む。早速さあ、人の居ない小舎、辻堂、祠、何でも構はん、其處へ行かう。行つて直ぐに仕事にかゝる。が、誰も来ては不可い、屹と来ては不可い。いつれ、やがて其の仕事が出来ると、浦子と一所に、諸共にお目に懸つて更めて御挨拶をする。

しかし、恚う言ふのを信じないで、私に任せられることを不安心と思ふなら、提灯の上に松明の数を殖して、鐵砲持參で、隊を作つて、喇叭を吹いてお捜しなさい、其は御勝手です。

と嘲けるやうに又アハアハ笑ふと……

(あれ、天狗様が憑移らしやつたよ)

(魔道に墜ちさしたものだんべい)

と密いて言ふのが聞えた。

が、最う、そんな事に頓着しない。人間などには目も懸けないで、暗い中を矢鱈に、其處等の樹を眺めた。刻むに佳い枝や、幹や、と目を光らす……これも眼前、魔に心を通はす舉動の如くに見えたであらう。

けれども言出した事は、其の勢だけに、誰一人深切づくにも敢て留めようとするものは無く……其の同勢で、ぞろ／＼と温泉宿へ歸る途中、暇を片傍に引込んだ、森の中の、とある祠へ送込んだ……と言ふよりは、づか／＼踏込んだ。後に踵いて来て、渠等は狐格子の外で留まつたのである。

提灯を一個引奪つて、三段ばかりある階の正面へ突立つて、一揆を制するが如く、大手を擴げて、

(さあ、皆歸れ。而して誰か宿屋へ行つて、私の大靴を背負つて来て貰はう。——中にすべて仕事に必要な道具がある。……私は最う、あの座敷へ入つて、脱いだある衣服、解いてある紅い扱帯を見るに忍びん。——彼が魔物の手に懸つて、身悶えしながら、帯からはじめて解き去らるゝのを目の前に見るやうだから)

親類の一人、インバネスを着た男が眞先に立つて、皆ぞろ／＼と歸つた。……其の影を潛つて出る、祠の前の、倒れかゝつた木の鳥居に張つた、何時の時のか、注連繩の残つたのが、二ツ三

ツのたくつて、ずらりと懸つて蛇に見えた。……」

二十九

「はて、面白い。あれが天井を傳ふ朽繩なら、其の下に、しよんぼりと立つた柱は、直に浦子の姿に成る……取つて像を刻む材料に遣ふと爲よう。鋸で挽いて、女の立像だけ抜いて取る、と鳥居は、片假名の井の字に成つて、祠の前に、森の出口から、田圃、畷、山を覗いて立つであらう。と疑と視める、と最う其の鳥居の柱の中へ、婦の姿が透いて映る……木目が水のやうに膚を絡つて。」

(旦那様、お荷物を持つて参りやした、まあ、暗え處に何を爲てござらつしやる。)

成程、狐格子に釣つて置いた提灯は何時までも蠟燭が消たすには居らぬ。……氣が注くと板縁に腰を落し、段に脚を投げてぐつたりして居た。

靴を背負つて來たのは木樵の權七で。此の男は、浦子を見失つた當時、うか／＼城趾へ徜徉つたのを宿へ連れられてから、一寸々々出て來ては記憶の裏へ影を露はす。此と、城ヶ沼の黒坊主の蒼ざめた面影を除いては、誰の顔も判然覺えて居なかつた。

(燈明を點けさつしやりませ。洋燈では旦那様の身體危いと言うで、種油提げて、燈心土器を用

意して参りやしたよ。追附け、寢道具も運ぶでがすで、氣を鎮めて休まつしやりませ。……)

私等も又、油断なく奥様の行方な捜しますで、えら、心を狂はさつしやりませな。)

と言ふ／＼燈心を點して、板敷の上へ薄縁を伸べたり、毛布を敷く……)

(私が頼まれましたに、ちよく／＼見廻りに参ります。用があるなら、いひつけてくらつせえましよ。)

と背後むきに踵で探つて、草履を穿いて、壇を下りて、てく／＼出て行く。

(待て、待て。と追つて出て、鳥居をする／＼と撫でて見せて、)

(村一同へ言づけを頼むぞ。此の柱を一本頂く……此の鳥居のな。……後で幾らでも建立するから、と然う言つてな。)

(はい、……え、東京からござつた旦那方も其のつもりで、相談打たしつた。奥様の居さつしやる處の知れるまでは、何でもお前様する事に逆らはねえやうにと言ふだで、随分好き次第さつしやるが可うがんです。だが、もの、鳥居の木柱な何うするだね。)

(此を刻んで像を造る、婦のな、それは美しい、先づ辨天様と言つたもんだ、お前にも見せて遣らう、吃驚するなよ。)

神 鑿

其の呆れ顔を掌でべたりと撫でる、と此處へ一人で遣つて來るほど性根の据つた奴、突然早腰

も抜かさなだが、目を蔽うて、面を背けて、

(いとほしげな、御道理でござります。)

と、のそく歸る。……矢張り浦子を攫はれた爲に、私が氣が違つたと思ふらしい。いや、是だから人間の來るのは煩い!

……しかし、其の後とも三度の食事、火なり、水なり、祠へ來て用を達してくれたのは其の男で。時とすると、二時三時も傍に居て、熟と私の仕事を見て居る。口も出さず、邪魔には成らんで、下仕事の手傳ぐらゐるは間に合つたんです。

——雪杖は更めて言つた。——

「處で、一刻も疾く仕上げにしようと思ふから、飯も手掴みで、水で嚥下す勢。目を据ゑて働くので、日も時間も、殆んど晝夜の境はない。……女の像の第一作が、まだ手足までは出来なかつたが、略顔の容が備はつて、胸から鳩尾へかけて膨りと成つた、木材に乳が並んで、目鼻口許の刻まれた、フトした時……

(どうだ、大分ものに成つたらう)といさゝか得意で、丁ど居合はせた權七の顔を目を舉げて恚う見ると、……日に焼けた色の黒いのが、また恐ろしく眞黒で、額が出て、唇が長く反つて、目が、がつくりと窪んだ、其の目がピカ／＼と光つて、ふツふツ、はツはツ、と喘ぐやうな息をす

る。……」

供揃へ

三十

「いや、其の息の臭い事。……剩へ立つでもなく坐るでもなく、中腰に踞んだ山男の膝が折れかけた朽木同然、節くれ立つてギクリと曲り、腕組をした脇ばかりが胸に附着き、布子の袖の許へ窄つて兩方へ刎ねた處が、宛然の翼。

(權七ぢやない! 小天狗が、天守から見張りに來たな。)

思はず突立つと、出來かゝつた像を覗いて、角を扁平くしたやうな小鼻を、ひいくひいく、……ふツふツはツはツと息を吹いて居たのが、尖つた口を仰様に一つ、ぶるツと振ふと、面を倒にしたと思へ。

彫像の眼球をグサリと刺した。

神 是つと思へば、烏ほどの眞黒な鳥が一羽、蟲蝕だらけの合天井を颯と掠めて狐格子をばざりと
飛出す……

目一つ抉られては半身をけつり去られたも同じ事、是がために、第一の作は不用に歸した。
……餘りの仕儀に唯茫然として、果は涙を流したが、いや／＼、爰に形づくられた未成品は其の容半ばにして、早くも何處にか破綻を生じて、我が作を欲するものの、不満足を來したのであらう——いかさまにも、一つ残つた瞳を見れば、浦子のそれより情を宿さぬ、露も帯びぬ、……手足既に完うして、斧を以て碎かれても、對手が鬼神では文句はない筈。力を傾け盡さぬうち、豫め其の缺點を指示して一思ひに未練を棄てさせたは、寧ろ妙からぬ慈悲である。……
で、直ちに木材を伐更めて、第二の像を刻みはじめた。が、又此の作に對する迫害は一通りでは無いのであつた。猫が來て踏んで行拔ける、鼠が齧る。とろ／＼と睡つて覺めれば、犬が來てぺろ／＼と嘗めて居る。……胴中を蛇が巻く。今穴を出たらしい家守が來て、鼻の上を縦にのたくる。……やがては作者の身體を襲うて、手をゆすぶる、襟頸を取つて引倒す、何者か知れずキチキチと鳴いて脇の下をこそぐり掛ける。
無慚や、其の中にも命を懸けて、漸と五體を調へたのが、指が折れる、乳首が缺ける、耳が撈げる——これは我が手に打碎いた、其の斧を揮つた時、さく／＼さ／＼らに成り行く彫像は、骨を裂く音がして、物凄く飛驒山の笏に響いた。
其の夜更から、しばらく正體を失つたが、時も知らず我に返ると、忽ち第三番目を作りはじめ

た。……時に祠の前の鳥居は倒れて、朽ちたる繩は、ほろ／＼と斷れて跡もなく成る。……
と今度のは完成した。而して本堂の正面に、支も置かず、内輪に組んだ、肉つきのみまつた、膝脛の釣合よく、すつくりと立つた時、木の膚は小刀の刃に、恰も雪の如く白く見えた。……扉を開いて、傳説なき縁起なき由緒なき、一體風流なる女神のまざ／＼として現はれたかと疑はれて、傍の棚に残つた古幣の斜めに立つたのに對して、敢て憚るべき色は無かつた。
折から來合はせた權七に見せると、色を變へ、口を尖らせ、目を光らせて視めたが、其の面は烏にも成らず、……脚は朽木にも成らず、袖は羽にも成らぬ。
其處で、自分で引背負ふなり、抱くなりして、其の彫像を城趾の天守に運ぶ。……途中の塵を避けるため、蔽がはりに浦子の着換を、と思つて、權七を温泉宿まで取りに遣つた。
あとで、此の祠に籠つてから、幾日の間か鳥居より外へは出ない、身體を伸々として大手を振つて畦路から啜へ出た——
然まで遠くもない城ヶ沼の方へ、何となく足が向いて、ぶらり／＼と歩行いたが、我が住居を出て其處等散歩をする……祠の家には浦子が居て留守をして我がために燈火のもとで針仕事でも爲て居るやうな、ついたた楽しい心地がする。……細い杖を持たないのが物足りないくらなるもので。

風もふはくと樹の枝を擦つて、はらく笑はせて花にしようとするらしい。壺の中のやうではあるが、山國の春の夜は朧。

「譬へば城ヶ沼を裏返して、空へ漲らした夜の色——寝そびれて戸惑ひをしたやうな肥つた月が、田の水にも映らず、山の姿も照らさず……然うかと言つて並木の松に隠れもせず、谷の底にも落ちないで、ふはりと便のない處に、土器色して、暖も畦も茫と明いのに、粘つた、生暖い小糠雨が、月の上からともなく、下からともなく、しつとりと来て、むらくと途中で消える……と髪も衣も濡れもしないで、濕つばい。が、手で撫でて見ても雫は分らぬ。——雨が降るのではない、月が欠伸する息がかゝるのであらう……そんな晩には獺が化けると言ふが、山國に其は相應はぬ。イハナが化けて坊主になつて、殺生禁斷の説教に念佛唱へて辿りさうな。……處を、歩行く途中、人一人にも逢はなんだ。が逢へば、婦でも、山猫でも、皆坊主の姿に見えようと思つた。

こんくと狐が鳴いた。……犬の聲ではない。唯ある松の樹の蔭で、つい通りかゝつた私の足許で。

こんくとこんくと鳴くの、フト耳を傾けて、蟲を聞くが如く立停ると、何かものを言ふやうで、

(コンクワイ、クワイ、來ぬかい、來ぬかい、來ぬかい)と恠う鳴く。
(來ぬかい、來ぬかい、來ぬかい、來ぬかい、來ぬかい、來ぬかい)と、又聞える。
聞く中に、畦の蔭から、ひよいと出て立つた、藁束に竹の脚で、瘦さらばへたものがある。……風が吹かれぬ前に、雪國の雪が不意に来て、其のま、焚附にも成らずに残つた、冬の中は眞白な寢床へ潛つて、立身でぬくと過したあとを、草枕で寢込んで居た、これは飛驒山の案山子である。

此の親仁、破れ蓑の毛を垂らして、しよぼりとした體で、ひよくと動いて来て、よたりと松の幹へ凭りかゝつて、と其處へ立つて留まる。

(來んかい、案山子、來んかい、案山子……)と例の聲が尙ほ續けて呼ぶ。
些と離れた畦を傳つて、向うから又一つ、ひよいと来て、ばざりと頭を寄せて、同じく留まる。と素直な暖筋を、別に一個、よたくよたくと、其でも小刻の一本脚、竹を早めて急いで近寄る。

此の後のなんぞは、何處で工面をしたか、竹の小笠を横つちよに被つて、仔細らしく、其の笠

を、歩行に連れて行く／＼と上下に揺つたもので。

三個が、…其から土瓶を釣つて、番茶でも煮さうな形に集まると、何か又鳴き出す。

(コー／＼／＼、急がう。急がう)

ばさ／＼、と左右に分れて、案山子は、前後に入亂れたが、やがて啜へ三個で並ぶ。

其時樹の上から、何やら鳥の聲がして、

(何處へ行、何處へ行！)

で、がさりと枝を踏んだ音がした、何うやら、ものの、嘴を長く啜を蹴下ろす氣勢がした。

(ほこらだ。)

(ほこら、)

(ほこらへ行くだ。)

と、ひよつこり、ひよこり、ひよつこりと歩行き出す…案山子どもの出向くのが、祠の方へ、私の来た路の方角に當る。向うを指して、城ヶ沼へ身投げに行くのでは無いらしい。

待て、よくは分らぬ、其處等と言ふか、祠と言ふか、聲を傳へる生暖い夜風もサテばやけたが、…歸り路なれば引返して、うか／＼と漫歩行きの踵を返す。

(く、く、く)

(ふ、ふ)

(は、は、は)と形も定めず、むや／＼の海鼠のやうな影法師が、案山子の脚もとを四ツ五ツむらむらと纏うて進む。

それは狐か犬らしい、其とも何か鳥が居て、上をふは／＼と飛んだのかも分りません。」

——と雪枝は老爺に言ふのであつた。——

三十一

「忘れもしない、温泉へ行きがけには、夫婦が俵で通つた並木を、魔物が、何うです、…勝手次第な其の體でせう。

來る時は氣がつかなかつたが、時に歸りがけに案山子の歩行く後から見ると、途中に一里塚のやうな小蔭があつて、松は其處に、梢が低く枝が垂れた。塚の上に趺坐して、打傾いて、頬杖をした、如意輪の石像があつた。唯、彼のたよりない土器色の月は、ぶらりと下つて、佛の頬を片照らして、木蓮の花を手向けたやうな影が射した。

其の前を、一列びに、ふら／＼と通懸つて、

(御許され。)と案山子の一つが言へば、

(御許され。)

と又一つが同じ言を繰返す。

(御許され、御許され。と聲が交つて、喧々と饒舌つた、と思はれよ。

(大儀ぢや。)

と正しく如意輪が仰せあつた……

(はッ)と云ふと一個、丁ど石高道の石礎へ其の一本竹を踏掛けた真中のが、カタリと脚に音を立てると、伸上つたやうに、ひよい、と脊が高く成つて、直に、ひよこりと又同じ丈に歩行き出す。

人間が前へ出た時、如意輪の御姿は、スツと松蔭へ稍遠く、暗く小さく拜まれた。

雨がや、頻つて来た。

案山子の蓑は、三つとも、びしよ〜と音するばかり——中にも憎かつたは後から行く奴、笠

を着たを得意の容體、もの〜しや、左右を眊しながら、前途へ踳踳く。

果して祠を指したらしい。

横へ切れて田圃道を、向うへ、一方が山の裾、片傍を一叢の森で仕切つた真中が、茫と展けて、草の生が朧月に、雲の簇がるやうな奥に、祠の狐格子を洩れる灯の、細雨に浸んだのを見ると——

—猶豫はす其方へ向いて、一度斜に成つて、案山子は折曲つて連り行く。

其時、氣に懸つたのは、祠の前を階から廻廊の下へ懸けて、たゞ三ツ五ツではない、七八ツ、

それ〜十ウにも餘る物の形が、孰も土器色の法衣に黒い色の袈裟かけた、恰も空模様のやうな

のが、高い坊主と低い坊主と大な坊主と小さな坊主と、胡亂々々動いて、むら〜居る……

(やあ、浦子を翫るな、——)

と前へ行く案山子どもを、横に掠めて、一息に駈け着けて、いきなり階に飛附いて、唯見ると、

扱も、寄つたわ、来たわ。僧形に見えた有りたけの人数は、其も是も同じやうな案山子の數々。

—割つて通つた人間の袖の煽りに、よた〜と皆左右に散つた、中には廻廊に倒れかゝつて、

もぞ〜と動くのもある。

正面に伸上つて見れば、向うから、ひよこ〜来る、いまの其の三個の案山子も、同じやうな

坊主に見えた。

扉を入ると、無事であつた。浦子を其のまゝの彫像は、灯の影にちら〜と瞳も動いて、人待

顔に立草臥れて、横に寝たさうにも見えたつけ。

下に敷いた白毛布の上には、所狭く鑿も鉋も散かり放題。初手は此の毛布に包んで、夜路を城

趾へ、と思つたが、——時鳥は鳴かぬけれども、然うするのは、身を放れたお浦の魂を容れたや

中にも笠ある案山子の領くのが、ぱくく動く。其は途中からの馴染らしい。

(お、さう、おぶおう、おぶさう。)と野良な音。恰も、(お、然う、負はう、負され。)と云ふが如し。

(可、可、)

で、私は衣服を被けて、彫像を抱いたなり、狐格子を更めて開いて出た。

(お、案山子ども、)

私は眞面目に遣つた。今思へば……言ふまでも無く何うかして居る。……

(御苦勞、御厚意は受取つたが、己の刻んだ此の婦は活きとるぞ。貴様たちに持運ばれては血の道を起さう、自分でおんぶだ。)

と高笑をして、其處で肩の上に播上げた。抱ても腕に乗つたのに。——唯肩越に見上げた時、天井の蔭に髪も黒く上から白い美しい顔が覗込むやうに見えたので、歴然と、自分が彫刻師に成つた幼い時の運命が、形に出て顯れた。……雨も此朧夜を、細く微な雪のやうに白く野山に降懸つた。

(出懸けるぞ、案内するか、續いて来るか。)と私が言ふと……

案山子どもは藁の亂れた煙の如く、前後にぶらぶら附添ふ。……而して祠の樹立を出離れる時

分から、希有な一行の間に、二ツ三ツ灯が點いた。が、光が有りとも見えず、ものを映さぬでも無い。たとへば月の其の本尊が霞んで了つて、田毎に宿る影ばかり、縦に雨の中へふつと映る。宵に見た土器色の月が、幾つにも成つて出たらしい。

其が案山子どもの行く方へ、進めば進み、移れば移り、路を曲る時などは、スイと前へ飛んで、一寸停まつて、土器色を赫として待つ。ともすれば、曇ることもあつた。此の灯は、ひくく呼吸を吐く。

低い藁屋が二三軒、煙出しの口も開かず、目もなしに、暗から潛出した獸のやうに踞つて、寂と寝て居る前を通つた時。

(ばツさ、ばツさ。)

蓑を鳴らしたのではない。案山子の一つが、最う耳に馴れて遠慮のない口をきいた。

(ばつさよ、ばつさよ。)

(コーコー、来ーい、来い。)
と最一つ饒舌つた。

神 鑿
ばさり、と言ふのが、ばさり、と聞えて、ばさり、と鳴つて、其の藁屋の廂から、啜へ、ばさり、と落ちたものがある。續いて又一つばさりとお出やる。

鳥か、獸か、こゝに、バサリ、と名づくるものが住んで、案山子に呼出されたのであらう、と思つたが、やがて其が二つが並んで、眞直にひよいと立つ、と左右へ倒れざまに、又、ばさり、と言つた。が、名ではない。ばさり、と稱へたは其の音で。正體は、二本の番傘、トばさり、開いたは可が、古御所の簾めいて、ばら／＼に裂けて居る。」

三十四

「唯見ると、兩方から柄を合はせて、しつくり組んだ。其の破れ傘が、横に輪に成つて、噉をぐるぐる廻つて兩方から柄と柄を合はせて丁と留まる。」

案山子が三ツ四ツ、ふら／＼と取巻いて、

(乗つされ。)

(お人形、乗つせえ。)''と言ふ。

(は、あ、載せる、と言ふのか、面白い。)

案するに、此の車を以て、我が作品を禮するのであらう。其の厚志、敢て、輿と駕籠と破傘とを擇ばぬ。其處で、彫像の脇を抱いて、傘の柄に腰を据ゑて見ると、不思議や、裾も開かず、肩も反らす……膠で着けたやうに整然と乗つた。同時にくる／＼と傘が廻つて、さつさと行く……

やがて、温泉の宿を前途に望んで、傍に谿河の、恰も銀河の碎けて山を貫くが如きを見た時、傘の輪は流に逆ひ、疾く水車の如くに廻轉して、水は宛然其の破れ目を走り抜けて、斜に黄色な雪が散つた。や、何うも案山子の飛ぶこと、ひよろつく事!

此を見よ、人々。――

で、月が三ツ四ツ出た路を照らすのも、案山子が飛ぶのも、傘の車も、其の車に、ト反身で、斜に構へて乗つた像の活けるが如きも、一切自分の神通力の如くに感じて、寢静まつた宿屋の方へ私は拳を突出して呵々と笑つた。

(此を見よ、人々。)

其時、車を眞中に、案山子の列は橋にかゝつた。……瀨の音を横切つて、竹の脚を、踏蹴く癖に、小賢しくも案山子の同勢、橋板を、とゞろ／＼とゞろと鳴らす。

(寢て居るに騒がしい。)

と欄干が聲を懸けた。

(あ、氣の毒だ。)

と、うつかり人間の私が答へた。おや、と心付くと最う、ざんざと川水。まだ可怪かつたのは、一行が、其から過般の、あの、城山へ上る取付の石段に懸つた時で。是

から押上らうと云ふのに一呼吸つくらしく、フト停まると、中でも不精らしい蓑の裾の長いのが、雲のやうに渦いた段の下、大木の槐の幹に懸つて、ごそりと身動きをしたと思へ。

(わい、擦つてえ。)と樹が喚いた。

傘はぐるぐると段にかゝる、と苦もなく攀上るに不思議はない。濃かな夜の色が段を包んで、雲に乗せたやうに、すらぐと上らし上げる。氣の疾い、身軽なもの、案山子の中にもあるにこそ。二ツ三ツ追續いて、すいと飛んで、車の上を、宙から上つたのが、アノ土器色の月の形の灯をふはりと乗越す。

段の上で、一體の石地藏に逢つた。

(坊ちやま、坊ちやま。)と一ツが言ふ。

(さても迷惑)

と仰有つたが、御手の錫杖をついと上げて、トンと下ろしさまに歩行み出らるゝ……成程、御襟の涎掛めいた切が、ひらりぐと揺れつゝ來らるゝ……

此の野原に來た時です。

——と雪枝は老爺に向いて、振返つて左右を視めた。

時に、陽炎が膝に這つて、太陽はぼかぐと射して居る。空は晴れたが、草の葉の濡色は、次

第に霞に吸取られようとする風情である。

「其の地藏尊が、前の方から錫杖を支いたなりで、後に續いた私と擦違つて、黙つて坂の方へ戻つて行かるゝ……と案山子もぞろぐと引返すんです。

番傘は、と見ると、此もくるぐと廻つて返る。が、まるで空に成つて、上に載せた彫像がありますまい。

……つい向うを、何うです。……大牛が一回、此方へ尾を向けて、のそりと行く。其の圖體は山を壓して此の野原にも幅つたいほど、臚の中に影が偉い、其の背中に浦子の像が、紅の扱帯を長く、仰向けに成つて柔かに懸つて居る。」

三十五

「破れ傘の車では、別に、侮られ、辱められるとも思はなかつた。が、今牛の背に懸けられたのを見ると、酷らしくて我慢が出来ない！ 木を刻んだものではあるが、節から兩岐に裂かれさうに思はれて、生身の浦子だか、像の女だか、分別も着かない。

(あツ)と叫んで、背後から飛蒐つた、が、最う一足の處で、手が届きさうに成つても、何うしても尾に及ばぬ……牛は急ぐともなく、動かない臚夜が、自然から、時の移るやうに、悠々との

さばり行く。

しばらくして、此の大手筋を、去年一昨年きょねんのまゝらしい、枯蘆かれろの中なかを縫ぬつた時は、牛うしは俗ぞくに水底みずそこを踏ふんで通とほると言いふ、どつしりしたものに見みえた。背せなの彫像てうざうの仰向あをむけの胸むねに、采さいを握にぎつた白い滑すべ々とした拳こぶしが、苦くるんで空くうを掴つかむやうに見みえて、傷いた々しくつて堪たへられない。

後あとを喘あへぎ、はあ〜と呼吸こそして續つく。

其そのの牛うしが、老爺おぢいさん、

——と雪杖ゆきえは聞きくものを呼よび懸かけた。——

「天守てんしゆの礎いしの土つちを、後脚あとあしで踏ふんで、前脚まえあしを、上うへへ舉あげて、高たかく、棟むねを抱かかりやうに懸かけたと思おもふと、一階目いつかいめの、廻廊くわいろうめいた板敷いたじきへ、ぬい、と上あつて、其そのの外周そとまわりをぐるりと歩あり行いつた、……音おとに槍やりヶ獄なげと中空なかぞらに相あひ登そびえて、月つきを懸かけ、太陽たいやうを迎むかふると聞きく……此この建物たてものはさすがに偉おほ大きい。

——臙おほろの中に、然さばかり蔓はびつた牛うしの姿すがたも、床走ゆかばしる鼠ねずみのやうに見みえた。

ぐるりと一廻りして、一ヶ所ひとところ、巖いはを抉ひつたやうな扉しらへ、眞黒まっくろに成なつて、入いつた、と思おもふと、一ひとつよぢれた、向むかう状さまなる、階子はしごの中なかほどを、灰色はひいろの背せを、畝うねつて上のぼる、牛うしは斑まだらで。

此この、一階目いつかいめの、床ゆかは、今いま、過よつた野のに、扉しらを建てまはしたと見みるばかり廣ひろかつた。短みじい草くさも、處々ところどころ、矢間やまに一ひとツ黄色きいろい月つきで、臙おほろ夜よに茶種なたねが咲さく。

と黒雲くろくもを被かいだ如ごとく、牛うしの、尾おが、上あ口ぐちを漏もれたのを仰あいで、上うへの段だん、上うへの段だんと、兩手りゆうてを先さきへ掛かけながら、私わたしは、慌あわしく駈かけ上あつた。……月つきは暗くらかつた、矢間やまの、外そとは、森もりの下闇したぐみで、苔こけの香かが満みちて居ゐた。……牛うしの身體からだは、早はや又また段だんの上うへへ半なかばを乗のり越こす。

ぐる〜と、急いそいで、廻まつて、取付とついて、追おつて上のぼる、と此この矢間やまの月つきは赤あかかつた。魔界まがいの色いろであらうと思おもふ。が、猶豫たのちふ隙ひまもなく直たちに三階目さんがいめを攀よち上のぼる……

最もう、仰あいでも、覗のぞいても、大牛おほうしの形かたちは目めに留とまらなく成なつたために、あとあとは、夢中むちゆうで、打附ぶつければ退すり、床ゆかあれば踏ふみ、階子はしごあれば上のぼる、其そのの何階目なんかいめであつたか分わからぬ。雲くもか、霧霧か、綿わたで包つつんだやうに、凡およそ三抱みかへばかりあらうと思おもふ、丸柱まるばしらが、白しろく、眞中まんなかに、ぬつく、と立たつ、……と一目見めれば、其そのの柱はしらの根ねに、一人ひとり悄然しん然と立たつた婦をんなの姿すがた。

(浦子……)と、膝ひざを支たいで、摺寄すりよつて緊乎しつかと抱だいて、言いふだけの事ことを呼吸こそも絶たげずに我わを忘わすれて饒舌じやべつた。聲こゑが籠こもつて空そらへ響ひびくか、天井てんじやうの上うへ——五階ごかいのあたりで、多人たにん数の、わや〜もの言いふ聲こゑを聞ききながら、積日せきじつの辛勞しんらうと、安心あんしんした氣き拔ぬけの所ところ爲なり、其そのま、前後ぜんご不覺ふかくと成なつた。……

(や。)

神かみ 心付こころづく、と雲くもを踏ふんでるやうな危あぶつかしさ。——夫婦ふうふが活いきて再びまた天日てんじを仰あぐのは、唯無ただ事に下したまで幾階いくかいの段だんを降おりる、其そのばかり、と思おもふと、昨夜ゆうべにも似にず、爪先つまさきが震ふるふ、腰こしが、がくつく、

血が凍つて肉が硬ばる。

(氣を付けて、氣を付けて、危い。)と兩方の脚の指、白いのと、私のと、十本づつを、ちらりと一心不亂に瞻めながら、恰も斷崖を下りるやう、天守の下は、地が矢の如く流るゝか、と見え

た。

——雪枝は語り續ぐ聲も弱つて、——

「漸との思ひで此處まで来て……先づ一息と、氣が付くと、あの體だ。……老爺さん、形代の犠牲に代へて、辛くも、我が手に救ひ出したとばかり喜んだのは、浦子ぢやない、家内ぢやない。昨夜持つて行つた彫像を其のまゝ、突返されて、のめくと擔いで歸つたんです。然も片腕振つてある、あの采を持たせた手が。……あゝ、私は五體が痺れる。」と胸を掴んで悶え倒れる。

天守の下

三十六

聞き果てつ。——

飛驒國の工人菊松は、其處に、仰ぎ倒れて、今も悪い夢に壓されて居るやうな——青年の、日

向の顔、額に膏汗の湧く惱ましげな状を、然も氣の毒げに瞻つた。

「聞けば聞くほど、へい、何とも言ひやうはねえ。けんども、お前様、お少えに、其の位の事に然う氣い落さつしやるもんでねえ。たかが、あれだ、昨夜持つて行かした其の形代の像が、お天守の……何様か腑に落ちねえ處があるで、約束の通り奥様を返さねえもんでがんしょ。だで、最う一ツ拵えさせえ。美しい婦の木像さ又遣直すだね。えゝ、お前様、對手が七煩ヶしいだけに張合がある。……案山子ぢや成んねえ。素袍でも着た徒が玉の輿持つて、(へい、お迎)と下坐するのを作らつせえ。えゝ！と元氣を出さつしやりまし。」

「其處です、老爺さん、」

と雪枝は草を掴んで起直つて、

「現在、其の苦しみを爲て居る浦子を救はんために製作へたんです。有つたけの元氣も出した、力も盡した、最う爲やうがない。しかし、此處で貴老に逢つたのは、天の引合せだらうと思ふのです。」

いや、其よりも此の土地へ来て、夢とも現とも分らない種々の事のあるのは、別ではない、婦のために、仕事を忘れた眠を覺して、謹んで貴老に教を受けさせようとする、藝の神の計ひであらうも知れない。私は跪く、其の草鞋を頂く……何うぞ、弟子にして下さい、教へて下さい、

而して浦子を救つて下さい。」

「いや、先刻船の中で焚けるのを向うから見た時な、活きた人だと吃驚しつけの。お前様一廉の利ものだ。別に私等に相談打たつしやるに及ぶめえが、奥様のお身の上ぢや、出来るお手傳なら爲すには居られぬで、年の功だけでも取處あるなら、今度作らつしやるに助言な爲べいさ。まあ、待つせえよ、私が今」と狸のやうな麻袋をふらりと、腰を伸して、のつそりと立つた。

旭さす野を一人、老爺は腰骨に手を組んで、ものを捜す風して行歩いたが、少時して、引返した。……拾つて来たのは雄鹿の角の折、山深ければ千歳の松の根に生ふると聞く、茯苓と云ふものめいたが、何、別に……尋常の樹の枝、女の腕ぐらゐの細さで、一尺有餘也。

ト件の麻袋の口を開けて、握飯でも出しさうなのが、一挺小刀を抽取つて、無雑作に、さくりと當てる、ヤ又能く切れる、枝はすかりと二ツに成つた。

「鯉とも思ふが、木が小さい。鱈では可笑かんべい。鮒を一ツ製へて見せつけえ。雑と形で可え、鱈は縦横に筋を引くだ。……私も同じに遣らかすで、較べて見るだね。ひよつとかして、私の方さ出来が佳くば、相談對手に成れるだでの、可か、さあ、ござらつせえ。」

と小刀を添へて突付けた。雪枝は胡坐を組直した。

「一イ二ウ三イ、はじめぞ、は、は、は、駈鏡のやうだの。何も前後に構ひごとねえだよ。お前

様申戲ごとではあんめえが、何でも仕事するには元氣に限るだで、景氣をつけるだ——可かの、一イ二ウ三イで遣りかけるだ。一イ二ウ三イ！ はッはッはッ。」

笑ひかけて、濟まして遣り出す、老爺の手にも小刀が動く。と並んで二挺、日の光に晃々と煌きはじめた。……掌の木の枝は、其の小刀の輝くまゝに、恰も鱈を振ふと見ゆる、香川雪枝も、さすがに名を得た青年であつた。

と此の老爺と雪枝とが、旭に向つて濠端に小刀を使ふ。前面の大手の彼方に、城趾の天守が雲の晴れた蒼空に群山を抽いて、すつくと立つ。……飛驒山の鞘を拂つた槍ヶ嶽の絶頂と、十里の遠近に相對して、二人の頭上に他の連峰を率ゐる事忘れてはならぬ。

件の天守の棟に近い、五階目あたりの端近な處へ出て、霞を吸ひつゝ、大欠伸を爲た、一體の坊主がある。

雙六盤

三十七

雪枝は合掌して跪いた。

渠の前には、一座滑かな磐石の、其の色、濃き緑に碧を交へて、恰も千尋の淵の底に沈んだ平かな巖を、太陽の色も白いまで、霞の満ちた、一塵の濁りもない蒼空に、合せ鏡して見るやうな……大きは然れば、疊三疊ばかりと見ゆる……音に聞く、飛驒國吉城郡神寶の山奥にありと言ふ、雙六谷の名に負へる、雙六巖は是ならむ。巖の面に浮模様、末を揃へて、上下に香の圖を合はせ、たやうな柳條があり、虹を削つて畫いた上を、ほんのりと霞が彩る。

背後を圍つた、若草の薄紫の山懷に、黄金の網を颯と投げた、日の光は赫耀として輝くが、人の目を射るほどではなく、太陽は時に幽に遠き連山の雪を被いだ白蓮の蕊の如くに見えた。……次第に近く此處に迫る山と山、峰と峰との中を繋いで蒼空を縫ふ白い絲の、遠きは雲、やがて霞、目前なるは陽炎である。

陽炎は、爾く、村里町家に見る、怪しき蜘蛛の圍の亂れた、幻影のやうなものでは無く、恰も練絹を解いたやうで、蝶のふはくと吐く呼吸が、其羽なりに翻々と擴がる風情で、然も皆美しい女の姿を象る。其の或ものは裳、黄に、或ものは袖、紫に……紫なるは蕈の影で、黄なるは鼓草の花の映り添ふ色であつた。

巖のあたりは、此の二種の花、咲き埋むばかり満ちて居る……其等色ある陽炎の、いづれ手にも留まらぬ女の風情した中に、別に、唯一人雪を束ねたやうな美女があつて、巖の彼方に、恰も卓に向つて立つ状してゐる。

雪枝は、其の美女の前に、磐石を隔てて居るのである……雙六巖の、其の虹の如き格目は、美女の帯のあたりをスーツと引いて、其處へも紫が射し、黄が映る。……雲は、霞は、陽炎は、遠近に盡く此の美女を形づくるために、濃くも薄くも懸るらし。其の形の巖なるは、白銀の鎧して、彼を守護する勇士の如く、其の姿の優しいのは、姫に齊眉く侍女かと思える。

美女の背後に當る……其の山懷に、唯一本、古歌の風情の櫻花、淺葱にも墨染にも白妙にも咲かないで、一重に颯と薄紅。色が美女の臉にさし、影が美女の衣を通す。……雪枝が路を分け、巖を傳ひ、流を涉り、梢を攀ぢ、桂を這つて、此處に辿り着いた山陰に、はじめ見たのは此の櫻で。……

却説、一行は、渠と、老爺と、別に一人、脊の高い、色の蒼い坊主であつた。是より前、雪枝は城趾の濠端で、老爺と並んで、殆ど小學生の態度を以て、熱心に魚の形を刻みながら、同時に製作しはじめた老爺の手振を見るべく……密と傍見して、フト其の目を外らした時、天守の矢間を湧いて出たるやうな黒坊主の姿を見た、が、梟か、鳥か、と思つた。

が、大牛が居る、妻の囚はれた魔の城である。……よし、其が天狗でも、氣を散らす處でない。爰に一刀を下すは、彼を救ふ一步である、と爽かに木屑を散らして一思ひに刻果てた。

「どう、見せさつせえ。」

疾く我が小刀を袋に納めて、頤杖して待つて居た老爺は、雪枝の作品を掌に据ゑて、煙管を銜へた。

「お、出来た。ぴち／＼と刎ねる……いや、慥うあらうと思つた……見事なものぢや。乾して置くと押死ぬべい、それ勝手に泳げ！」とひよいと、放ると、濠の水へばちやりと落ちた。が、腹を出して、浮脂の上にくくりと浮く。

三十八

「そりや少い魚の元氣を見習へ。汝も、ばちやり／＼と泳げい。」

で、老爺は今度は自分の刻んだ魚を、これは又、無狀に引握つたま、齊しく投げる、と激が立つたが、浮草を颯と分けて、鰭を縦に、薄黒く、水際に沈んでスツと留る。ト雪枝の作品と並べた處は、恰も釣糸に繋けた浮木が魚を追ふ風情であつた。……

何をか試むる、と怪んで、身を起し汀に立つて、枯蘆の莖越に、濠の面を瞻めた雪枝は、浮脂の上に、明かに自他の優劣の刻み着けられたのを悟得て、思はず……

「はつ、」と歎息した。

老爺は、もつぺの膝の、小刀屑を拂きながら、眉をふさ／＼と揺つて笑ひ、

「はつはつはつ一イニウ三イ！ 私等が勝ちぢや。見さつせえ、形は同じやうな出来だ、がの、お前様の鮒は水に入ると腹を出いたで、死ちた魚よ、……私等が鮒は、泳ぎ得いでも、鰭を立てたれば活きた奴。何とした處で、俎に乗せれば、人間の口に食へいでも、翡翠が來て狙うたら、ちよつくら潛つて遁げべいさ。」

圍爐裏の自在竹に引懸ける鯉にしても、水へ放せば活きねばならぬ。お前様の鮒のやうに、へたりと腹を出いては明かねえ。木を削る時の釣合一つで、水に入れた時浮き方が違ふでねえかの。縦に留まれば生がある、横に寝れば、死んだりよ。……煩ヶ敷い事ではねえだ。

が、お前様、此の手際では、昨夜造り上げて、お天守へ持つてござつた木像も、矢張同じ型ではねえかい。……寸法が同じでも脚の筋が釣つて居らぬか、其では跛足ぢや。右と、左と、腕の釣合も悪かつたんべい。頬ぺたの肉が、どつちか違へば、片がりべいと言ふ不具ぢや、それでは美しい女でねえだよ。

神 鑿
もし、へい、五體が満足な彫刻物であつたらば、眞晝間、お前様と私とが、面突合はせた眞中

に置いては動出しもすめえけんども、月の黄色い小雨の夜中——主が今話さしつた、案山子が歩行く中へ入れたら、ひとりで褌を取つて、しやなら、しやならと行るべい。何も、破れ傘の化け車に骨を折らせて運ばせすと濟む事よ。平時なら兎も角ぢや、お刺に案山子どもが聲を出いで、（お迎ひ）と言ふ世界なら、第一、お前様が其の像を擔いで出る法はあるめえ。何ではい、歩行け、さあ、木像、と言ふ肚に成らしやらぬ。……

其では魔物が不承知ぢや。先方に些とも無理はねえ。氣に入るも、入らぬも、……出来不出来は最初から、お前様の魂にあるでねえか。

其處へ懸けては我等が耐ぢや。案山子が蓑を捌いて捕らうとするなら、びち／＼刎ねる。見事に泳ぐぞよ。老爺が廣言を吐くではねえ。何の、橋の欄干が聲を出す、槐が噓をすべいなら、鱗を光らし、雲を捲いて、踊を踊るわ。

遣直さつしやい。新にはじめろ。最一つ作れさ。

何うやら、お前様より増だんべいで、出来る事さ助言も爲べい、爲て可いところは手傳ふべい。腰につけて道具も揃ふ。

と箆の如く、麻袋を敲いて言つた。

「すかりと斬れるぞ。残らず貸すべい。兵糧も運ぶだでの！ 宿へも祠へも歸らねえで、此處へ

確乎胡坐を搔けさ。下腹へうむと力を入れるだ。雨露を凌ぐなら、私等が小屋がけをして進ぜる。

大目玉で、天守を睨んで、ト其處に囚られてござるげな、最惜い、魔界の業苦に、長い頭髮一筋つ、一刻に生血を垂らすだ、奥様の苦惱を忘れずに、飽くまで行れさ。倒れたら介抱すべい。

雪枝は満面に紅を濯いで、天守に向つて、峰より高く握拳を衝と上げた。

「少いものを喰かして、要らぬ骨を折らせるな。娑婆ッ氣な老爺めが、」

と二人の背にぬいと立つたは……

苔かと思ゆる薄毛の天窓に、笠も被らず、大木の朽ちたのに、月夜の影の射すやうな、ぼやけた色の墨染扮装で、顔の蒼い大入道！

振向いた老爺の顔を瞰下ろして、

「覺えて居るか、暗の晩を、」と北叟笑みした、頬が、暗い。

人さし指

三十九

神 繁
「お、御坊？」

「何日かの晩の！」

雪枝と、老爺は、左右から齊しく呼ばはる。

「御身も其の時の少い人な。」と雪枝に向いて、坊主は片頬を、又暗うして薄笑ひを爲た。

「血氣に逸つて、うか／＼と老爺の口に乗らぬが可い。……其の氣で城趾に根を生いて、天守と根較べを遣らうなら、御身は蘆の中の鉤屑、蛙の干物と成果てようぞ、……此老爺は、なかく／＼術がある！ 蝙蝠を刻んで飛ばせ、魚を彫つて泳がせる代には、此の年紀をして怪しからず、色氣がある。……あるは可いが、汝が身で持餘ました色戀を、ぬつぺりと鯰抜けして、人にかづけようとするではないか。城ヶ沼の暗夜を思へ！」

何か、自分に此の天守の主人から、手間賃の前借をして居つて、其の借を返す羽目を、投遣りに怠惰を遣り、恰好な折から、少いのを煽り立つて、身代りに働かせよう氣かも計られぬ。」

「これ、これ、御坊、御坊、」と言つて締つた口を尖らかす。

相對する坊主の口は、三日月形に上へ大きい、小鼻の條を、深く、莞つて、

「いや、暗の夜を忘れまい。沼の中へ當の無い經讀ませて、齋非時にとて及ばぬが、澁茶一つ振舞はず、既での事に私は生涯坊主の水車に成らうとした。」

「む、まづ出家の役ぢや……断念めさつしやい。然う又一概に説法されては、一言もねえ事よ……

……けんども、やきもきと精出して人の色戀で氣を揉むのが、主たち道徳の役だんべい、おつ死んだ魂を導くも勤なら、持餘した色戀の捌を付けるも法ではねえだか、の、御坊。」

「然れば……いや、口の減らぬ老爺、身勝手を言ふ、が、一理ある。——處でな、あの晩四手網の番をしたが悪縁ぢや、御身が言ふ通り色戀の捌を頼まれた事と思へ。」

別ではない、此の少い人の内儀の事でな、

雪枝は屹と向直つた。

流阿に掛けつ、尙ほ老爺に、

「……其の夜、夢幻のやうに言託を頼まれて、采を驗に受取つたは、さて此方衆知つての通りだ。……頼まれた事は手廻しに用濟みと成つたでな、翌朝直にも、此處を出發と思つたが、何か氣に成る。……温泉宿、村里を托鉢して、何となく、ふらく／＼と日を送つた。其の様子を聞けば、私が言託を爲した通り、何か、内儀の形代を一心に刻むと聞く。……其の成就したと言ふ昨夜ぢや、少い人が人形を運んで行く後になり前になり、天守へ入つて四階目へ上つた、處、柱の根に、其の木像を抱締めて、死んだやうに眠つて居る。

はてな、内儀を未だ返さぬか、一體どんな魔物が棲むぞ。——其處へ行くまでには何も目に附いたものは無かつたに因つて——尙ほ此の上か、と最一ツ五階へ上つて見た。様子は知れた。」

と頷いて言つた。

「何が、何者が居るんだ。」と雪枝は苛立つて犇と詰寄る。

坊主は遮る如く斜に構へて、

「いや、何か分らん、ものは見えん。が、五階へ上り切つて、堅い畳の上に立つた。冷い風が冷りと來ると、左の腕がびくりと動くと、引立てたやうに、ぐいと上つて、人指指がぶるゝと振ふとな、何か口を利くと同じに、其の心が私の耳に通じたよ。……」

天守の主人は、御身の内儀の美艷な色に懸想したのぢや。理も、非もない。業の力で擱取つて、聞近く幽閉めた。従類眷屬寄りたかつて、上げつ下ろしつ爲て責め苛む、答の呵責は魔界の清涼劑ぢや、靜に差置けば人間は氣病で死ぬとな。……

言ふまでもない、肉を屠つて、其の血を啜るに仔細はないが、夫は香村雪枝とか。天晴れ一藝のある效に、其の術を以て妻を償へ！ 魔神を慰め樂しますものの、美女に代へて然るべきなら、立處に返し得さする。――

可いかな、此の心は早や御身が内儀に、私が頼まれて、御身に傳へた。」

四十

「活けて視めうと思ふ花を、苞のまゝ室に寝かせて置いて、待構へた償品の、彼は何ぢや！ 聾の、嘔の、明盲人の、鮫膚で腰の立たぬ、針線のやうな縮毛、人膚の留木の薫の代りに、屋根板の臭の芬とする、いぢかり股の、腕脛の節くれ立つた木像女が何に成る！……悪く拳に采を持たせて、不可思議めいた、神通めいた、何となく天地の、言ふに言はれぬ心を籠めたらしい所業が可笑しい。笑止千萬な大白痴！」

「ヌ」とばかりで、雪枝が下唇をびり、と噛んで、思はず、擱懸らうとすると、坊主は鷹揚に破法衣の袖を開いて、翼の目潰、黒く煽つて、

「と、な、……天守の主人が言はるゝのぢや……それが、何もない天井から、此の指にぶるゝと響いて聞えた。」

衝と、天守の棟を切つて、人指指を空に延ばすと、雪枝は蒼く成つて、ばつたり膝支く。

負けぬ氣の老爺は、前屈みに腰を入れて、
「分つた、分つたよ、御坊。お前様が、佛でも鬼でも、魔物でも、唯の人間の坊様でも可え。言はつしやる事は腑に落ちた……疾い話が、此の人の持つて行つたは、腹を出いた鮎だで、美しい奥様とは取替へぬ。……鱈を立てた魚を持ち來い、返して遣ると、慙うたんべい。」

さ、其處ぢやい！ 其處どころぢやに因つて私が後見助言の爲て、勝れた、優つた、新しい、

……可かの、生命のある……肉附もふつくりと、脚腰もすんなりした、膚の佳い、月に立てば玉のやう、日に向へば雪のやうな、へい、魔王殿が一目見たら、松脂の涎を流いて、魂が夜這星に成つて飛ぶ……乳の白い、爪紅の赤い奴を製作へると言はぬかい！

少いものを唆かして、徒勞力を折らせると何故で言ふのぢや。御坊、飛驒山の菊松が、烏帽子を冠つて、向顔卷を爲て手傳つて、見事に仕上げさせたら何とする。」

「然れば、言ふ通りに仕上つて、其處で其の木像が動くかな、目を働かすかな、指す手は伸び、引く手は曲るか、足は何うぢや、歩行かな。」

皆まで言はせず、老爺が其の眉、白銀の如き光を帯びて、太陽に向ふ目を輝かした。手拍子拍つやう、腰の麻袋をはたくと敲いたが、鬼に向つて臂を搔く、大膽不敵の状が見えた。

「天守の魔物は何時から棲むよ。飛驒國の住人日本の彫刻師、尾ヶ瀬菊之丞孫の菊松、行年積つて七十一歳、極樂から剩錢を取る年で、城ヶ沼の女の影に憂身を窺すお庇には、動く、働く、彫刻は生きて歩行く。……獨りですらくと天守へ上つて、魔物の閨に推參する。が、張も意地も附いて居るぞ、其の時嫌はれぬ用心さつせえ、と御坊に言託を頼まうかい。」

「可い、可い。」

ニヤ／＼と兩の頬を暗くして、あの三日月形の大口を、食反らして結んだまゝ、口許をひくひ

くと舌の赤う翻るまで、蠢めかせた笑ひ方で、

「面白い！ 旅のものぢやが、其も聞いた。此方が手遊びに拵へる、五位鷺の船頭は、翼で舵取り、嘴で漕いで、水の中で火を吐くとな……」

「天守の上から御覽なされ、太夫ホンの前藝にござります、へッへッへッ」と、老爺はチヨンと頭を下げて揉手を爲て言ふ。

「お、其の面魂頼母しい。満更の嘘とは思はん。成程、此方が造つた像は、目も瞬かう、歩行かう、厭なものには拗ねもせう。……然れば御身は、少いものの尻壓して石に成るまで働けと勵ますのぢや、で、唆かすとは思ふまい。徒勞力をさせるとは知るまい。が、私は、無駄ぢや、留めい、と勧める……其の理由を言うて聞かさう。其處で、老爺。」

「おい。」

「御身が言ふ、其の像には血が通ふか。」

「血が通ふか？」と、聞返す。

「然ればよ、針の尖で突いても生命を絞る、其の、あの、人間の美しい血が通ふかな。」

「……」と、老爺の眉がはじめて顰む。

黒坊主は嵩に懸つて、

「まだ聞きたい。御身が作の其の膚は滑かぢやらう。が、肉はあるか、手に觸れて暖味があるか、木像の身は冷たうないか。」

「はてね」と問を怪む中に、老爺の、些とひるんだのが、頬に出づる。

「第一肝要なは口を利くかな、御身の作は聲を出すか、ものを言ふかな。」

「馬鹿な事を、無理無體ぢや。」

と、老爺は呆果てた様子であつた。

「理も非もない。はじめから人の妻を掴み取つてものを言ふ、悪魔の所業ぢや、無理も、無體も法外の沙汰と思へ。此處を聞けよ、二個の人。…御身達が、言ふ通り、今新しく遣直せば、幾干か勝れたものは出来よう、がな、其は唯前に較べて、些と優ると言ふばかりぢや。」

其も可からう、何も持たぬ、空しい乏しいものに取つたら、御身達が作り更めると云ふ其の木像でも、無いよりは増しぢや。品に囚つて、美しいとも、珍らしいとも思はうも知れぬ。

けれどもな、天守の主人は、最う手の内に、活きた、生命ある、ものを言ふ、血の通ふ、艶麗な女を握つて居るのぢや。可いか。其に代へようと言ふからには、螢と星、塵と山、露一滴と、大海の潮ほど、抜群に勝れた立優つたもので無いからには、何を亦物好きに美女を木像と取り換へようぞ。

彫刻した鮎の泳ぐも可い。面白うないとは言はぬが、煎る、焼く、或は生のまゝ、其の肉を啖うと思ふものに、料理をすれば、炭に成る、灰に成る、木の切を何にせい、と言ふ了簡だ。

悪魔は、今其の肉を欲する、血を求むる…佛が鬼女を降伏してさへ、人肉のかはりにと、柘榴を與へたと言ふでは無いか。

既に目指す美女を囚へて、思ふがまゝに勝矜つた對手に向うて、要らぬ償ひの詮議は留めろ。何うぢや、それとも、御身達に、煙草の吹鼓を太陽の炎に變へ、悪魔の煩惱を焼亡ほいて美女を助ける工夫があるか。すりや格別ぢや。よも有るまい。有るか、無からう。…

それ、徒勞力と言ふ事よ！ 要もない仕事三昧打棄つて、少い人は妻を思切つて立歸れえ。老爺も要らぬ尻押せず、柔順に妻を捧げるやうに、少いものを説得せい。

勝手に、木像を刻まば、刻め、天晴れ、出来したと思ふなら、自分に其を女房のかはりにして、断念めるが分別の爲慮だ。見事だ、美しいと敵手を強ふるは、其方の無理ぢや、分つたか。」

と衝と指を上げて雲を指した。

天守の主人の言託は此の通り。更めて其の印を見せう。……先刻にも申した、鮫膚の、縮毛の、醜い汚い、木像を、仔細ありげに装うた、心根のほどの苦々しさに、へし折つて捻切つた、女の片腕、今返すわ、受取れ。」

と、法衣の破目を潜らす如く、懐から抜いて、ポーンと投出す。

途端に又指を立てつゝ、足を一幅、坊主が退つた。孰も首垂れた二人の中へ、草に、甲をつけ、あはれや、其でも媚かしい、優しい腕が仰向けに落ちた。

雪枝は唯肩を抱いて、身を絞つた。

老爺は、さすがに、まだ氣丈で、對手が然までに、口汚く罵り嘲ける、新弟子の作の如何なるかを、はじめて目前驗すらしく、横に取つて、熟と見て、弱つたと言ふ響み方で、少時ものも言はなんだ。薄うは成つたが、失せ果てない、底光のする目を細うして、

「いや、御出家。」

と調子を變へて、

「蟲の居所で赫とも爲たがの、考へて見れば、お前様は、唯言託を頼まれたばかりの事よ。何も喰つて懸るには當らなんだ。……が又お前様とても何も、これ、此の少い人に怨も恩も報もあらつしやる次第でねえ。……處で、ものは相談ぢやが、何とかして、其の奥様を助けると言ふ工夫

はねえだか、なう、御坊。人助は此方の勤ぢや、一つ折入つて頼むだで、勘考してくらつせえ。」とがらりと出直る。

四十二

これを聞くと、然もあらん、と言ふ面色した、坊主の氣色や、和らいで、

「然れば、然う言はれると私も弱る。天守からは、よく捌け、最早や婦を思ひ切るやう少い人を悟せ。」とある……御身達は生命に代へても取戻したいと斷つて言ふ。

で、其を取戻す唯一つの手段と言ふのが、償ひの像を作るにある、其の像が、御身たちに、「え、え、え、最う、能う分つた。何ぼ私が願卷しても、血の通ふ、暖い彫刻物は覺束ないで、……何とか、別の工夫を頼むだ。最う恚なものは」と、手にした腕を、思切つたしるしに、擲けようとして振上げた、……其の拳を漏れて、ころ／＼と采が溢れて、一か六か、草の中に、ぼつりと蟋蟀の目に留んぬ。

三人が熟と視めた。

坊主が先づ、

「老爺……と心ありげに呼んだ。

「はあ、是ぢや、」

と采の上で蓋するやうに、老爺は眉の下へ手を翳して、

「ちよつくら氣が附いた事がある、待たつせえ、御坊……」

「……………」

「少い人も何う思ふ。お前様が小兒の時、姉様にして懐かしがらしたと言ふ木像から縁を曳いて、過日奥様の行方が分らなく成つた時から廻り繞つて、采粒が附き絡ふ。今此處に采がある。……此の山奥に雙六の巖がある。其處も魔所ぢやと名が高い。時々山が空に成つて寂すと、ころ／＼と采を投げる音が木樵の耳に響くとやら風説するで。天守にも主人があれば雙六巖にも主が棲まう……どちらも膚合の同じ魔物が、疾え話が親類附合で居ようも知れぬだ。魔界は又魔界同士、話の附け方もあらうと思ふ。何うだね、御坊。」

坊主も二三度頷いた。で、深く其の廣い額を伏せた。

「いや、可い處に氣が附いた。……何にせい、此の上は、各々我を張らずに人頼みぢや。頼むには、成程其の邊であらうかな。」

「行つて見べい。方角は北東、槍ヶ嶽を見當に、辰巳に當つて、綿で包んだ、あれ／＼天守の森の枝下りに、峰が見える、水が見える、又峰が見えて、水が曲る、又一つ峰が抽出て居る。あの

空が紫立つて、ほんのり桃色に薄く見えべい。——麻袋には晝飯の握つた奴、餘るほど詰めて置

く、ちやうど僥倖。山の芋を掘つて横嚙りでも、一日二日は凌げるだ。遣りからかせ、さあ、ご

ざい。少い人……お前様、其の采を拾はつしやい。御坊よ。」

「乗りか、つた船ぢや、私も行く。……」

で、連立つて、天守の森の外まはり、濠を越えて、少時、石垣の上を歩行いた。

其時、十八九人の同勢が、ぞろ／＼と、野を越えて駈けて來た。中には巡查も交つたが、早や濠の向うの高い石垣の上に、森の枝を傳ふ體の雪枝の姿を、小さな鳥に成つて、雲に入り行くと視めたであらう……

手を舉げ、帽を振り、杖を廻しなどして、わあわつと聲を上げたが、其の内に、一人、草に落ちた婦の片腕を見たものがある、それから一溜りもなく裏崩れして、眞晝間の山の野原を、一散に、や、雲を霞と遁げ戻つた。

森の幕が颯と落ちて、雙六谷が舞臺の如く眼前に開かれたやうに雪枝は思つた。……惡所難路を辿りはしたが、然まで時が経つたとも思はず、別に其が爲に、と思ふ疲労も増さない。で、足を運ぶ内に至り付いたので、宛然、城趾の場所から、森を土堀に、一重隔てた背中合せの隣家ぐらるにしか感じない。——尤も案内をすると云ふ老爺より、坊主の方がすたく、先へ立つて歩行

いたが。

時に、眞先に、一朵の櫻が蹶躩として、霞の中に朦朧たる光を放つて、山懐に靡くのが、翌方の明星見るやう、巖陰を出た目に颯と映つた。

四五六谷

四十三

「叱！」

老爺が、警蹶めいた聲を、我と我が口へ響に掛ける。

トなだらかな、薄紫の崖なりに、櫻の影を霞の被衣、ふうはり背中から裳へ落して、鼓草と、葦の敷滿ちた巖を前に、其の美女が居たのであつた。

少時、一行は呼吸を凝らした。

見よ！ 見よ！ 巖の面は滑かに、質の青い艶を刻んで、花の色を映したれば、恰も紫の筋を彫つた、自然に希代の雙六盤。盤面には花を摘んだ、大輪の葦と鼓草とが、陽炎の輝く中に、鼓草は濃く、葦は薄く、美しく色を分つて、十二輪、十二輪、二十四輪の駒なるよ。……向う合

はせに區劃を隔てて、二輪、一輪、一輪、二輪、空に蒔繪した星の如く、浮彫したやう並べられた。

美女は、や、俯向いて、其の駒を、熟と視める風情の、黒髪に唯一輪、……白い鼓草をさして居た。此の色の花は、一谷に他には無かつた。

軽く其の黒髪を戦がしに来る風もなしに、空なる櫻が、はら／＼と散つたが、鳥も鳴かぬ静かに、花片の音がする……一片……二片……三片……

「三つ」と鶯のやうな聲、袖のあたりが揺れたと思へば、蝶が一ツひら／＼と来て、盤の上をすつと行く。姫は一人して雙六を遊ぶらしい。

「一つ、」
美女は又算へて、鼓草の駒を取つて、格子の中へ、……葦の花の色を分けて、靜に置替へながら、莞爾と微笑む。……

氣高い中に其の優しさ。

「は、」と、思はず雪枝は、此方に潛みながら押堪へた息が發奮んだ。

「誰？……」

と美女の聲が懸る。

老爺が咳を一つ故として、雪枝の背中を丁と突出す。これに押出されたやうに、踉蹌いて、鼓草、堇の花を行く、雲踏む浮足、ふらくくと成つたまゝで、雙六の前に渠は両手を支いて跪いたのであつた。

坊主は懐中の輪袈裟を取つて懸け、老爺は麻袋を探つた、烏帽子を丁と冠つて、更めてすつと出た。

美女は密と鬢を壓へた。

聲も出せぬ雪枝に代つて、老爺が始終を物語つた――

坊主は、時々眼を開いて、聞澄す美女の横顔を窺ひ見る。

「お姫様、」

と――語り果てて――老爺が呼んで、

「お助けを遣はされ、さあ、少い人、願へ。」

「姫様、」

雪枝は、寔れに寔れた人間の顔して見上げた。

「上臈どの、」と坊主も言足す。

姫は引合せた袖を開いた。而して、

「天守のお使者、天守のお使者。」

二聲呼ばるゝ。

「やあ、拙僧が事か、と……間を措いて坊主が答へた。

「あの、其の指をお指しになれば、天守の方の、お心が通じますか。」

「如何にも。」と片手を握つて、片手を、其の蒼い頬げたに並べて、横に開いて應じたのである。

「雙六を打つて賭けませう。私は其の他の事は何にも知らぬ。……而して、私が負けましたら、

其切仕方がありません。もし、あの、私が勝となれば、此のお方の、其の奥様を、恙なうお戻し

になりますやうに……お約束が出来ませうか。」

と物優しいが、力ある聲して聞く。

坊主は言下に指を立てて雲を指した。

「――天守に於ては、(豫て貴女と雙六を打つて慰みたいが、御承知なければ、致しやうも無かつ

た折から……丁ど僥倖、いや固より望み申す處……)とある！」

四十四

姫は世にも嬉しげに……早や頼まれて人を救ふ、善根功德を仕遂げた如く微笑みながら、左右

に、雪枝と老爺とを艶麗に見て、清しい瞳を目配せした。

「そんなら、私が勝ちましたら、奥様をお返しなさいませぬ。」

「御念に及ばぬ。城ヶ沼の底に湧く……靈泉に浴させて、傷もなく、疲労もなく、苦惱もなく、健かにしてお返し申す。」

美女は、十二の敷の、黄と紫を、兩方へ、颯と分けて、

「天守のお方。どちらの駒を……」

「赫耀として日に輝く、黄金の花は勝色、鼓草を私が方へ。」

と瘦せた頬げたの膨らむまで、坊主は浮色に成つて笑を含んで、駒を二つづゝ六行に。

同じく二つづゝ六行に……紫の格子に並べた。

「紫は朱を奪ふ、お姫様墓の色が、勝負事には勝色ぢや。」

と、老爺は盤面を差覗いて、坊主を流眊に勇んだ顔色。

これに、苦笑ひ爲て口を結んだ、坊主は心急ぐ様子が見えて、

「さ！ 上藤。」

「お客なれば貴僧から、」

「や、采は、上藤。」と高聲で言つた。

「空を行く雲の敷、」

と眉を開いて見上ぐる天を、白い、雲が、来ては、消え、白い、雲が、来ては、消える。

「櫻の花の散るのを敷へ、舞ひ来る蝶の翼を算んで、貴僧、私と順々に。」

坊主は頷いて袈裟を揺つた。

「言ふ目。」

と高く美女が。

「乞目、」

と坊主が、互に一聲。鶯と、梟と、同時に聲を懸合せつ。

「一つ来て、二つぢや。」

と鶴の姿の雲を睨んで、鼓草は格子を動く。

ト美女は袂を取つて、袖を斜めに、瞳を流せば、心ある如く、櫻の枝から、花片がさらりと、

白き簪の花を掠める時、紅の色を増して、受け取る袖に翻然と留まつた。

「右が三つ、」

と袖を返して、左の袂を靜かに引くと、また花片が、ちらりと来る。

「ひとつと二つ、」

と堇の花が、白い指から格子へ入った。

「雲よ、雲よ、雲よ、」

と呼んで、景色ばんで、や、坊主があせり出した。——争ひの半であつた。

「雲が来る、花が降る。や、此の采は氣が長いぞ。見て居る内に斧の柄が朽ち、玉手箱が破れうも知れぬ。が、少い人、其の采を……其の采を出さつしやい。うつかり見惚れて私も忘れた。」

と目の覺めたやうに老爺が言つた。

青年は疾くから心附いて、佛舍利のやうに手に捧げて居たのを、密と美女の前へ出した。

「一つ振つたり、」

と、老爺が傍から、肝入れして、采を盤石に投げさせた。

「お姫様、それく、星が一つで、梅が五ぢや。瞬する間に、十度も目が出る。早く、もし、其

で勝負を付けさせえまし。」

「天下の重寶、私もつい是に氣が着かなんだ。」

坊主は手早く拾ひ取る。

「いえ、急いでは成りません。花の数、蝶の数、雲の数で無くつては。」と美女は頭を振つた。

「え、お姫様の！ 何うやら今までの乞目では、一度に一年も懸りさうぢや。お庇と私等は飢

うも、だるうも無けれど、肝心助け取らうと云ふ、奥様の身をお察しやれ。一息に血一滴、一刻に肉一分は絞られる、削られる。……天守の梁に倒で身の鞭に暇はないげな。」

「其の通り。」と傲然として、坊主は身構へ爲て袖を掲げた。

四十五

美女の顔の色は、早や是非なげに見えた。

一が起き、六が出で、三に變り、二に離り、五が並ぶ。天に星の輝く如く、采の目の疾く、駒の烈しく動くに連れて、中空を見よ、岫を湧き、谷を飛ぶ、消えた雲が残り、續く雲が累り、追ふ雲が結着いて、雲は、やがて、厚く、雲は、やがて、濃く、既にして、近くなり、低く成つた。

忽ち一片、美女の面にも雲の影が映すよと見れば、一谷は暗く成つた。

鋭き山嵐が颯と來ると、舞下る雲に交つて、漂ふ如く堇の薫が濃としたが、拭ひ去つて、つと消えると、電が空を切つた。……坊主の法衣は、大巖の色の亂れた雙六の盤を蔽うて、四邊は墨よりも蔭が黒い。

神

ト暗夜の如き山懷を、櫻の花は矢を射るばかり、白い雨と散り灌ぐ。其の間をくわつと輝く、電光の縫目から空を破つて突出した、坊主の面は物凄じいものである……

唯見れば、頭に、無手と一本の角生ひたり。顔面黒く漆して、目の隈、鼻頭、透通る紫陽花に藍を流し、額から、頤に掛けて、長さ三尺、口から口へ其の幅五尺、仁王の顔を上に二つ、下に三つ合はせたばかり、目に餘る大きと成つて、カチ／＼と齒の鳴る時、鰐かと思ふ大口を赫と開いて、上頤を嘗める、舌が赤い。

「騒ぐまい、時々ある……深山幽谷の變ぢや。少い人、誰の顔も、何の姿も、何う變るか知んねえだ！ 驚くと気が狂ふぞ、目を塞いで踞れ、蹲め、突伏せ、目を塞げい。」

と老爺が呼はる。

雪枝はハツと身を伏せて、巖に吸込まれるかと呼吸を詰めたが、胸の動悸が、持上げ、揺上げ、山谷盡く震ふを覺えた。

殷々として雷が響く。

音の中に、

「切らう！」

と思切つた美女の、細い透る聲音が、胸を抉つて耳を貫く。

「何を！ 切ればと云うて、早や今は……乞目！」

誇立つた坊主の聲が響いたが、

「やあ、勝つた。」

と叫んで、大音に呵々と笑ふと齊しく、空を指した指の尖へ、法衣の裾が衝と上つた、黒雲の袖を捲いて、丈餘の全身が蒼く成つて、虚空へ電を曳いて飛ぶ。

と、風の餘波に寂として、谷は隣く間に、もとの陽炎。

が、日の光りや、弱く、衣のひた／＼と身に付く處に、薄い影が繊細くさして、散亂れた櫻の花の、背に頸にかゝつたまゝ、美女は、手を額に當てて、雙心盤に差俯向いて、もの惱ましげな風情であつた。

「お姫様。」

風に曲んだ烏帽子の紐を結直したが、老爺の聲も力が無かつた。

「姫様。」

と膝行り寄つて……雪枝が伸上るやうに膝を支いて、其の袖のあたりを拜んだ。

「頼まれたのに、濟みません。」

二筋三筋、後毛のふりかゝる顔を上げて、青年の顔を凝と視めて、睫毛の蔭に、花の雫、衝と光つて、はら／＼と玉の涙を落す。

老爺は鼻を詰らせた。

雪枝は身を絞つて湧出るやうに、熱い、柔い涙が流れた。

「断念めます……断念める……私は浦子を思切ります。何うぞ、其の代り、夢でも可い、夢なら何時までも覺めずに、私を此處に、貴女の傍にお置き下さい。」

貴女、生効ひのない私、罰も當れ、死んでも構はん。」

と前倒しに身を投げて、犇と美女の手に縋ると、振りも拂はず、取添へて、

「雪様。」

と優しく言つた。

「え、」

いや、老爺も驚くまいか。

獅子の頭

四十六

「お懐しい。私は貴下が七歳の年紀、お傍に居たお友達。……過世の縁で、戀しう成り、いつまでもいつまでも、御一所にと思ふ心が、我知らず形に出て、都の如月に雪の降る晩。其の雪は、

故郷から私を迎に來たものを、……歸る氣は些も無しに、貴下の背に凭か、つて、二階の部屋へ入りしなに、……貴下のお父様が御覽の目には、……急に貴下が大きく成つて、年ごろも對くらゐ、私と二人が夫婦のやうで、熟と抱合ふ形に見えて、……怪しい女と、直ぐに其の場で、暖爐の灰にされましたが、戸の外から、ひら／＼寄る……迎ひの雪に煙を包んで、月の下を、舊の此の故郷へ歸りました。

非情のものが、戀をした咎を受けて、其の時から、唯一人で、今までも雙六殿の番をして、雨露に打たれても、……貴下の事が忘れられぬ。

其の心が通ずるのか、貴下も、年月経ち、日が経つても、私の事をお忘れなさらず、昨日までも、一昨日までも、思ひ詰めて居て下さいましたが、奥様が出來たので、つい、餘所事になさいました。

それをお怨み申すのではない。嫉妬も猜みもせぬけれど、……口惜い、其がために、敵から仕事事の恥辱をお受け遊ばす。……雲、花片の敷を算めば、思ふまゝの乞目が出て、雙六に勝つたのに、……唯一刻を争うて、焦つてお悶え遊ばすから、危いとは思ひながら、我儘おつしやる可愛らしさに、謹慎も、つい忘れ、心が亂れて、よもやに曳かされ、人間の采を使つたので、效なく敵に負けました。貴下も、悪い、私も、悪い。

あゝ、花も恠う亂れぬうち、雲の中から奥様を助け出し、こゝへ並べて、蝶の蔭から、貴下の喜ぶ顔を見て、其の後で名告りたうございました。」

と、しめやかに朱唇が動く、花が囁くやうなのに、恍惚して我を忘れる、雪枝より、飛驒の國の住人以つての外、畏縮に及んで、

「南無三寶、あやまり果てた。」と、烏帽子を搔いて猪首に窘む。

「いえ、此も定まる約束。……しかし、尙ほ懐しい。奥様を思切り、世を捨てても私の傍に、命にかけて居ようとおつしやる。其のお言葉で奥様は救はれます。……私も又命にかけても、お望を遂げさせませう。」

さあ、貴下、あらためて、奥様を償ふための、木彫の像をお作り遊ばせ、勝れた、優つた、生命ある形代をお刻みなさい。

屹と敵に不足は言はせぬ。花片を雪にかへて、魔物の煩惱の、ほむらを冷す、價値のあるのを、私が作らせ申ませう、……お爺さん、」

……見返つて、

「貴翁がお家重代の、其の小刀を、雪様にお貸し下さいまし。」

「心得ましてござる。」

謹んで持つて寄る、小刀を受取ると、密と取合つた手を放して、柔かに、優しく、雪枝の手の、堅く成つて指も動かぬを、撫でさすりつ、美女が、其の掌に掌らせた。

四邊を向し、衣紋を直して、雪枝に向つて、背後向きに、雙六敵に、初めは唯腰を掛けた姿と見えたが、褌を放して、盤の上へ、葦、鼓草の駒を除けて、采を取つて、すらりと身をば横に寝た。

陽炎が裳に懸つた。

美女の風體は、紫の格目の上に、虹を枕した風情である。

雪枝は、倒れたと見て、つゝと起つた。

「……雪様、私の目を、私の眉を、私の額を、私の顔を、私の髪を、此のまゝに……其の小刀でお刻みなさいまし。」

「や」と、老爺が吃驚して、齒の抜けた聲を出して、

「成程お天守で不足は言ふまい。が、當事もない、滅法界な。」

「雪様、痛くはない。血も出ぬ、眉を擧めるほどもない。突いて、斬つて、さあ、小刀で、此のなりに、さあ、……此のなりに、……」

「思切る、斷念めた、女房なんぞ汚らはしい。貴女と一所に置いて下さい。お爺さんも頼んで下

さい。最う一度手を取つて、

「其のお心の失せない内、早へ小刀をお取りなさいまし。……そんな事をおつしやつて、奥様は、今何うして在らつしやいます。」

それを聞くや、

「わつ」と泣いて、雪枝は横様に縋りついた、胸を伏せて、唯戦く……

徐ら、其の背を、姉がするやう、搔撫でながら、

「慙う成るのが定まり事。……人の運は一つづ、天の星に宿ると言ひます。其と同じに、日本國中、何處ともなう、或年或月或日に、其の人が行逢はす、山にも野にも、水にも樹にも、草にも

石にも、橋にも家にも、前から定まる運があつて、花ならば、花、蝶ならば、蝶、雲ならば、雲に、美しくも凄くも寂しくも彩色されて描いてある。……手を取合うて睦み合うて、もの言つて、

二人居られる身ではない。

唯形ばかり、何時何處でも、貴方が思ふ時に、其處に居る、念ずる時直ぐに逢へます、お呼び遊ばせば参られます。

早や、小刀を、……小刀を、……

「歸命頂禮、南無不可思議、歸命頂禮、南無不可思議。」

と唱へながら、老爺が拾つて渡した時、雪枝は犇と小刀を取つた。

「一刀一拜、拜め、頼め、念ぜよ、祈れ。」

と、勵まし教ふるが如くに老爺が言ふ。

「姫、姫、」

と勇ましく、

「疵を附けたら、私も死ぬ。」

と熟と見て、雪枝は小刀を取直した。

美女の姿ありのまゝ、木彫の像と成つた時、膝に取つて、雪枝は犇と抱締めて離し得なんだ。老爺が其の手を曳いて起して、さて、かはるゝ、負ひもし、抱きもして、嶮岨難所を引返す、

と二時が程に着いた雙六谷を、城趾までに、一夜、山中に野宿した。

其の夜の星の美しさ。

中にも山の端に近いのが、美女の像の額を飾つて輝いたのである。

翌朝、棟の雲の切れ間を仰いで、勇ましく天守に昇ると、四階目を上切つた、五階の口で、ツ

ト暗い中に、金色の光を放つ、爛々たる眼を見た。

一目見て、

「やあ、祖父殿が、」

と老爺が叫ぶ、……其なるは、黄金の鯨の頭に似た、一個青面の獅子の頭、活けるが如き木彫の名作。櫓を壓して、のつしとあり。角も、牙も、雙六谷の黒雲の中に見た、其だつたのである。

……

祖父の作に、久しぶりの話がある、と美女の像を受取つて、老爺は、天守に胡坐して後に残つた。時に、祖父が我ま、の詫だと言つて、麻袋を、烏帽子入れたま、雪枝に譲つた。

さて、温泉宿に歸つたが、人々は、雪枝の顔の色の清々しいのを視めて、はじめて渡した一通の書信がある。

途中より、として浦子の名で、(二人が結婚を爲ない前から、契りを交した少年の學生が一人ある。此の度の密月の旅の第一夜から、附絡うて、隣の部屋に何時も宿る……其さへも恐ろしいのに、つい言葉のはすみから、雙六谷に分入つて、二世の契を賭けようとする、聞けば名高い神祕の山奥、逆も罪深さに堪へないため、諸ともに身を隠す。)とあつた。

渠は神色自若とした。

あはれ、神は、香村雪枝を守らせ給ふ！

然うで無いと、恚くまでに戀慕つた女、氣が狂はずには居なかつたのである。

東京へ歸つて後、呼べば應へて顯る、雙六谷の美女の像を、唯目を開いて見るやうに、すらすらと刻み得た。麻袋の鑿小刀は、如意自在に働く。

彫像の成つた時、北の一天、俄かに黒雲を捲起こして、月夜ながら霞を飛した。

年經つて、再び雙六の温泉に遊んだ時、最う老爺は居なかつた。

が、城趾の濠には船があつて、驚ではない、老爺の姿が、木彫に成つて立つたのを見て、渠は蘆間に手を支へて、やがて、天守を拜した。

船に乗れば、すらくと漕いで出て、焼けないばかりか、もとの位置へすつと戻る。……

白

鷺

濡枯梗 立姿 女扇子 鷹の一軸 銀砂子 懷中繪具

二階の癩 流動物 後朝 薄い蝶々 火の接吻 兩方

電話 食箋 無念 蟲籠 廻舞臺 迷の辻 なよ竹

序

この頃人に誘はれて、京へのぼつて狂言見た、さす手ひく手に川鼓、祇園の窓に千鳥鳴く、妹がりならねど置炬燵の轉寢の夢さむれば、東都の朝は雪にして、白鷺の校正も三寸五臺と積りけり。勝手口には借金取、傍には春陽堂の居催促、どうしてくれると寝間着のまゝ、思ひ遣る瀬の障子越、梅ヶ香とめた雪模様、姿の派手の意氣張ながら、一枚小袖の膚薄き江戸の藝者に綿着せよ。あれちらくくと俤が、俤が。

明治四十年庚戌年二月

鏡 花